

---

# 三人一緒に幻想入り ~ the three heros and new trouble .

澄田 康美

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三人一緒に幻想入り ↗ the three heroes and new trouble .

### 【Zコード】

N 8807 M

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

今・・・幻想郷にまた、新たなる者が導かれた。  
世界は彼らを歓迎していたのか、それとも逆か・・・  
回りだした運命の歯車、もはや誰にも止める事はできない。  
彼らははたして、この世界に何をもたらすのか！？  
彼らを導く者は！？  
彼らを待ち受ける者は！？

今幻想郷に、新たなる物語が紡がれる！

## 序章 仲良し三人が幻想入り（前書き）

### 諸注意

作者（脳内構造が）中二です  
ほぼ自己満足です

二次設定おいしいです  
オリキキャラ出てきます

オリキキャラ多分強いです

中身がありません

表現力は皆無です

弾幕戦闘非想天測風味です  
結構ご想像にお任せします

以上を承諾した人だけ見てください

## 序章 仲良し三人が幻想入り

### 序章 仲良し三人が幻想入り

秋も中頃を過ぎた頃。

ここは田舎のある道。金曜日の真つ昼間からそこを暇そうな三人が歩いていた。

その内の一人が空を仰ぎながら、

? 1 「ねえ、暇だよね、僕達。」

と言つたのは三人のムードメーカー、鳥間 進だ。

逆にして被つた赤い帽子に紺色のパークー、すそをまくつた青い半ズボンと、いかにも子供らしい服装だ。

? 2 「まあ、世間一般から見たら、確かにわしら暇人やのう。」

頭の後ろに両手を当てながら、進に答えたのは三人のスポーツマン、

拳武 正だ。

頭に「H」と書かれたバンダナ、白い半そでジーパンで動きやすそうな服装だ。

? 3 「しょうがないだろ。今日の俺達の授業、午前中までだつたらな。」

二人を見ながら言つたのは三人のリーダー、戦動 陸だ。真つ黒な長袖長ズボンのフル付きの格好だ。

進「本当、何か起きてないかなー?」

と不満そうな顔で言った。

陸「うーん、そうだな。」

首をかしげ腕を組み考える。

そこで正は率直に、

正「わしらが幻想入り・・・とか?」

二人は正の言い切った感のある顔を見て笑った。  
その後陸が、

陸「30点」

と大真面目な顔で言った。

正「おい!30点はないやろ!」

声をやや荒げて突っ込んだ。

進「じゃあ0点。」

と陸と同じ感じで言った。

正「下げるなやー!」

とセツキとほぼ同じ調子で突っ込んだ。

そんなくだらない会話を続け、あてもなく歩いている内に、彼らの目の前に古臭い小物店が見えてきた。

進「あ、あれ見てよ。」

とその小物店を指差した。

陸「あれがどうしたんだ?」

進「どうせや、このまま歩き続けるぐらーなら、あの店で休もうよ。

」

正「おいおい、何であんな所で休むんや。あれ絶対休むよいなとこやないって。」

陸「わかつてないなあ、休めなくとも暇はつぶせるだろ?」

と進に賛同するよひに言った。

進「ほーら、二対一で僕の勝ちだあ。」

とキラ(神)ばっつの慢心顔を正に向けた。

正「……しゃあないのよ。」

その様子に呆れながら、ため息混じりに言った。

店内に入る三人。

外見通り古い物ばかりが置いてある。

そして圧倒的に胡散臭かった。

正「おー、何か古臭い物ばつかやのう。」

店内を見渡し言った。

進「ねえ、見てよこれ。」

そう言うと進は手に何かを持っていた。

それは三人の人の絵が書いてあるカードだ。

進「何かさ、僕達みたいじゃない?」

それを一人に見せながら言った。

正「そうか?」

疑問たっぷりの視線を向ける。

陸「なるほど、銃を持った奴にボクシングスタイルの奴、そして間でジャンプしている奴か。確かにな。」

と説明気味に言った。

進「でしょ。銃を持ったのは陸。ボクシングスタイルは正。その間のは僕だ。」

とこれまで説明気味。

正「おいおい、わしがボクシングスタイルかい。」

その言葉に対し、呆れ気味に言った。

進「だつて、」の二人で正が一番体育会系じゃん。」

正「何やねんその理由…適当すぎるやつ…？」

軽く怒りながら言った。

陸「まあまあ、物の例えだしな。落ち着けよ。」

正をなだめる様に言った。

進「じゃあ僕、これ買つてくれる。」

とすぐさま会計の所に行つてついた。

正「え？ それ買つ気か？」

陸「そうか、じゃあ俺も、これ買つてくかな。」

そつ言つと、陸はいつのまにか手にモーテルガンをいくつか持つていた。

正「ええ！？ お前もかい！？」

軽く驚きながら言った。

陸「どうした？ これはただ俺が買いたいと思つただけだ。正は別に何か気にしなくてもいいだろ？」

と正を見て言った。

正「・・・しゃ あなたのへ。」

と空氣を読んで近くにあったサポーターを手に取った。

進「あ、やっぽりそれ買つんだ?」

まるで読んでいたかのように言った。

正「やかましこー! まだお前の前ひのせこやかー。」

と囁りかに逆切れする。

進「何で何でー?」

と正に向かへ迫る。

陸「とりあえず、これ持つて行くか。」

と三人を代表してそれらを持つていく。

正「おー、いやんとわしらの分計算せえよ。」

陸「わかってる。E9で俺らーだ。」

正「おうと待てやーーーじんだけサポーター高いねんーーー。」

テンション高く品物に指を指す。

進「えーっと、3000円ぐらい…」

と値札を見て言つ。

正「それやつたら、他の奴どんだけ安いねん…」

同じ調子で言つ。

陸「そつだな、このPSG-1のモデルガンは…28000円だな。」

と値札を見て言つた。

正「おーい、公平つて言葉知つてる陸君?」

と遠くに言つた。

進「いいじゃん、正お金一杯持つてるし。」

正「おい…なんだこんな所でお前等においいらなあかんねん…」

陸「ははは、それじゃ別々に持つて行くか」

と言つて二人に荷物を返した。

結局三人はそれらを会計の所まで持つて行つた。

陸「すいません、これいくらいます?」

と最初に言つた。

その時、正は陸の後ろから店員をじっと見ていた。店員はフードを被つていて容姿がよくわからない。

正「（妙やのう、何か見覚えあるわ。誰やろ？）」

と頭の中で考えた。

そして店員は口を開き、流暢にこうつづった。

？「代金はいらないわ。そのかわり・・・」

そのまま続けて言った。

？「幻想郷にいらつしゃい！」

そう言つた瞬間、三人の足元に幻想の隙間が現れた。

進「え？え？え？・・・」

正「ちよ！？おまー？？？」

陸「まいったな・・・」

と人々がリアクションを取つて落ちていったのであった。

## 序章 仲良し三人が幻想入り（後書き）

初めまして皆さん。

友達のPC借りて投稿させてもらいました。

どうですかみなさん、あまりにもひどいでしょう？

実はこの話は一人の友達と協力して、動画投稿してみようとした試みで、見事に失敗（むてかやつてしまらじない）しろ自然消滅した夢の残骸です。

まあその事自体はまつたく気にせず、この話はわしのPCでただ腐つていた訳です。

そんな時、わしの友人（投稿協力させてもらつてる人）のバクテリアンさんに投稿小

説やらないか？って言われて、まあ小説ならできるかな～って思つてきまぐれ+暇つぶしにやらせてもらつました。

もちろん原文のままでは駄目すぐるのでこれでも改変しましたけど、それでも素人のレベルよろしくな感じですけどね。

まあ読んでくれるだけでもいいんです。

でも・・・せつかくですから、感想、評価等してくれたら作者は舞い上がつて次回作を速攻で書き上げる所存です。

ではみなさん、またの機会にて。

バクテリアン「誤字、脱字等の指摘も奴の為にこちらへお願いします」

## 第一章　闇との遭遇（前書き）

あらすじ

- 1、三人がいた
- 2、店に入つた
- 3、幻想卿？に送られた

ではどうぞ

## 第一章 間との遭遇

### 第一章 間との遭遇

意識を失った正。

しばらくして、正は田を覚ました。

正「あたた・・・」りや軽く頭打つたのう・・・」

頭を触りながらきょろきょろと辺りを見渡した。

見渡した感じは日が差し込み、木々に囲まれた場所だつた。

正「・・・何があつたんや、わし?」

周りを見渡しながら立ち上がり、とりあえず歩こうとした。

その時、近くに何かが落ちている事に正は気がついた。

それは、さつき正が買おうとしていたサポーターだ。

正「ん? 何でこれがここに・・・」

少し考えた後、正はとりあえずそれを装着した。

ついでに後ろポケットに入れてあつた軍手もつけてポーズを取つた。

正直目も当たられないほどださい。

正「・・・結構ええやん。これ。」

と軽く自己満足した後、再び歩き出した。

しばらく歩いていると土ではあるが舗装された道に出た。

正「どうしたに行くべきかのう・・・まあ適当に左にでも出るか。」

正から見て左の方に歩いていった。

あてもない道を歩きながら、正は色々と考えていた。

正「それにしても、ここは一体どこや？わしは確か古物店にいたはずや。やのに目を覚ませばこんな森で一人。いつたいわしに何が・・・」

・

その時、正の頭の中にふと小物店のあの店員の姿と台詞が浮かんだ。

正「確かにあの店員は言つてたのう・・・幻想卿にいらっしゃって・・・そんじや・・・わしは・・・」

そう考えた時、正は自身を否定するように顔を横にブンブンと振った。

正「いやいや！それより、まずは一人を探す事が先決や。まだここが幻想郷と決まつたわけ・・・」

そう言つていると、頭上から誰かの声がした。

?「あはは、人間だ。人間だ。」

その声が聞こえた正は、上を見上げた。

そこには満面の笑顔を浮かべた少女が浮かんでいた。

そう、あのルーミアだ。

正は驚き、自分の目を疑つた。

正「あ、あり？わし、まさか幻覚でも・・・。」

ル「幻覚つて何の事？」

不思議そうな顔で正に尋ねる。

そこにある存在感と、えもいわれぬ感覚が、それを幻覚でないと正に知らせた。

正「・・・」りや、幻覚やないのう・・・」

ル「んー？お兄さん、何だか見ない顔だね。」

正「そりやそりや。一応聞くけど、ここって幻想郷か？」

ル「うん、そーだよ。」

正「そか。ありがとのう。」

ル「じゃあさ、私も聞きたい事があるの。」

れつきまでとは明らかに違う笑顔を向けて言った。

ル「あなたは食べてもいい人？」

ルーミアの周りの闇が強くなり、口元からはよだれがこぼれていた。正はその様子から全てを悟つた。

正「駄目な人・・・言つてもあかんか。」

ル「ま、食べてもいいよね」

もはやルーミアにとって、正は獲物でしかなかつた。  
闇が強くなり、今にも正に襲い掛かりそうだ。

正「しゃあない、このままお前さんに食われるのも癪や。相手した  
らうやないか。」

ルーミアに応えるように、正も一応構える。

誰が言つた訳でもなく、戦いは始まつた。  
お互い道の上でぶつかり合つように相手に向かつたかと思つと、正  
はルーミアの横を通り過ぎ、ダッシュで逃げ出していった。

正「調子のんなや！ 何もわからへんのに、戦えるわけないやろ！」

少し振り向いて言つた後、一目散に走つていつた。

ル「・・・」

少しぼーっとした後、反転し、走る正を飛んで追いかけいつた。  
おそらく正の突発的な行動に戸惑つたのであらう。  
必死に逃げる正だが、ルーミアの飛ぶスピードに追いつかれる。

ル「逃がさないよ！」

正に対して弾幕を放つた。

正「ちよつーたんまたんまー！」

放たれた弾幕を何とか避け、転がりながら森の中に逃げた。  
正は森の木の陰に隠れたが、ルーニアはもうすぐ近くにいる。

ル「・・・なんでだらうね、私と会つた人つていつもやってほとんど逃げちゃうんだ。でも私は鬼ごっこ好きだよ。だつて捕まえた時のあの顔が大好きだもん お兄さんはどんな顔してくれるかな あはは」

殺意でも悪意でもない、あくまでも純粹に自分の気持ちを語る。  
交代のない一度だけの鬼ごっこ。鬼から隠れる正は考えを巡らした。

正「（まことに、まことに、このままやと確実にやられる。どないすれば・・・）」

考える中、正はふと自身の手を見た。  
少しぼろこ軍手に汗がにじんでいた。

正「（やつやのひ、いつなじゅやるしかあらへん・・・）」

手を握り締め、拳を固める。

そして正は隠れるのをやめ、ルーニアの正面に出た。

ル「あ、隠れるのやめたんだ。」

正「ああ、まじめにここと事は無しや。行くでー。」

その場でルーニアに右ストレートを構え出した。

ル「へえ、そこから届くの? ちょっと無理じゃないの?」

正とルーミアの距離は、少なく見積もつても10メートル強だ。どう見ても拳が届くはずはない。

正「画かくんのせねかうとる・・・やかういりあるんだやーー。」

その体勢のまま、ルーニアに対して思いつきり飛び込んだ。

その飛び込みは、何とルーニアのいる所にまで達した。

「あれ？うそ？本当に届いた？」

思いもかけない事とあまりのスピードに、ルーミアはまつたく対応

正はそのままルーミアにパンチを放つた。

さふらが三で倒れた

正「……マジで？ 駄目元でやつたら届いた……もしかしてこれ  
が……わしの能力なんか！！」

大声を上げ、ガツツポーズを取つた。

不意の事に正は対応しきれていなかつた。

弾幕は正の体に数発当たつてしまつた。

反動で後ろに飛んでいき、倒れる。

打ってきたのは、片頬に少し腫れた後が出来たルーミアだ。  
どつやーらルーミアは、倒れてすぐに起き上がつてきつたようだ。

ル「びつくりした～。あんな所から届くなんて。すっごいジャンプ  
だね。」

警戒に話している様子から、正のパンチはあまりダメージが無かつ  
たようだ。

正「ぐう・・・・・」

迫つてくるルーミアから逃げようとも、正の体は言つ事をきいてい  
なかつた。

どつやーらルーミアの弾幕のよつて、体にかなりのダメージを負つた  
ようだ。

ル「鬼、これは終わりだね。私の勝ちで。」

正「くそお・・・・」  
「が・・・・」  
「わしの終わりなんか・・・・」

薄れていく正の意識。

もはや視界には何も移らなかつた。

ル「じゃあ、いただきま～す。」

正に手を伸ばすルーミア。

正が今にも食べられそうなその時、その場にどこからともなく何か  
が飛んできた。

それは大きな音とともに強烈な光を放つた。

ル「！」

辺りが閃光に包まれ、ルーミアは自身を闇で覆つた。ルーミアにとつて光は天敵だ。

閃光が晴れ、ルーミアは覆つていた闇を解いた。

その場にさつきまでいた正はいなかつた。

辺りを見渡したが、それらしい人影もない。

ル「ちえ、せつかくのごはん逃しちゃった。ざーんねん。次会う時は、ぜーつたい逃がさないんだから。」

まだ痛みの残る頬を触つて、ルーミアはその場を去つたのだった。

後書き

思い上がつてすいません。

こんなページの中の小説がたつた一話だけ書いて評価してもらえる訳ないですよね。むしろ評価貰えてたら「冗談もいい所ですよ。

反省したわしはまず5話まで書き上げて上げる」とこしました。話は出来ているので後は手直しだけです。

正直思い上がつている所はありました。自分はこれでも才能あるんじゃないかな?とか。結構いけるんじゃないかな?とか。

今は頭が冷えて丁度いい感じです。とりあえずこの文章はネットカフェで打つてます。血の匂いまだに生還しないので。

なので、何となく見てている人とか、通りすがり的な人とか、暇だつたら評価してください。もちろん適当でかまいません。

まあこんな事書いてる時点で下心ありありですけどね〜（笑）。

こんなわしですけど、どうか暖かい田で見てやってください。

「メントで質問とか指摘とか大歓迎です。どうぞお願いします。

もちろん作者の事なんかも・・・え?聞きたくない?興味ない?ちよつとは思つてくださいよ〜・・・

さて、こんな事よりも次章のが当然気になりますよね~。もうひとあ  
りますよ。

では、第三話をお楽しみに。

P.S、作者は高3です。

## 第三章 陸の命流（前書き）

あいすじ

- 1、正はルーニアに出售った
- 2、正が食べられそうになつた
- 3、とりあえず正は助かつた

ではどう

第三章 陸と合流

？「…………あら、おー、起きあわ。」

あきほどの戦いで氣絶した正に、声をかける者がいた。

正「なんや……一体誰や? お迎えか?」

寝ぼけながら田を覚ますと、正の視界にゴーグルを着けた者がいた。

？「…………やつと田を覚ましたか。」

正「ん? 誰やお前?」

？「あいおい、俺が誰かわからないのか?」

そう言つてその者はゴーグルを上に上げた。  
それは正にとつて見覚えのある顔であった。

そう、ゴーグルをつけていたのはあの陸本人だつたのだ。

正「おおー陸やつたんか! これリアルか? ていたた……」

驚くと同時に体の痛みで、正は今を現実だと判断した。

陸「まったく、お前との再会がこんな形になるとはな。」

正「ひな、ひなと待てや。わしこそえはわし、確かルーニアにて・・・

「

そう言ひてすぐに周りを見渡した。

陸「安心しむ。ソレにルーニアはいない。」

正「え？ 一体全体どうこいつとやら？」

陸「そうだな、俺の事も含めて一から説明するか。」

やつて陸と正はその場で座つて長話を始めた

陸「俺はここに来て最初、香森堂の近くに倒れてたんだ。」

正「そうか、わしは森の中やつたわ。」

陸「で、田を覚ましてから色々考えてな。まずはここはどこか尋ね  
やつと香森堂の中に入つていつてんだ。」

正「そんで？」

陸「その時はまだここがどこかわからない訳だから、当然入つたと  
こも香森堂かわからなかつた訳だ。」

正「つてことは、お前はその建物が何かもわからず入つたんか？」

陸「危なそうな感じは無かつたからな。人でもいればと思つてな。」

正「で、」一りんがいた訳か。」

陸「ああ、名前を聞いた後、ここはどこかって聞いたら……」

正「香森堂って言われたんか。」

陸「そうだ。その時やっと理解したんだ。俺は幻想郷に来たんだって。」

正「どう想つたんや?」

陸「いや、まさか正が言った〇点のジョークが現実になると思なくてな。」

正「おい、確か3〇点やったやろ?」

陸「それはさておき、その後でしばらく考えた後、まずはお前ら一人を探そうと考えてな。」

正「おー、わしもや。」

陸「だがここは幻想郷。いつ戦つかわからないからまずは武器が必要と思つてな。」

正「武器つて、香森堂にあつたんか?」

陸「いや、実は幻想郷に来たとき、俺の周りに何かがあつたことに気づいてな、一旦外に出て確認したら、あの時買おうと思つていたモデルガンがあつたんだ。」

正「でもモーテルガンやつたら、何の意味もないやろへ。」

陸「それがな、そのモーテルガンいじつてたら、本物つてことがわかつたんだ。」

正「マジかい！ 一体どいつてんねんあの店・・・でか今氣づいたんかい！」

陸「まあな。それから、こーりんが色々手榴弾を売つてゐて書つから、買つといたんだ。」

そつとつて正に現物を見せた。よく見たうことり製と書かれていることもない。

正「ええ！？ 香森堂にそんな物騒なもんあるんかい！？ どいつてんや幻想郷つて・・・」

陸「その時にゴーグルも買つたんだ。何かの役に立つかなつて。」

正「ほお、ううか。（役に立つもんかの）」

陸「その後こーりんに感謝して森の道を歩いていつたんだ。」

正「そんで、わしを見つけたんか。でも森の中のわしをどいつやつて見つけたんや。」

陸「それがな、道でお前がルーニアといふ所を見つけたんだ。」

正「ええ！？ ジャあその時からおつたんか。」

陸「ああ。」

正「じゃあなんで助けへんねんーあの時から結構やばかったんやでー！」

陸「いやあ、お前がどうするのか觀察しようとい悪いんだ。」

正「おこおこー。」

陸「まあ、お前はダッシュで逃げた訳だがな。」

正「だから、かなりやばかったんやつてー。」

陸「でも結構追いつかれたな。」

正「しゃあなこやひ、相手飛んでるんやから。」

陸「俺はルーニーの後ろ辺りにいてな、森に隠れてるお前を探してたんだ。」

正「そりながら。わしは氣づかんへんかったわ。」

陸「で、お前が出てきてこきなりあんな事してな。」

正「一か八かに出たんやー。」

陸「でもむへんこたよな。」

正「ああ、あの時はほんま奇跡やと想つたわ。」

陸「でもその後、お前がガツツポーズしてる所をルーミアの弾幕飛んできて当たって、こいつ何してんだと思つてな。」

正「おい…その台詞から考えたら、お前明らかにルーミアが立ち上がりてんの気がすることやないか！」

陸「ああ、その時は」こいつなるかと思つてな。」

正「ひつでえ…」

陸「実は言つとあの時そのままルーミアに食わすのもありかって思つてな。」

正「おーい、仮にも友達やるわしひっ。」

陸「それは可哀相だと思つてな。闪光手榴弾を投げてお前を助けたんだ。」

正「そんで、今に至るとな。」

陸「ああ。」

正「な~る。やつと納得したわ。」

陸「さすが脳筋。」

正「ほつとけ…」

陸「じゃあ、次は…」

正「進の捜索やの。」

そいつへ一人は立ち上がり、歩き始めた。

森の中を歩く中、陸は正の服装が気になつたのか、立ち止まつてしまじと見だした。

正「な、なんや? 何か変な所でもあるんか?」

陸「いやな、お前つてよく見たらあのサポーター着けてたんだなつて。」

正「ああ、せつかくやから着けたんや。」

陸「その軍手もか?」

正「ああ、これは元々持つてた奴や。」

陸「・・・だつせ。」

死んだような目で正を見る。

正「やかましいわーー。」

本田一番の大声で言つた。

正「それはそいつとや。」

陸「何だ?」

正「実はの、わし……もしかしたら、能力持つてるかもしね  
んのや。」

陸「ああ、ルーミアと戦つたときの、あの大ジャンプか。確かにあ  
のジャンプはカール・ルイスでもできそうにないな。」

正「今時カールルイスかい。でもそりやね？」

陸「だが、どんな能力かわかつてるのであるのか？」

正「そりやの……」

しばりく考へ込んで正はいつひつた。

正「すぐ飛ぶ程度の能力……？」

陸「ふうん。」

かなり適当に返事する。

正「リアクション軽いのうお前……！」

陸「わかつてないな、今はそれより進を探すべきだろ？行くぞ。」

そいつて陸はまた歩き出した。

正「それもそりやの。」

陸に続いた。

陸「あ、そうだ、言い忘れてた事があった。」

陸がまた立ち止まり、正に振り向いた。

正「なんや？」

陸「ここに来るまでに草拾つてな。食べるか？」

ポケットから取り出したその草は紫の斑がかかるつていて、どう見ても毒がありそうだ。

正「誰が食うかあ！」

その草を思いつきつ地面にはたいて言つた。

陸「そうか。じゃあ違う使い方を考えるかな。」

はたかれた草を拾い上げ、懷にしまつた。

正「（・・・）この事やからうくでもない事に使つやつやの（・・・）」

その様子を見ながら思つ正であった。

その頃、湖の畔で頭から真つ直ぐ突き刺さり、胴体辺りまで埋まっている進がいたのであった。

## 第三章 陸と山の合流（後書き）

後書き

こんにちわみなさん。これでも三話目です。

作者がいい加減なので今回は動きとかはとさだあつませんでした。あ、関係ないか。

とつあえず陸と山は合流しました。四話目で進と合流するかは秘密です。（マジ）

これまでの段階でいまだにキャラ紹介とかしてませんね。するかどうかはちょっとくらみなさんに聞きたいと思います。

いろいろなこりなこでこのまま行く予定です。まあ近い内にくる予定です。

前回から本当に反省してこらつてますので、みなさまが温かい目で見てやってください。

しつこじですけど質問大歓迎です。どうぞお願ひします。

わざわざ作者の（マジ）

こんな有様ですナビ、次はあの？が出来ますよー。

では、第四話をお楽しみに。

## 第四章 馬鹿と恵呂（前書き）

あらすじ

- 1、二人は再会
- 2、陸が色々あつた
- 3、進探索

ではどうぞ

## 第四章 馬鹿と阿呆

### 第四章 馬鹿と阿呆

？「モーリモーリ～ダイヤモンド～、カガヤク～星のよつて～。」

湖の畔に、調子つぱずれな声で歌っているのは氷の妖精、チルノだ。ぶらぶらとしていると、チルノは何かを見つけたようだ。

チ「ん？何だらあれ？」

見つけたのは、畔から両足だけ出ている進であつた。

チ「これは・・・もしかして・・・」

少し怯んだ後にこづ言い放つた。

チ「ダイダラボッチの指ね！」

どう見ても人の足にしか見えない物だが、チルノはなぜか確信して言った。

チ「まさかここでダイダラボッチに会えるだなんてね！指でこれら、体はどんなに大きいんだろう。戦いがいありそうだね！」

とりあえずそれに触るひつと近づく。するとその足がばたばたと動いた。

チ「わわわ！」

少しひっくりしたが、怯まず歩み寄る。

チ「どうやら田を覚ましたようね！」

多分間違つてはいない予想。

チ「その体、拝ませてもうつよー！」

その足を持つて大根のように引っこ抜くと、当然泥だらけの進が姿を見せた。

進・チ「・・・」

両者、眉一つ動かさず黙つたままになった。  
しばらくの沈黙の後、チルノが先に口を開いた。

チ「・・・ダイダラボッチって、指が人間なんだ！」

進「ねえ・・・君・・・」

進も応えるように口を開いた。

進「降ろしてくれないかな・・・」

と言つたので、チルノはその体勢のまま降ろした。  
当然進は頭から地面に落ちた。

進「・・・・・・」

悶絶しながらしづらじく辺りを転がつた。

五分ぐらいして、進は湖の中、パンツ一丁で体と服の汚れを落としていた。

進「もう、なんでこんな目に遭つたんだ・・・僕、何も悪い事しないのに・・・」

頭には漫画でよく見る大きなたんこぶができていた。

チ「ねえ、あんたつてさあ、」

服の水を絞つている進に、木の上からチルノが尋ねた。

進「何？」

湖から上がり、服を着ながら言つ。

チ「ダイダラボッチの指じゃないの？」

今だにダイダラボッチの指だと思つていいようだ。

進「違うよ。てか何でそうなるの？」

チ「なーんだ。がっかり・・・」

ため息混じりにショックを見せる。

進「それよりさ、僕も君に聞きたいことがあるんだけど。」

真つ直ぐな目でチルノを見て尋ねた。

チ「何よ?」

進「あのさ、君ってチルノだよね。」

チ「そうよ。あたいは幻想郷サイキョーのチルノよー。」

木の上から降りながら、ふんぞり返つて言つた。

進「じゃあ・・・やつぱりここって幻想郷なんだ!」

それと同時に、進はあることを考えた。

喜びを隠せず、体で表す。

進「(つてことは、他の一人はどうしてるんだろう?僕みたいに幻想郷にいるのかな?)」

じつと考え込んでいると、チルノがすぐ後ろまで来ていた。

チ「・・・あんたつてもしかして・・・」

改まつた顔で聞いてきた。

チ「外の人間?」

進「そうだよ。それがどうかしたの?」

チ「へ～、だつたら・・・」

急に顔つきが変わり、真剣になる。

チ「今ここで・・・あたいと勝負しなさい！」

進にビシッと指差した。

進「ええ！？僕は戦えない・・・」

と言つ間もなく、チルノは既に上空でスペルカードを構えていた。

チ「最近外の奴に負けっぱなしだからね！行くよ！氷符 アイシク  
ルフォール - e a s y -！」

そう言つと進に文字通り弾幕を放つた。

優美な弾幕ではあるが、宣言したスペルカードは、明らかに正面安  
地だった。

ただ立つているだけだがまったく進には当たらない。

チ「な、なんで当たらないのよー？」

わかりやすく？マークを頭に浮かべまくる。

その時、進は真面目な顔で言い放つた。

チ「君は確かに僕より強い・・・でも・・・あまりにも馬鹿すぎた  
んだよ！」

チ「な、なにい！？」

びっくりした後、空中からそのまま地に落ちていき、膝を折つて地に屈した。

チ「ばかな・・・ばかなばかなばかなばかなあ・・・」

地を叩き叫んだ。

チ「まさか・・・あたいが今まで負けていたのは全て・・・」

屈したチルノに近寄つてきた進が続けるように言った。

進「いや、負けてる理由は大方実力だと思つけど?」

チ「ですよね」・・・でも・・・あたいはバカなのね・・・」

今まで気づいてなかつたのか、やたら落ち込む。

進は落ち込んでいるチルノにそつと手を差し伸べこいつ言った。

進「大丈夫、君はひとりじゃない。」

精一杯の笑顔を向けて言った。

進「僕だってアホだよ!」

チ「アホ・・・」

不思議そつな顔で進を見る。

進「うん。だから・・・落ち込まなくてもいいじゃないか。」

チ「なんか・・・ありがと。」

差し伸べた手を握り締めた。

だがチルノとの温度差によつて、進の手はみるみる凍つていつた。

進「NO - - - - ! ! !

凍つた手を即座に引っ込めて叫んだ。

チ「あ、能力オフにするの忘れてた。」

握つた手をじつと見た。

進「このばかー！！」

チ「なによ、このアホー！」

しばらくの間不毛な言い合いをする一人であった。

## 第四章 馬鹿と阿呆（後書き）

後書き

ほのほのはだ・い・じ

なので氣持ちほのほのです。チルノはいつもあるべきですよ。

馬鹿はむしろ自覚していないよりも自己肯定している姿の方がよかつたかな？まあいいや。

とつあえず陸と正まさまたたく出ませんでしたね。いつ合流すんだろ  
う？

それは・・・その内です。

まあ、次回でわかると思いますので、しっかりと見てくださいね。

では、第五章をお楽しみに。

## 第五章 三人の再会（前書き）

あらすじ

- 1、進、チルノに出会った
- 2、チルノに挑まれた
- 3、口げんかになった

ではどうぞ。

いまだに不毛な言い合いを続ける進とチルノ。

そんな所に陸と正が来た。まだ陸達と進達との距離はある。ぱつと見子供みたいな喧嘩をしてくる一人を見て陸は、

陸「おい、あいつ・・・」

となぜか真剣な顔で言った。

正「ははは、何してんのかと思つたら、チルノとじやれとつたんかい。」

「冗談交じりに言つた言葉を遮るように、

陸「わかつてないな正・・・あれば・・・弾幕戦だ！」

正「ええ！？ そんな訳ないやろ！？ あれのどこが・・・」

陸の方を見て指を指しながら言つ正を無視し、陸は狙撃銃を構えた。

陸「待つてろ進！ 今援護する！」

今にもチルノに対して撃ちそうだ。

そんな陸を止めようと、正が陸に掴み掛かった。

正「おい！？何してんやお前！」

陸「離せ！…進を見捨てるのか正！？」

正「だから、どう見てもそんなんけりうまいもつてきから…」

もみ合いになつたその時、陸の銃が暴発した。

陸・正「…」

暴発した銃弾は進を襲い、進はその場に倒れた。  
チルノは突然の事に傍観とした。

陸・正「進！」

進の下に駆け寄る一人。

辺りにどうじょつもない空気が流れた。

正「おい進！…」

進を抱きかかえ呼ぶが進は返事をしなかつた。

正はひるがえつて陸をにらんだ。今までからは想像出来ないほどの  
気迫だ。

正「陸！お前…」

怒りの表情を陸に向ける。

陸「…」

正「おい・・・何か言つたひづりなんや！..戦動 陸！..」

無言の陸の胸倉に掴み掛かる。

陸「ふふ・・・はははははー..」

突然高らかに笑い出した。

正「何が可笑しいんや！..？」

掴み掛かった手の力を強める。

陸「だつて、進は寝てるだけなんだぞ？」

正「なんやでー..？」

そつ言われて進の方を見ると、進はいびきをかいて寝ていた。

正「何でや・・・そつき陸の銃に撃たれたはずやろ・・・」

陸「俺が使つた弾は、麻酔弾だからな。」

正「・・・何でそれを先に言わへんかったんや？」

今度は陸の方を見て言つた。

陸「いやな、進の為に必死になつてゐる前、面白くな。つい・・・

「

正「・・・そつか。」

冷静になり、胸倉から手を離した。

正「なあ、ちょっと上見てくれへんか？」

陸「え？ まあいいけど。」

そつ言つて空を仰いだ瞬間、正のアッパーが陸のあごに入った。

正「冗談もたいがいにせえやあ！」

陸「うめんちやーい！」

そんなやり取りの後、三人は各自のこれまでの事を説明した。

少年達説明中・・・

それが終わつて、三人は話し合いをしていた。チルノは少し近くで

暇をつに聞いていた。

陸「とうあえず、これからどうするかだな。」

正「まあ、ここから一番近そうな所に行へべや。」

進「近くもここナビや、われよつ靈夢にてひじやないの?」

正「あ、それもやうやの。」

陸「確かに、俺と進はともかく、正は能力を持つてゐる可能性があるからな。」

進「じゃあ、最初の目的地は博麗神社で決定だね。」

正「それはええけど、場所は誰が知つてるんや?」

進「いやいや、僕らはこの世界の地図知らないでしょ。」

陸「それもやうだな。」

正「つて事はまさか・・・」

そう言つて正は、ちよつと離れた所でさつきより暇をつけていた  
チルノを見た。

陸「そのままかだな。」

正「おいおい、あれほど並てにならん案内もないで。」

進「でも、僕達だけで行くのはもつと無理だよ。」

陸「いないよりましつて奴だな。」

正「それもそうやのう・・・」

進「じゃあ、僕が頼みに行くよ。」

そう言って進がチルノに交渉し、三人は内よりましなガイドに道案内をしてもらう事になった。

チ「さあ、あたいについて来なさい！」

そう言ってなぜかダッシュで先に行くチルノ。  
三人も走って追いかける。

正「それにしても、ほんまにあれが当てになるんかのう？」

陸「まあ、今はチルノを頼るう。」

こうして四人はとりあえず湖を出発した。

少年達移動中・・・

しばらくして、四人は森の中で歩みを止めていた。

進「ねえチル、この道で合つたの？」

チ「えーっと、確かにこを右に、次が左、次が……あれ? びっち  
だつける?」

ぶつぶつと念仏のよつよつ言つてこた。

陸「びっかり、道がわからなくなつてゐみたいだな。」

正「やつぱのつ。絶対迷つと困つとつたわ。」

呆れたよつこ小声で言つた。

チ「つるをこわねーあたいは普段飛んでるから、歩く必要なんてないのよー。」

聞こえていたのか正に逆切れする。

陸「やつて、じからびつあるかな。」

やつぱつと、すぐ近くの木の枝に止まつてゐる鳥の声が聞こえた。

正「いづなつたら、鳥にでも聞くか?」

「冗談混じつて言つてると、進がなぜか耳を澄ましていた。

正「ねいおこ、マジにするか進?」

進「うめん、ちよつと黙つて。」

正を制し、しばらして鳥の声を聞いた後進は、

進「もしかしたら……」

何かを思い立つたのか鳥に近づいていった。

正「おーい、ほんまに鳥に聞く気が進?」

正の言葉を無視し、進は鳥に話しかけた。

進「あのとおり、博麗神社つてどいか知つてる?」

そう言つと、鳥は返事をしたよつに鳴いた。  
しざりくじて、進が全員にこいつ言つた。

進「あのとおりの道を行つて、次を右に曲がつて、ずっと歩いていたら見えてくるつて。」

まるで鳥に聞いたよつて言つた。

正「進……お前つて、鳥と喋れんのか?」

進「最初は僕自身も半信半疑だつたけど……聞いてる内に何を言つてゐるのかわかつてきただ。」

正「マジかい……」

陸「恐らくそれが、進の能力だな。」

進「何か不思議な能力だね。」

正「お前ひしごひやうひしごわ。」

陸「じゃ、鳥に感謝して行くか。」

正「ああ、わづやのひ。」

そして四人は、少し急ぎ足で博麗神社に向かっていったのであった。

## 第五章 三人の再会（後書き）

### 後書き

ふつ、やつと編集終わった・・・友達のPC借りてから申し訳ない気持ちでいっぱいです（笑）。

とりあえず第五章までの連続投稿を終えました。ちょっと疲れましたけどもんだーいなーいよ。

現時点でいまだに東方キャラの登場が一人だけ・・・コレハマズクナイカネスミタ？

まあ後でわんさか出てくる（予定）ですので、今後に期待してください。

初心に返つてみると、やっぱり若かったなあとかしみじみ思います。

なので編集とかはこれでもしつかりやつていいつもりです。でも誤字脱字はいまだにあるこの現状・・・悲しげです。

不定期なので第六章はどうなるか・・・まあやんなんに遅くないと思いますけどね~。

気になるなら、是非とも評価とコメの方をお願いします！わしはこれでも結構必死です！～

では、第六章をお楽しみに。やつぱり昔の奴ずっと話になつてましたね。今回で自覚しました。

## 第六章 能力の覚醒（前書き）

あらすじ

- 1、三人は合流した
- 2、三人は話し合つた
- 3、三人 + チルノは博靈神社に向かつた

ではどぞ。

## 第六章 能力の覚醒

### 第六章 能力の覚醒

少年達移動中・・・

四人がしばらく歩き続いていると、目の前にあの博麗神社の階段が見えてきた。

進「ここかあ。」

その声に、全員が上を見上げる。

陸「それじゃ、この長い階段を上つて行くか。」

そう言つて、三人は階段を上つていった。チルノは飛んで上つていった。

しばらくして、四人はようやく博麗神社に着いた。

陸「これが、博麗神社か。」

正「何て言つか・・・想像通りやのう。」

四人が博麗神社を見ていると、後ろから誰かの声がした。

？「あら、ここに見慣れないのが二人も来てるなんて珍しいわね。」

四人が振り向くと、そこにはあの靈夢本人が簞を持つてこっちを見ていた。

靈「で、何の用？費錢以外なら、早々にお帰り願いたいわね。」

陸「この人が靈夢か・・・」

正「これまた想像通りや。」

進「うわ～、靈夢だ靈夢だ。」

靈「だから、何の用なの？」

陸「あ、挨拶が遅れました。俺達は外の世界から来た人間です。」

全員を代表するように、一步前に出て答えた。

靈「え？ またあ？ もう、紫の奴・・・ 一体これで何人目よ・・・」

明らかに面倒臭そうな素振りを見せる。

陸「それで、俺達はこれからどうじよつかと思いまして、とりあえずここに来ました。」

靈「どうじよつかって？ 決まってるじゃない。すぐで帰つてもらつわよ。」

進「ええ！？ なんでそうなるの！？」

靈「当然でしょ。何かあつたら面倒だもの。」

正「ちよつと待つてくれや、まだあんたに言つてない事があるんや。」

「

靈「何よ?」

陸「はい、俺自身はまだわかりませんが、この二人は能力を持つて  
いる可能性があるんです。」

靈「それ・・・本当?」

そつぎの面倒くさそうな様子とは、明らかに変わった。

正「ああ、そりやで。」

靈「なら話は変わるわね。」

進「じやあ僕達・・・」

靈「これからどういう能力を持つてゐるか、確かめさせてもらひつわ。  
ついて来て。」

そつぎで四人は博靈神社の裏辺りの少し広い所に連れてこられた。

靈「まず一人目、そうね・・・そこの。」

正「わしか。」

靈「えいぶ。おお。おお。」

正「拳武 正。まこと。」

靈「えいぶ。じやあ、今わかつての事は？」

正「えいせのひ・・・えいきルーラーは、おおがつて、その時  
自分で驚くべからこのジャンプをしたんだ。」

靈「ふーん。ちょっとこちらに来て。」

ヤツヒロは正を、靈夢の方に歩み寄った。

靈「ジャンプねえ・・・」

ぶつぶつと叫しながら、正の体を下から上まで見渡した。

靈「ああ、なるほどね。」

正「へ？ そんなんわかるんか？」

靈「私を誰だと思つてるのよ。」

正「ま・・・で、わしの能力ってなんなんや？」

靈「えいね・・・」

ヤツヒロは靈夢を近くの木を見た。

靈「説明するの面倒だから、あれ殴つてみて。」

正「ちよつとまでや……あんな木殴つてどないすんねん……」  
「手痛めるだけやろー?」

靈「大丈夫よ。普通の人間なら無理でしそうけど、今のあなたなら  
出来るわよ。」

正「ほんまかいな……」

進「早くしなよ、」の後僕らのもあるんだから。」

正「（他人事やと思つてからに……）しゃあないのう。」

そう言つて正は木の方に行つた。

靈「とにかく集中して。遠慮とかせず本氣でその木を殴つて。」

正「へいへい、なんでこんな事せなあかんのや……」

その木を殴る構えをとる。

靈「体の力を全部出し切る感じでやるのよ。」

正「はいよ、そんじや思いつきつやるでえ……」

そう言つて力いっぽいその木に殴りかかった。

正「そりゃああああ……」

掛け声とともに放つたパンチは、殴った所からその木をへし折つた。

へし折れた木は大きな音を立てて地面に倒れた。

靈「それが、あなたの能力よ。」

正「……すげえ！－これがわしの能力か！－」

嬉しさから、じばりくその辺りを走り回った。

靈「さてと、次は……そこ。」

進「あ、僕？」

靈「そりよ、名前は」

進「鳥間 進だよ。」

靈「そう、あなたは何かわかつてる？」

進「えーっと、さつき鳥の言葉がわかつて、道を聞いてみたんだ。」

靈「なるほどね、その手の類は……」

その時、正がわざと倒した木にいる何かに気づいた。

正「あ、この木蛇がおったんか。」

靈「蛇？それは丁度いいわ。ちょっと持つてきて。」

正「ええ？ なんでや？」

靈「ここから持つておいで。」

やつはわれて正まさの場にて蛇を持つてきた。

靈「じやあやの蛇を進に持たせて。」

正「まごよ。」

そのまま進に渡す。

靈「いい進? 耳を澄ましてその蛇の声を聞いてみて。」

進「うん。」

正「鳥の次は蛇かい。」

進「……わかった!」

靈「何て言つてゐの?」

進「誰が木を倒したんだって。」

正「それってわしゃ。」

靈「じやあやの蛇に當つてみて。」

進「うん。」

進が蛇に當しかけると、蛇は正に歯み付いた。

正「危な……ちょっと、堪忍やつて……」

噛み付きから避ける正。

靈「それがあなたの能力よ。」

進「へえ、何か楽しそうな能力だね。」

蛇を見ながら言つ進。

靈「じゃあ、最後はあなたね。」

陸「戦動 陸です。」

靈「あなただけが、まだ何の手掛かりもないのよね?」

陸「はい。もしかしたら、ない可能性もありますね。」

靈「そうね・・・」

陸の体を前から後ろから見回る。

靈「わかつたわ。あなたにも能力があるわね。」

陸「では、どういう能力なのでですか?」

靈「今から試すわ。正と進とチルノ、ちょっと来て。」

靈夢は三人に耳打ちをし、その後陸にこいつ言った。

靈「陸、田をつぶつて。」

陸「わかりました。」

田「をつぶつた後、靈夢以外の三人はそれぞれ陸の右、左、後ろに散らばった。」

靈「今他の三人があなたの周りにいるから、どこに誰がいるか、田をつぶつた状態で判断して。」

陸「え？ どうやって？」

靈「意識を周りに集中してみて。」

陸「はい・・・」

ひたすら集中しつづける陸。

しばらくして、三人の位置を感じ取ったようだ。

陸「わかりました。」

靈「どう？」

陸「正が右、進が左、チルノが後ろですね。ついでに靈夢、あなたは前。」

陸が言ったとおり、三人と靈夢はその位置にいた。

進「当つたり～。」

正「何でわかつたんや?」

田を開けた陸が答えた。

陸「何て言つかな・・・そここいつて言つべきかな。」

正「それやつたら腰味すがるやう。」

進「でもすじよ、かくれんぼとかしたら絶対わかるもん。」

陸「はは、そうだな。」

正「よししゃ、とつあえずはこれで全員わかつたんやの。」

靈「じゃあ、これから一通り説明するわね。」

三人が集まつた所で、靈夢が説明を始める。

靈「まずは正、あなたは身体能力を向上させる能力よ。」

正「マジでー?どれぐらいなんや?」

靈「それは、あなたの努力と器量次第よ。」

正「そつか。そんじやしつかりと鍛錬するかーー。」

靈「次、進。あなたは生き物や意思のある物と会話できる能力よ。」

進「わあ、じゃアリスとか鹿も?」

靈「もうひるごよ。」

進「やつたーー。」

靈「最後、陸。あなたは・・・熱探知できる能力。」

陸「熱探知・・・ですか？」

靈「そうよ。」

陸「随分変わった能力ですね。」

靈「いいじゃない。曖昧じゃないだけ。」

陸「それもそう・・・なんですかね。」

靈「じゃ、」それで説明は終了。」

正「いやあ、まさかわしらに能力があるとはのう。」

進「何だかわくわくしてきたね！」

素直に喜ぶ二人。

そんな中、陸だけはが深刻な顔をしている。

陸「では靈夢、俺達はもう・・・」

靈「ええ、残念だけど。」

正「へ?何が?」

陸「わからないのか？能力を持ったことが何を意味するかを。」

進「それは……すごい事？」

靈「違うわよ。」

正「じゃあなんや？」

陸「……俺達は、もう外の世界には帰れないんだ。」

その一言は、二人の顔から笑顔を奪つた。

進「……え？どういう事？」

靈「単純な事よ。能力を持つた者を外の世界にいさせる訳にはいかないのよ。」

正「ちょっと待てや……わしはともかく、進や陸は大丈夫やろ！？」

靈「じゃああなたは、動物と喋ることが出来る人がいて、それを周りは何とも思わない」と？」

正「それは……」

靈「能力の危険次第じゃないのよ。幻想郷は忘れられた者がいる場所であると同時に、あつてはならない者もいさせる為の場所なのよ。」

進「それは……どうにもならないの？」

靈「ええ、それが幻想郷の・・・一つの世界の淀よ。」

そう言つと、進はその場を逃げるよつて走つていつた。

正「おい・・・待てや進・・・」

陸「誰か追いかけろ・・・」

チ「あたいが行くわ・・・」

そつ言つてチルノが進の走つた後を追いかけた。

しばらく森の中で進の走つた足跡を頼りに、チルノは進を探した。

チ「もう、進の奴一体どこ・・・あ・・・」

森の開けた所に、小さな川があつた。

その近くで一人ぼつりと座つている進がいた。

チ「やつと見つけたよ進！」

進「ああ・・・チルノか・・・」

進は振り向きもせずに答えた。声には明らかに元氣がない。

チ「もう、何でこきなり走りだしたのよ？みんな心配してゐるよ？」

進に近づきながら言つた。

進「……………」

チ「え？ 何で？」

進「わからないんだよ……………僕も……………」

チ「わからないって、足が勝手に動いたって言つたの？」

進「何でだらう……………色々な事考えてて……………気がついたら走つてたんだ。」

チ「で、ここに来てたわけ？」

進「うん……………ねえ、何でだらう？ 何で僕、いきなり走つたのかな……………」

「うつむきながら進の隣に、チルノが座り込んだ。

チ「進、それはね……………」

少しうつむきながら進の隣に、チルノは「うつむいた。

チ「青春してたんだよ……………」

進「え？」

チ「青春してる時はね、そんな事しそううつよ……………だから進は今青春してるのよ……………」

進「チルノ……………」

そんなはずがないだろ？が、馬鹿のチルノにそんな事わかる訳あるない。

チ「ああ、あの夕日に向かって走るのよーー。」

そう言つてあわつての方を指差す。

進「夕日つて、まだ曇だよ。てかどこ指差してんの？」

チ「何でもいいから、とにかく走りなさいーーー。」

進の手を掴んで引っ張り、浅い川を走り出す。

進「ちよ、チルノ、こけちゃつて！？わあーーー。」

案の定にかる。

進「チルノー、よくもやつたねーーー。」

立ち上がった後、チルノに水を浴びせる。

チ「何をーーーあたいだつて負けなさいよーーー。」

しばらくの間、水の掛け合いをする二人。  
遠くから、それを見ている三人がいた。

正「はは、人が心配してたら、何せつてんやあこつら。」

陸「・・・・・」

正「ん？どないした？」

陸「正・・・俺達も行くぞ！！！」

正「ええ！？いきなり何言つとんやお前？頭大丈夫か？」

陸「うるさい！！行くぞ！！」

そう言つて正の手を引っ張り、一人の元に走つていく。

正「ちよちよちよーー待て待て待て！！！」

陸「イヤッホー！」

そのまま川にダイブする一人。

正「陸！！いきなり何すんやお前！！！」

立ち上がり、陸を睨む。

陸「お、文句があるならかかってこいよーー！」

進「僕らも僕らもーー！」

チ「あたいを忘れるんじやないよーー！」

四人は今の現状など忘れて、川で無邪気に遊びだした。

靈「やれやれ、もう外に帰れないって言つて、元のうつ明るいわねえ。」

そんな様子の四人を、微笑みながら見守る靈夢であった。

## 第六章 能力の覚醒（後書き）

### 後書き

更新遅れました。『めんなさい。

言い訳する気はないんですけど、何分わしは忙しい身分ですの。

一応不定期とは言っているので、みなさんも承諾してくれてこると思っています。

今回でとりあえず三人の能力とかはわかりましたか？陸はわかり辛いですけどね。

最初いたんだ三沢君並にチルノの存在霞みましたが、最後はしつかりと使いましたよ。

これから三人は本格的に動いていきますので、みなさんにとつても面白くなると思います。

さて、自宅では直ったので、これから友人の協力の元ばんばん投稿させてもらいますよ。

では、第七章をお楽しみに。

## 第七章 彼らの存在（前書き）

あらすじ

- 1、四人は靈夢に会つた
- 2、三人は能力を持つていた
- 3、四人は青春した

ではどぞ。

## 第七章 彼らの存在

### 第七章 彼らの存在

川で遊んだ後、四人は博麗神社の前で話しあっていた。靈夢は近くで彼らの話を立ち聞きしている。。

正「やーて、これからどないすつかの、」

進「僕は、」の世界を旅したい！…」

陸「それはいいな。幻想郷はいろんな所があるからな。」

正「わしもええと思ひナビ、すつとねいつこのはまづこやつ。」

進「そうだね。」

陸「じゃあ旅をしながら、俺達が住めそつな所を探そひ。」

正「おお、それが一番よれそつやの、」

進「僕もさんせー。」

陸「」これで方針は決まつたな。」

正「そんじや、まぢはめに行へかやの、」

陸「ここから近くがいいだろ。」

進「チルノ、ここから近くってどこがある?」

チ「そうだねえ・・・」

正「チルノに聞いてもわからへんやろ。」

チ「うるさいわね! 今思って出したてるヒト一。」

陸「ここは靈夢に聞いたほうがいいな。」

靈「ここからならそうね・・・紅魔館辺りじゃない?」

正「紅魔館か。」

進「あそこって、確か結構物騒だよね。」

陸「確かに。招待状でもあれば別だろ? がな。」

進「とりあえず、それなりに準備しようよ。」

陸「そうだな。」

正「準備って、何を?」

陸「それはもちろん・・・」

正「?」

陸「心の準備だ。」

正「へ？ それ？」

進「当たり前だよ。忘れがちだけど大事だよ。」

正「いやいや、もつと大事な事があるやん。」

陸「何だ？」

正「そりや戦闘準備や。」

進「・・・バトルマニア・・・

正「ん？ 何か言つたか？」

進「何も。」

陸「まあ確かに。紅魔館の連中を相手にしてみつと頑つたら、それ相応の準備はいるな。」

正「やべー。」

進「でもじつじつ。」

正「やはれや・・・」

そつまつて上は靈夢の方を見た。

靈「まさか、私を当てにする気?」

正「そりゃそりやひ?」

陸「俺達はまだ戦いの何かを知らない。だからあなたの協力が必要なんだ。」

進「僕は多分戦えないからさ、この一人だけでもお願ひだよ。」

靈「何言つてんのよ、私が何で・・・ん?ちょっと待つて。」

何かの気配を感じたのか、いきなり神社の裏の方に行つた。

四人「?」

少しばかり話し声が聞こえた後、靈夢が何か大きな袋を持ってこつちに來た。

靈「しょうがないわね。」

陸「じゃあ、俺達に協力してくれるのか?」

靈「そういう事になつたわ。」

正「よつしゃあ!」

靈「但し、戦い方とかは一切面倒を見ないわよ。」

進「じゃあ、ぶつけ本番つてこと?」

靈「やつよ。」

正「それはしゃあなこのい。」

陸「まあ物事全て最初はぶつつけだ。」

進「そうだね。」

靈「じゃあ、渡すものがあるからわざわざ渡すわよ。」

そつまつてわざわざ持つてきた袋から何かを取り出しだ。  
それは束になつてこるカードだ。

靈「これは陸に渡す物ね。」

そつまつてそれを陸に手渡した。

陸「これは？」

靈「あなたたちはスペルカードの事を知つてゐでしょ？」

陸・正・進「一応。」

靈「それは武器をしまつたタイプよ。」

陸「武器？」

正「武器つて、どう使つたか？」

靈「簡単よ。貸してみて。」

そつぱつて何枚かの内の一枚を取り出し、それを陸に見せる。

靈「いい? カードに書いてある物を今手に持つている様にイメージするのよ。」

陸「なるほど。じゃあやってみよつか。」

陸は束の中から一枚を取り出た。他のカードはそのままポケットに入れる。

陸「えーっと・・・」

少しするとカードが光り、それは陸の両手の拳銃に変わった。

陸「お、こんな感じか。靈夢、折角だから他のカードも見ていいか?」

靈「それはいいけど、同時に出すのは多分無理よ。」

進「何で?」

靈「今は一つだから気にならないくらいの靈力だけど、同時となると慣れてない者は体に無理がきたり、倒れたりするのよ。まあ才能とか適正があれば別だけど。」

正「なーる。」

だが陸はさつき出した銃をしまわずに次のカードを使つた。

靈「ちよつと、人の話を・・・」

その言葉を遮るように次の一武器が出た。今度はナイフだ。

陸「おお、銃以外もあるんだな。これはスペツナズナイフみたいだな。」

正「おい、何ともないんか？ 陸。」

陸「別に。」

正「おいおい靈夢、ここ何ともないって言つとるで。 もしかして才能とかなんちゃらに恵まれてるって事か？」

陸「俺だつたらそれぐらい当然だな。」

進「ちつすが陸。」

靈「信じられない・・・本当にあいつの言つてた通りなの？」

正「ん？ 何言つてんや靈夢？」

靈「え？ ああ、 ただの独り言よ。」

陸「靈夢、 いれはざじつやつて元に戻すんだ？」

靈「出した時と同じ感じよ。持つている物をカーブにする感じ。」

陸「わかった。」

回り腰で一つの武器をカーデに戻し、ポケットにしまつ。

正「こしても、それ便利やの。」

「ひりやましやうに見つめる。

進「あれ? 正は何か無いの?」

靈「正にもあるわよ。」

正「マジでー? 何々?」

靈「ちよつと待つて・・・」

わらきの袋からまた何かを取り出した。  
今度は金属製のグローブとレギンスだ。

靈「はい、これよ。」

そつまつて正に渡す。

正「え? わしのつて、カードでしまつ物とかとかやつとか?」

靈「それだと陸と被るでしょ?」

正「ちよーなんやねんその理由ー?」

進「まあが、まず付けてみたら?」

陸「それもそつだな。」

一人の発言で立つ瀬のなくなつた正。とりあえず付けてみる。

正「お、見た田のうつせから思つてたより動きやすいやん。」

少し動き回る。

靈「元々軽いじょうかど、あなたの能力と相まってより機能性が上がつてゐるのよ。」

正「ほお、まさにわしの為の装備やのう。」

陸「まあ、前の軍手とサポーター姿よりはましだな。」

正「けーーーもつねえやつ、その事は。」

ふてくられる正。

靈「後、これも渡しておくれ。」

そつと見て見せたのは、何も書かれていないカードの束だ。

陸「これは何だ?」

靈「スペルカードよ。」

正「へ? じゃあなんで何も書いてないんや?」

靈「当然よ。このカードは、あなた達自身の手で描かれるんだから。」

陸「描かれる？」

靈「要するにイメージよ。」

正「イメージか・・・」

靈「まあ、とりあえず渡すから、はー。」

そう言って陸と正に手渡した。

渡された二人はしばらくそのカードをじっと見つめた。

靈「戦う前に、そのカードに自分のイメージを描いておこう。」

正「ほー。」

陸「わかった。」

靈「じゃあ進、ちょっと来て。」

進「何？」

靈夢は大きな紙を袋から取り出し、進に手渡した。

靈「あなたには地図を渡しておくれ。」

進「え？ 何で僕なの？」

靈「あなただけ手持ち無沙汰でしょ？」

進「はは、なるほどね。」

陸「まあ、地図はある方がいい。チルノの案内はもつ沢山だ。」

チ「大きなお世話よー。」

靈「じゃあ、これで私が渡す物は全部よ。」

正「すまんのう、靈夢。」

陸「感謝する、靈夢。」

進「色々あつがとう、靈夢。」

靈「はいはー、じゃあとととと行きなきこよ、ここにても邪魔なだけだから。」

あしらひ感じで応える靈夢。

陸「じゃあ、俺達はこれで失礼する。」

正「じゃあのう靈夢。」

進「またここに来るよー。」

そして四人は博靈神社を後にした。

それを見送る靈夢に、後ろから誰かが話しかけてきた。

?「ふふ、ゆうやく行つたのね。」

靈「ええ、それにしても、あんたがわざわざこんな事するなんて珍しいわね。」

その誰かの方に皿を配る。

？「わざわざ言つたでしょう。彼らは内、あなたひとつて役に立つ存在になるのよ。」

靈「それと同時に、厄介事も起きたるのよね。」

？「仕方ないわよ。もつとの兆候は起きてるんだから。」

靈「もつ、この世界は一つになつたら平穀になるのよ。」

？「あら、この問題を解決したら、また平穀になるじゃない。」

靈「で、少しあつた違つ異変が起きる。その繰り返しじゃない。」

？「でもそれは、あなた自身が歩まなければならぬ道よ。博靈の巫女としてのね。」

靈「それもそうよね。」

やつて遠くを見つめ、軽くため息をつく。

靈「で、検討はついてるの？」

振り返つてその誰かに尋ねる。

？「それがね・・・まつたくなのよ。」

靈「ちよつとおーー。何の脈も無しー。？」

？「仕方ないわよ、」の問題は不特定多数で、今までの問題と違つて単純じゃないのよ。」

靈「・・・じゃあ、もう少し協力者がいるわね。」

？「それだつたら、魔理沙にはもう言つてるわよ。」

靈「やうなの？相変わらず手は回るわね。」

？「ふふ、それが私のとつえだもの。」

靈「じゃあ、とつあえずさつきの連中は様子見、私達は問題の検討探しつて訳ね。」

？「ええ。」

靈「それじゃ、さつさと行くわよ。出来るだけ早めに解決して、またゆつくりしてみたいからね。」

そう言つて靈夢とその誰かも神社を後にしたのであった。

## 第七章 彼らの存在（後書き）

### 後書き

こんにちわ、今日は違う友人のPCで投稿しました澄田です。

なぜいつも友人ではないかと言いますと、何分お盆でするので色々と忙しかつたらしいんです。

まあどうせ文章は自分のPCで打つ訳ですから、あんまり関係ないんですけどね。

わし自体はあくまでオフラインな家ですので、色々苦労しているんです。

それはさておき、この小説もいよいよ本格的に動き出しあきましたね（多分）。

友達も見ていてる訳ですから、もつとコメントを入れてやっていきたいです。

わて、不定期なのは相変わらずですが、まあ暖かい目で見てください。

では、第八章をお楽しみに。

## 第八章 紅魔の門番（前書き）

あらすじ

- 1、三人は話し合つた。
- 2、三人は靈夢から色々と授かつた。
- 3、四人は紅魔館に向かつた。

ではどぞ。

## 第八章 紅魔の門番

### 第八章 紅魔の門番

少年達移動中・・・

四人は紅魔館までひたすたに歩いていた。だがいくら近いと言つてもそれなりに距離はある。

一同の顔にはあまり元気がなかつた。

進「そう言えば、チルノはなんでついてきてるの？」

チ「ただ暇だからよ！..」

正「随分適当なやつちや・・・」

陸「なあ、後どれぐらいだ進？」

進「ううん、この地図じゃちょっと・・・」

正「お、おい！..あれ見いや！..」

前方を指差した。

他三人「え？」

三人が指差した方をじっと見ると、紅魔館らしき建物がぼんやりと見えていた。

進「やつたあ…やつと見えてきた。」

嬉しさから飛び跳ねる。

陸「よし、じゃあまずは門に向かうぞ。」

その声にこたえるように四人は陸を先頭に紅魔館まで走つていった。

近くいまで来た四人、彼らの前には紅魔館の大きな門が見えていた。そこには門番こと美鈴がいつものように立ちながら居眠りしていた。四人はある程度門から距離を置いて話し合つていた。

陸「さて、どうあるかだな。」

進「予想通りだけど、中国寝てたね。」

正「やうやのう。」

チ「寝てる内に入り方考えよつよ。」

進「そうだね。」

正「でも、いくら美鈴が寝てる言つても門は閉まつたまゝや。さすがに開けた瞬間目覚ますで。」

陸「そこは…・頭を使え。」

そう言うと陸と進は打ち合わせをしていたようにチルノを取り囮む。

チ「あれ? 何であたしの周りに来てるの?」

一人は返事すらせずに無言でチルノを担ぐ。

チ「あ、わかつた！あたいのこの天才の頭で・・・まさか？」

察しのいいチルノ。一人は扱いだまま門に突っ込んだ。

正「ええ！？今時ト  
ストーリー2ネタ！？てかそれ絶対意味ない・  
・」

物凄く鈍い音がしたが、門はまったく開かない。

チ  
テ  
ニ  
オ  
-

陸「おつとど。」

進「うわあ！！！」

反動で倒れる一人と頭を抱えて転げ回るチルノ。

美「むにや？ 一体何の音ですかあ？」

陸「しまつた！ 田を覚ましたか。」

進「まずこよ！…僕ら」のまま突破するはずだったのに…。」

正「でか突破できる訳ないやつおがあ！…。」

焦り顔を見せる一人と突っ込む正。

美「何だかよくわかりませんが、とりあえず敵ですね！…たとえ何があろうと、ここは通しませんよ！…。」

一人の方を向いて構えを取る。

陸「くそ…！…こいつなつたら…。正！…。」

正「何や？。」

陸「美鈴と戦え…。」

正「ええ！…」の空氣でわしがやるんかあ？」

進「頼むよー僕らの為と思つて…。」

なぜか今だに立ち上がらない二人が正を真剣な眼差しで見つめる。

正「…。しゃあないのう。おい、あんた。」

レギンスをはめ、手にグローブを付け、美鈴を見る。

正「わしうを通してもうんのう、今からわしと戦つてもうう。」

「

美「ほお、あなたが私の相手を？」

正「まあ、そういうこいつちや。恨みはあらへんけど本気で行くで。」

それなりな構えを取る。見た感じはボクシング丸出しだ。

美「ふふ、人間と妖精程度なら、私は四人がかりでも構わないわよ？」

応えるように構えを取る。こちらは太極拳の構えだ。

正「そか、でもわしはただの人間とちやうで。」

美「では、何？」

正「わしは・・・己の拳で仲間の明日と未来を切り開く！…熱血拳士、拳武 正や…！」

変にポーズを取って言い切った。

陸「へえ、いつの間に」一つ名考えてたんだお前？」

正の後ろからぼそりと言った。よく見ればいつの間にか三人は正の後ろにいた。

正「うおー！いつからおったんやお前らー！」

後ろを振り向く。

チ「熱血なんぢやらつて言つた時。」

チルノがやたら冷たい目で正を見る。

正「熱血なんぢや、りぢやつ……熱血拳士や……」

進「どうでもいいよ、そんな中一的ネーミング。」

チルノと同じように冷たい眼差しを正に向ける。

正「け……お前らなんぞもうええわ……」

少し機嫌を悪くし、改めて前を見る。

美「挨拶はすんだ？」

意味深な微笑を浮かべて正を見る。

正「ああ、すましたで。あんたを倒す前の挨拶をのつ。」

美「口だけは達者ね、あなた。」

正「口だけ達者なんは後ろにいる奴らや。わしは言葉よりも体で語るタイプやで。」

美「そり・・・だつたらすぐこでも叩き潰してあげるわ……」

氣を右足に集中させ、構える。

美「華人小娘、紅 美鈴、参る……」

右足を上に振り上げた。

美「黄震脚！」

そのまま下に下ろし、地面に衝撃波を起こした。だが正は地面におらず、既に美鈴の頭上にいた。

美「な！？」

正「遠慮は無しや。行くで！」

右足を伸ばし、勢いを付けて美鈴に降下した。

正「ドロップショート！」

その蹴りは、美鈴の頭部田掛けて放たれた。

美鈴は両手を顔に持つてきて氣を使いガードした。ガードされた正はそのまま、後ろ飛びをし、距離を置いて着地した。

美「・・・人間にしては大した物ね、あなた。」

正「へ、わしの攻撃はこれからやで！！」

構え直して言ひ。

正「びづつやあ！！」

そのまま力強く右足で横蹴りを放ち、その蹴りの軌道を描いた衝撃波を飛ばした。

美「甘いわよ！…」

美鈴も円を描いた弾幕を足で飛ばした。

一つの攻撃は一人の距離の真ん中辺りでぶつかり合つた。その瞬間、一人はお互い引き付けあうように突撃していた。

正「ライドナックル！…」

美「螺旋歩！…」

お互いの右拳が激しくぶつかり合ひ。

正「おう！…？」

美「ちい！…」

反動から弾かれるように飛ぶ一人。体勢を立て直した一人の右拳から、わずかに血が流れていた。その血を払い、構え直す一人。

美「ふふふ・・・ははははは！…」

突如大声で高らかに笑い出した。

正「何がおかしいんや！…」

美「うれしいのよ・・・心の底からね！…」

さつきを見せた微笑を浮かべる。

正「うれしい？ そりゃ うれしいわや？」

美「私は、長くこの世界にいた。でも過ごした日々はつまらない物だつたわ。確かにこの世界にも武芸者は数多くいるわ。でも私のような格闘技を嗜んだ者はろくにいなかつた……だから、あなたのよくな存在を、私は待つていたのよ……」

正「なーる。でもわしの格闘技は見よつ見まねやで？」

美「それでも十分よ。」うして口の武を語り合へる者であるのなら。

「

正「そか。そんじやもつ喋る事もあらへんのう……」

美「うつて美鈴に向かつて走り、その勢いのまま上空に飛んだ。

美「同じ手は食わないわよ！」

右手に氣を込める。

美「華符……破山砲……」

上空に向けて強烈な裏拳を放つた。  
放たれた裏拳は飛び掛つた正を確実に捕らえた。

正「ぐわあ……」

吹き飛ばされた正は、地面にそのまま落下さい、倒れた。  
正はもう立ち上がるかも怪しい状態だつた。

美「・・・もう終わりかしら？所詮は人間の力・・・」

その台詞に抗うように、正は立ち上がってきた。

正「人間を・・・なめんなやあ・・・」

美「・・・驚いたわね。あの一撃を喰らって起き上がるなんて。」

正「生憎打たれ強さと根性はそんじやそこいらの奴とは訳が違うで！今度はわしの番や！行ぐでえ！」

美鈴に向けて、右手の拳を握り締めた。

正「拳符！ストロークストレートオーバー！」

渾身のストレートパンチを放ち、美鈴に突撃した。

美「な・・・早・・・」

防ぐ事もできず、美鈴は門まで吹き飛んでいった。  
門に貼りつけられる様にぶつかり、そのまま地面に伏した。

美「こ・・・この私が・・・」

地に這いつくばる美鈴。

正「わしは、もつただの人間とちやう。舐めてかかったのが、お前さんの敗因や！..」

倒れてる美鈴に近づきながら言った。

美「・・・そうね・・・」

顔だけを上げ、答える。

美「でも、私に勝った程度じゃ、この館の者には勝てないわよ・・・」

苦しそうな様子で一つ端な台詞が飛んできた。

正「・・・確かにわし一人やつたら無理や。やけど・・・」

振り向かずに右手の親指を後ろにいる仲間に向ける。

正「わしには仲間がある。あれでも頼りになる仲間がのう。」

美「仲間・・・」

その時、正が倒れたままの美鈴に手を差し伸べた。

美「・・・何のつもり?」

正を睨みつける。

正「あんたと戦つてて思つたんや。あんたがいたらわしらの旅が面白くなつやうやのうつて。まあ、勧誘つて言つんかのう?」

照れくしゃみに言つた。

美「私を・・・紅魔館の門番と知つてて言つてゐるの?」

正「だから、これからその当主に許可貰つていくんや。それよりも、美鈴はどうなんや?」

美「・・・仮にも私を倒した者からの誘いなら、断る道理は私にはないわね。」

正が差し伸べた右手を握る。

美「じゃあ、これからあなた達の道案内をしてあげるわ。」

正「お、そりやありがたいの。」

そのまま美鈴を引き上げる。

後ろにいた三人が正に歩み寄つてきた。

陸「はは、まさかの勧誘か。まあ、そう言つた所も正らしげな。」  
意味深な笑顔を浮かべる。

進「いれからよろしく美鈴ーー。」

手を振つて笑顔で挨拶をする。

チ「ふんーーあたいよつは弱いだりけどねーー。」

慢心顔で手を組んで言つた。

陸「じゃあ、これからヨーリアの元に行くかー。」

他四人「おう！！」

こうして五人は、門を開けて紅魔館に入つて行つた。

その様子を、紅魔館の一つの窓から見てゐる者がいたのであつた。

## 第八章 紅魔の門番（後書き）

後書き

さて、この話の山場の一いつである紅魔館編、いよいよスタートです  
!!

まあ見よつ見まねの正が武芸者の美鈴にこきなじ勝つけりとかお  
かしこのは最初言つたとおりですよ？

正は中2脳ですのでこれからも技名とか連呼しますけど、他のキャラ  
クターはそれほどないので、安心を。

これからもバトルは連続してありますので、今までとは違つた面白  
さを是非ともお楽しみくださいーーー！

では、第九章をお楽しみに。

## 第九章 紅魔のメイド（前書き）

あらすじ

- 1、四人は紅魔館についた
- 2、正が美鈴と戦い、勝つた。
- 3、美鈴を勧誘し、紅魔館の中に入つた。

ではどぞ。

## 第九章 紅魔のメイド

### 第九章 紅魔のメイド

美鈴の案内の元、四人は紅魔館の広い廊下を走り、レミリアの元に向かっていた。

廊下は不気味なほど静かで、人っ子一人見当たらない。

正「のう、すんなり行きすぎとちやうか美鈴？」

美「確かにそうね。紅魔館の中で何かがあつたのかしづ……」

進「陸、誰かいるとかさ、何かわからない？」

陸「ちよつと待て……」

田をつぶり、周りを探る。

陸「後方……結構離れて一人……これは……」

何かを感じ取ったのか、即座に後ろを振り向いた。

そこには無数のナイフが飛び広がり、陸達目掛けて飛んできていた。

陸「まずい！全員伏せろ……！」

その声に呼応するように全員が身をかがめる。飛んできたナイフは前方に飛んでいき、何本かが廊下の壁などに刺さつた。

正「あつぶな……」

美「これは、まさか……」

全員が立ち上がり、後ろを見ると、悠然と歩いてくる者がいた。紅魔館のメイド長、咲夜だ。

咲「まったく、侵入を許すどころかその侵入者に道案内をしているだなんて……一体何を考えているの、美鈴？」

その眼光と言葉は、そこにいた者全員に突き刺さるように向けられた。

美「咲夜さん！これは……その……」

咲「言い訳はいらないわ美鈴。貴方には今ここで……制裁を与えるわ。」

ナイフを一本右手に構え出したその時、廊下に銃声が鳴り響き、構えたナイフが弾かれ、廊下に転がつた。転がったナイフに目を向ける咲夜。

陸「おいおい、ろくに話も聞かずに制裁を加えるだつて？やる事が随分物騒だな。」

咲夜に向けられている陸の右手の拳銃の銃口から、うすすらと煙が

上がっていた。

転がったナイフから視線を外し、今度は陸にその目を向けた。

咲「・・・今やったのは、貴方で？」

陸に対し、殺氣を放つ。

陸「いえ、ここにいるのは正って奴です。」

そう言って差し出すよひし正を前に出した。

正「くへちゅうと待てやー…おかしいやうー…何でこいでわしを出すんやー？」

陸に突つかる。

咲「そうですか、それなら、貴方から制裁をうけましょうか。」

左手に一瞬で構えた四本のナイフが、正と陸に掛けて飛んできた。

正「ちよちよちよちよおーー」

思わず身を縮める。

だが、飛んできたナイフは全て陸が銃で打ち落とし、辺りに散った。

陸「おい正、盾ぐらこにはなれよ。」

構えたまま軽い調子で正に言った。

正「ふざけんなや陸…–てか今わしが盾になる必要なかつたやうー…

！」

立ち上がり、陸にほえる。

陸「いくらなんでも全部に当たるとは限らんだろう？だからお前はその時の保険だ。わかれよ。」

正「じゃあ避けるとか考えやーーー！」

陸「わかつてないなあ、二二は避ける所じゃないだろ？」

正「いんじゃねーーー！」

陸をにらんでいふと、咲夜が陸に話しかけてきた。

咲「貴方・・・人間にしては中々の腕ね。」

陸「はは、お褒めの言葉をあずかりどひも。」

咲「美鈴を退けたのは・・・貴方で？」

美鈴の方を見てから陸に視線を移した。

陸「いえ、それは今俺の前にいる二二ですよ。」

正を指差す。

咲「そり。でしたら・・・」

今までよつもさらばに強烈な殺氣を放つ。

咲「貴方自身の実力はどうでしょ?」

そう言いながら、両手にナイフを握り、持ち構える。

陸「はは、それほどでもありませんよ。」

陸もカードを使い、拳銃を両手に持ち構える。

陸「……」は俺が食い止める。正達はレミリアの元に向かうんだ。

正たちに目を配らせて言つ。

進「陸! 一人で大丈夫なの! ?」

心配そうな目で陸を見つめる。

正「なーに、あいつやつたら、咲夜相手でも心配あらへんやろ。行くで。」

そつ言つて進の手首を掴み、美鈴とチルノとともに前方を走り去った。

咲「行かせませんよ。」

咲夜が追いかけよつとしたが、陸の銃弾に阻まれる。

陸「おーっと、俺を無視する気ですか?」

咲「・・・」

陸を見ながら距離を置いて構える。

咲「仕方ありませんね、貴方から制裁を『えましょ』つか。」

陸「物騒ですねえ。ま、それでこそ貴方らしこんですけど。」

お互いの間にピリッとした空気が流れる。

陸「そうだ、戦う前に挨拶ぐらいはしておきましょつか。」

咲「そうですね。」

陸「俺の名前は戦動 陸です。よろしく。」

咲「私の名前は、十六夜 咲夜です。以後はありませんけどよろしく。」

陸「ははは、随分見ぐびられてますな。」

咲「見ぐびつてなどいませんよ。力の差がありますがるだけです。」

陸「それを世間一般で・・・」

両手の銃口を咲夜の方に向ける。

陸「見ぐびつてるつて言つんだーー！」

両手の銃を咲夜目掛けて乱射する。

だがそこには咲夜はおらず、カードだけが床に散らばっていた。  
陸が攻撃を止めると、どこからともなく咲夜の声がした。

咲「闇雲な攻撃ほど愚かな物はないわね。」

咲夜は既に陸の背後にいた。

陸「（しまった！！これは・・・バーミング＝ブローシングーーー）」

心の中で考えている内に咲夜の攻撃が来た。

咲「散りなさい。」

咲夜が右手のナイフで陸を一閃した。  
だが陸はぎりぎりで攻撃を回避していた。

陸「ふいー、危つぶないなあ。さすがはメイド長。」

咲「・・・大した反応速度ね。」

陸「まあな。だが、能力なしだつたら当たつてたな。」

咲「能力？」

陸「そ、うだ。もちろん企業秘密だけどな。」

咲「なるほど・・・」

陸を見据える。

咲「思ったより歯」たえはありそうね。」ついこのつのは久々よ。」

両手にナイフを構える。

陸「そうか・・・勝負はこれからだ!!」

そして、二人の本格的な弾幕戦が始まった。

その頃、四人はまだレミリアの元に向かっていた。

美「ねえ正、陸つて人、本当に大丈夫なの？」

正「大丈夫やつて。それより、咲夜の方こそどうなんや？」

美「咲夜さんは、このような室内でこそ活ける戦闘スタイルよ。だから正直言つてよほどの実力者じやなきや太刀打ちできないわ。」

進「陸・・・」

正「おいおい進、お前がそんな顔してどないすんや。」

チ「そうよーーー友達はどんな時でも信頼すべきよ進ーーー。」

進「・・・うん、そうだねーーー僕も陸を信じるよーーー。」

進の顔に希望が戻った。

その時、正はある事を思って出していた。

正「最初からやつやけど、なんでこなに静かなんや・・・」

「こまで来ても、彼らは咲夜以外とは誰とも出くわしていなかつたのだ。

美「そうね、一体何が起きてこるのかしり・・・」

その頃、紅魔館の地下のフランの部屋の前で恐いの館中の妖精が部屋のドアの前に構えていた。

一番前にはパチエリーと小悪魔が立っていた。パチユリーがそれらしい呪文を唱え、小悪魔はただおどおどしていた。

部屋からはのドア越しに凄まじい音がしている。

小「ま、まざいですよおパチユリー様あ・・・」のままじやーじも・・・」

パチエリーにすがりつく。

パ「あんたが言わなくともわかつてゐわよーー」

ドアに魔法を施しているが、声と顔に焦りが出ていた。現にドアは今にも開きそうだ。

パ「それにしても・・・何で今になつて・・・」こ最近は大人しか

つたのに・・・

抵抗むなしくドアがどんどんひび割れていき、パチュリーと小悪魔はドアと一緒に吹き飛ばされていった。

その後、妖精達が戸惑う中、部屋から弾幕が放たれ、辺りにいた妖精たちを文字通り蹴散らしていった。

その頃、陸と咲夜は廊下がぼろぼろになるほど戦いを繰り広げていた。

少ししてお互い向かい合つよう立ち止まつた。一人共あまり傷を負つてはいなかつた。

咲「ふふふ、所詮はこの程度? いえ、あなたはむしろ頑張った方よ。

」

見下す目で陸を見る。明らかに余裕がある。

陸「はは、まだまだこれから・・・」

だが明らかに息を切らしていた。陸自身はもうあまり余裕がありそうにない。

陸「（まことに）この空間は明らかに彼女が有利だ・・・しかも、俺自身はまだまだ経験不足・・・勘で案外どうにかなつてゐるが、長期戦になつたらますます俺が不利になる・・・」

考え事をしている内に、咲夜が陸に対し、ため息混じりに言つてきました。

咲「・・・もういいわ。これで終わらせる。」

そつ言つて一本のナイフを構えた。さつままでとは違ひ変に大きい。

陸「まさか・・・」

陸がそれを見つめていると、凄まじいスピードでそれを壁に投げつけた。

咲「光速 C・リコシュ！」

投げられたナイフは、廊下中を滅茶苦茶に跳ね回つた。反響音が廊下中に響き渡る。

咲「このナイフは、すぐには貴方を襲わない。しばらく壁を跳ねて加速し続け、最後には・・・」

少し溜めて言つた。

咲「貴方の急所を一撃よ。」

壁を跳ね返るナイフは、もはや人の目では追える者ではなかつた。

陸「（やばい・・・これほどのスピードじゃ避けることもできなくな・・・どうすれば・・・待てよ。）」

陸は少し考え込んだ後、手に持つた銃をじっと見つめた。

陸「（・・・）つなつたら、駄田元でやつてみるか。」

神経を集中して田をつぶつ、自身を守るように銃を構える。

咲「何のつもり？まさかこのナイフを見切る気？」

陸「ああ、その通りだな。」

なぜか咲夜に対し、笑顔を浮かべる。

咲「ふ、愚かね。人間」ときにこのナイフを見切れるはずがないわ。

その時、廊下を跳ね続けていたナイフが、今まさに陸に襲い掛かろうとしていた。

咲「これで終わりよ。」

陸に対して翻つて言った。

ナイフは的確に陸の前方から頭部に飛んできた。  
だがナイフは何かに刺さるような音は立てずに鋭い音を立てて地に落ちた。

咲「！」

陸の方を再び見ると、両手の銃で頭部をしっかりと守っていた。さつきの鈍い音は銃に当たった音だ。

咲「馬鹿な・・・あのナイフを、ただの人間のあなたがどうやって・

・・・

驚きを隠せず、動搖する。

陸「・・・」それでも賭けだつたんだ。」

咲「賭け?」

陸「俺の能力は生き物や一部の物にしか意味がない。だからナイフみたいな無機物じゃ使えないと考えていた。だが今あなたが投げたナイフは、壁で凄まじい跳ね返りをしていました。だから考えたんだ。だがこれほどの跳ね返りをすれば、そのナイフ自体が相当な摩擦熱を持つと俺は考えたんだ。まあこれだけのスピードだ。いくら俺でも避けきれる自身はない。だったらいつそそれを見切つて防いだ方がいいと思ったんだ。」

咲「じゃあ・・・あなたは能力を使ってあのナイフを見切つたと?」  
陸「そうなるな。」

咲「くーーーでもまだ勝負はついて・・・」

咲夜がナイフを構え直そうとしたが、その時構えた手に軽く何かが当たつた。

咲「なー?」これは・・・

咲夜自身の周りに、目で見ること困難な糸がそこいら中に張り巡らされていた。

咲「い、いつの間に！？」

陸「あなたが後ろを振り向いた瞬間、いつもスペルカードを使つたのや。」

そつ言つてそのスペルカードを咲夜に見せた。

咲「ふ・・・この程度の糸で、私をどうにかできると？」

陸「いやあ、その糸だけじゃないんだな、これが。」

咲「え？」

再び周りを見渡すと、その糸の先には何かがついていた。

咲「ま、まさか・・・」

陸の方をまた見る。さすがに汗がにじんでいた。

陸「そのまっさか。」

カードを持つていた手には、今度はパインアップルタイプの手榴弾が握られていた。

陸「あなたは今、そこを動く事が出来ない訳だ。」

咲「動けないですか・・・そんな物、私の能力の前では無意・・・」

カードをぱつと構えようとしたが、その前に陸の手榴弾が咲夜の目に飛んできた。もちろんピンは外れていた。

咲「ええ！？」は少し待・・・」

言い切る前に手榴弾が爆発し、糸についていた手榴弾も誘爆。陸から咲夜が見えなくなる程の大爆発を起こした。

陸「あなたは、負ける時も完璧だつたな。」

爆煙に向かって決め台詞を言つ陸であった。

## 第九章 紅魔のメイド（後書き）

後書き

こんにちわ（こんばんわ）、不定期更新なのは仕方ない澄田です。

前回は正でしたので、今回は陸に戦わせてみました。割愛したのは紅魔館の全体的な所を書き出したかったので。

まあ正と同じく勝つた?ってこれじゃまだわかりませんね。とりあえず陸すごいって事で。

正と陸はこれで活躍させたので、後は進だけですね。もちろんそれは次回明らかになるかもしません。

では、第十章をお楽しみに。

## 第十章 進の思い（前書き）

あらすじ

- 1、五人は紅魔館に入った。
- 2、紅魔館内で色々起きていた。
- 3、陸が咲夜と戦い、勝利?した

ではどぞ。

## 第十章 進の思い

### 第十章 進の思い

陸「さてと、この爆発じゃ動ける状態じゃないだろ。正達と合流するが、」

そう言って爆煙にきびすを返し歩いたが、その爆煙から一本のナイフが飛んできた。

陸「！」

陸は後ろを警戒していたので、そのナイフを寸前でかわした。かわした後に体ごと後ろを振り向くと、そこには体中が焼け焦げだらけになりぼろぼろになつた咲夜が、立つのもやつとの状態で両手にナイフを構えていた。

咲「……待ちなさい……」

声も弱弱しく、今にも倒れそうだ。

陸「おいおい、もつ決着は着いただろ？ そんな状態で挑む気か？」

咲「……ない……」

陸「え？ 何て言つたんだ？」

咲「今ここにいてはいけない……」

陸「はっじつことじとだ？」

咲「あなたは……今の紅魔館に……他の者がなぜいないか……わかるの？」

陸「いや、美鈴も知らないって言つてたから、俺が知る訳ないな。」

咲「妹様を抑える為よ……」

陸「抑える？フランはもうおとなしくなつてゐるはずだら？」

咲「誰にもわからぬいのよ……急に……暴れだして……」

そつとつて力ぬきのよつてその場に倒れた。

陸「つて事は……正達が危ない……！」

再び振り向き、急いでそこを去ろうとした。  
だがえもいわれぬ物が、陸の足を止めた。

陸「（な、なんだ……）」

確かに背後に気配がある。だが体がそれを見よつとしなかった。

陸「（動け……動けよ俺の体……頼む……）」

固まりきつた体を何とか動かし、背後に振り向く。

陸「誰だ！？」

銃を構えたが、そこには倒れた咲夜以外に誰ももいなかつた。だが  
気配はまったく消えていない。

陸「……フランか！？ ビーだー？ 一体ビーにいるー？」

辺りを見渡すが、ビーをどう見てもいない。

陸「そうだー！ 能力を使えば……」

田をつぶつて神経を集中させ、辺りを探る。

陸「な……馬鹿な……こんなことって……」

陸が探知した結果、それはすぐ後ろにいた。  
感じ取った瞬間、陸はそれに襲われた。

その頃、四人はようやくレミコアのいる部屋のドア前にたどり着いた。

美「いじよ。」

正「ふう、やつと着いたか。」

進「長かったねえ。」

美「じゃあ、開けるわよ。」

美鈴がドアを開けると、やけにせふんどこ一丁の「一りんがドアから背を向けて立っていた。

「やあ、僕とやら……」

「一りんが振り向いてはにかみながら睨ねつとした瞬間に、美鈴が急いでドアを閉めた。

進「ねえ……今の……」

美鈴を見てドアに指を指す。

美「「めんなさい」の部屋じゃないわ。」

進の言葉をほぼ無視し、無表情でまた歩き出した。

正「間違えた事より、今の説明して欲しいんやけど……」

進と同じように尋ねた。

美「ああ、あれよ。あれがお嬢様の部屋。」

それも完全に無視して廊下の奥のドアを指差した。いかにもな感じがするドアだ。

進「ああ、あれね……」

もはやあれはなかつた事になつた。

正「さて、どう説明するかのう……」

チ「もうまじめにいじつことは無しよ……」

正が考えている内に、チルノがドアを蹴破り、先に入つた。

美「あ……」

進「ちょ、チルノ！……」

正「待てやおい！……」

三人が追いかけると、そこには他の部屋とは明らかに違う広く赤い空間が広がつていた。

その奥に、レミリアが恐らくは特製の椅子に悠然と腰掛けていた。チルノはレミリアの結構近くにいた。

レ「あら、こんな時に誰？」

椅子からまつたぐ動く様子もなく、悠然と答える。

チ「誰かしらつて何よ……あたいの顔に見覚えないつて言つの……」

レミリアに指を指して言い放つた。

レ「……知らないわね。」

少し考えた様な振りをした。

チ「きーっ！あたいの顔知らないなんて、このもぐり！…」

悔しがつてから、再び指を指した。

レ「だから知らないって言つてるでしょ。」

そう言つて重い腰を上げるよつて椅子から立ち上がった。

レ「あなたみたいな、一介の妖精風情。」

立つている姿はどう見ても幼いが、部屋を包み込むほどの大オーラは、レミコアを何倍にも大きく見せた。

美「ま、待つてください、お嬢様！…」

美鈴がチルノを差し置いて言つた。

美「この者達は争いに来たのではありません…話をする為に来たのです！…」

胸に手を当て言つた。

そんな美鈴の思いが伝わったのかどうかはさだかではないが、レミアが答えた。

レ「そんな事、わかるわよ。」

美「え？ではなぜ…？」

言つと同時に、閉められていたドアが派手に吹き飛ばされた。

一同がその方を見ると、そこからぼろぼろになつた陸が転がつてき

た。

陸は地面に倒れたまま動じうとしなかつた。

# 正・進「陸！」

一人が駆け寄り、陸を抱きかかえる。

正「おこ……」つかつかしてや。」

陸の体を起こすよつて揺らした。

陸「う・・・正・・・進・・・」

進「何があつたの！？陸！？」

進は目に少し涙を浮かべていた。

陸 さすがに・・・相手が悪かつたな・・・進・・・あいつは・・・

セの間一かたで、陸はふつと意識を失つてしまつた。

正「陸……どなにしたんや……？」

意識を失った陸に対して必死に話しかけるが、陸はまったく反応しない。

そんな中、壊れた扉から誰かが入ってきた。

? 「あのお兄ちゃん、どうかな～？ どうこうするのかな～」

その者は、無邪氣な顔をしたフランだ。

正「おー・・・」

立ち上がり、フランを睨みつける。

フ「あ、見つけた見つけた」

陸を見つけて言った。

正「フラン・・・まさか・・・お前がやつたんか・・・」

拳を握り締め、更に睨みつける。

フ「だつて、誰も私と遊んでくれないもの。だから外からの人だつたら遊べると思ったの。それなりに面白かったけど、やつぱり駄目ね。すぐに壊れちゃった。きやはははは」

無邪氣に淡々と言った。陸を傷つけた事などまったく気にしてない。

正「お前え・・・」

正がフランに殴りかかろうとする前に、レミコアが田代も留まらぬスピードでフランに襲い掛かった。

そしてレミコアとフランはつばぜり合この状態になった。

レ「何をやっているか、わかっているの?」フラン。

フ「わかつてますわよ、お姉様」

レ「あなたはまだ能力を制御出来ていない。だからおとなしくしていなさいと、あれほど言ったでしょう？」

フ「だつてえ……」

そう言いながら、レミリアの背後に魔方陣を敷いた。

フ「それじゃつまらないもの……」

そう言つたと同時に、魔方陣から攻撃を繰り出した。レミリアは完全に予測していたかの様に上空に飛んで避ける。フランもレミリアと対峙するように、上空に出た。

レ「どうやつお仕置きが必要みたいね。フラン。」

そう言いながら、フランに対し構える。

フ「やつたあ、お姉様が遊んでくれるんだ」

フランも同じく構える。

そして、二人は上空で凄まじい弾幕戦を始めた。圧倒的スピード、弾幕、刹那に見える一人の姿も相まって、その光景はまさに一枚の絵のようだった。

正「レベルがちゃう……こなん……今のわしに出来る訳ない……陸はこなん相手にしてたんか……」

ただ立ち尽くし、その絵を傍観するしかなかつた。

フ「あはははは……やつぱり楽しこよ、いやつやって自由に暴れるの  
！…」

そう言って右手に溜めた力をレニアの方に放つた。  
だがレニアは圧倒的スピードでフランの後ろに回りこんだ。

レ「何を言つてこるの、フラン？」

そのまま右手に槍を形作つた。

レ「これはお仕置きよ、フラン。」

形作つた槍を凄まじい速度でフランに投擲した。

レ「神槍 スピア・ザ・グングニル！！」

槍は振り向いたフランに刺さり、そのまま壁までフラン！」と飛んで  
行つた。

フランは壁に突き刺さつたままぐつたりとしていた。

正「お、終わつたんか？」

槍が刺さつたフランを傍観していると、フランの体が消え、一枚の  
トランプとなつた。

レ「な、これは……」

するとレニアの周りを囲むように、三人のフランが姿を現した。

フ「残念でした お姉様～。」

三人が同時に喋り、声が重なる。

レ「これは……フォーオブアカインド……」

フ「ふふ、その通りだよお姉様」

そう言って三人のフランが一斉にレミリアを攻撃し始めた。

レ「く……まずいわね……このままだと……」

容赦の無い攻撃を避け続ける。

レ「本体は……」

三人のフランに目を配っていく。

その内の一人を、レミリアは本体だと判断した。

レ「あれね……」

攻撃を回避し、本体に攻撃を仕掛ける。

レ「終わりよフラン……」

攻撃を構えたが、そのフラン自身も攻撃を構えていた。

フ「さつすがお姉様、もう見破っちゃったんだ」

そう言って右手に、凄まじい刀身を作っていた。

いつの間にか他のフランは消えていた。

レニアがそれに気づいた時には手遅れだった。

フ「でも、私の方が早かつたね」

そのままそれをレニアに振りかぶつた

フ「禁弾 レーヴァテインーーー」

レニアはそれをガードしたものの、そのまま吹き飛び壁に叩きつけられ、床まで落ちていった。

レ「・・・・・この私が・・・・

伏したまま言つた。

そこにフランがやや距離を置いて降りてきた。  
その時、正達は少し距離を置いた所にいた。

正「ど、どないした、うえんや・・・・

美「私では、止める」とひととも・・・・

チ「へん……喧嘩なんてしたい時にやうせとせばいいでしょーーー」

進「・・・・

無言でレニアとフランをじっと見据える。

正「進?」

進「正、チルノ、美鈴、何があつても最後まで絶対手を出さないで。

美「何の事よ?」

進「僕が……フランを止めてくる……だから絶対手を出さないで  
!—!」

そう言つてフランの方に走つていった。

正「おい、進!—!」

進の後を追つた。

その頃、フランはゆっくつとレミリアの方に歩み寄つていた。

フ「ふふ、私の勝ちねお姉様 お姉様でも私に勝てないんだ……  
まあいいや。」

レミリアのすぐ近くまで来て言つた。

フ「これから外で、遊んでくれる人を見つけて行くから。じゃあね、  
お姉様。」

一瞥をして、そのままそこを去ろうとした。

その時、レミリアが動きそうにない体を奮い立たせていた。

レ「待ちなさい……

フランはその声を聞いて振り向く。

レ「あなたを……外に出すわけには……

体を何とか支えながらフランに近づいた。

フ「そんな状態で、私を止める気なの？」

見下した目でレミリアを見下す。

フ「もうここのよ、無理して立たなくとも。」

再び攻撃を構える。

フ「またそこで寝ててよ。」

今までにレミリアにその攻撃を放とうとした。  
だがその攻撃を止めるような声がした。

進「・・・かしこよ。」

進がフランのすぐ後ろまで来ていた。

その声に反応して矛を収め、後ろを振り向いた。

フ「ん?誰?」

進「おかしいよ・・・たった一人の家族を・・・平気で傷付けるな  
んて・・・」

拳を握り締めてフランを見据える。

フ「何よ、あなたに何がわかるって・・・」

進「わからないよーー！」

フランの言葉を遮るよつて大声で叫つた。

進「君の今までの事なんて、僕にはわからないよーーでもーーー人しかいな家族をーーー君はーーー何だと思つてるんだよーーー！」

顔を上げてフランを見つめた。

だが、フランは無言で右手を振り、進はそれによつて吹き飛ばされ、倒れた。

フ「うるせーなあーーー黙つてよーーー」

虚ろな目で進を見下す。

進「ーーー黙らないよーーー陸が言おつとしつんだーーー君がさびしそうにしてたつてーーー」

立ち上がり、フランに近づく。

フ「ただの人間がーーー一体何だつて言つのよーーー！」

弾幕を放ち、進の周りを撃つ。

だが進は立ち止まる事なく、フランに近づく。

進「君はーーー遊びたいだけなんだろーーーだつたらーーー誰かを傷つける必要なんてないじゃないかーーー」

その声に、フランは思わず怯んだ。

フ「だつて私は・・・何かを・・・誰かを傷つけなきや・・・遊べないもの・・・」

立つたまま俯いた。

進「大丈夫・・・君なら出来るよ・・・誰よりも・・・素直な君なら・・・」

俯いたフランに笑顔で接する。

フ「素直・・・」

その言葉にふと過去の記憶が蘇る。

その記憶は、フランがレミリア達に見守られながら庭で遊んでいた記憶だ。

その時のフランは、まだ能力などに意識を持つていなかつた。だからこそ、素直な気持ちで遊んでいたのだ。

その意識こそ、フランが長い時の中で忘れていた事なのだ。フランは進の言葉を聞いて今その事を思い出したのだ。

フ「・・・」んな能力・・・私は・・・持ちたくなかった・・・

その場で泣き始めた。

その様子に、進があやすように接した。

進「そんな事ないよ・・・君の能力は・・・君の個性だよ・・・だから・・・持つていいべきなんだよ・・・」

フ「でも・・・」

進「君が・・・素直な気持ちでいれば・・・周りは自然と優しい気持ちでしてくれる・・・そうすれば・・・誰も傷つけないよ・・・」

フ「・・・私に、できるの?」

顔を上げ、進を見つめる。その目には涙が残っていたが、もう泣いてはいなかつた。

進「うん・・・君なら・・・で・・・」

言おうとしたが、その場で意識を失い倒れてしまったのであつた。

## 第十章 進の思い（後書き）

### 後書き

こんにちわ、友達のアドバイスにより時間差で投稿してみました澄田です。

この話の山場の一つですので、個人的には言い出来だと思つてます。友達からふと、台詞が多くね?とか、中身薄くね?とか言われたので、いつになるかわからない次回作では頑張つてみたいです。

まあそれは置いといて、わしの友達は評価ではなく感想をいただいてもらつていたらしいのです。珍しいパターンですね。

わしも負けないように頑張つていきたいです。見てる人はちゃんといてくれているようなんでそれがわしの動力源です。

さて、持久力のない友達は第四話書いて死に掛けているのを尻目に、わしはこれを投稿させていただきます。

では、第十一章をお楽しみに。

あらすじ

- 1、四人はレミリアに会つた
- 2、フランが色々暴れた
- 3、進がフランをなだめて氣絶した

ではどう。

## 第十一章 第11の目的地

進が目を覚ますと、進は少し広めの部屋のベッドで寝かされていた。上体を起こし、周りを見ると、左右にしつきまで誰かが寝ていたような跡があるベッドがあった。

進「あれ？ 僕って確か・・・」

とりあえず自分で今までの事を整理する。

進「えーっと、ユミリアとフランが喧嘩して、フランになんか色々言つて、それから・・・」

正「そつから先は、わしが教えたるわ。」

進が考へてゐる所に、いつの間にかいた正が話しかけてきた。

進「正・・・」

驚愕と感嘆の混じる大声で言つた。

正「おーおー、一晩寝てただけあって元気やのや。」

やや呆れた様子を見せる。

進「ねえ、今まで何があつたの？」

正「ああ、それはお前が倒れてもつたとこから説明するや。」

進「うん。」

正が進の隣のベッドに座り、話し始める。

正「お前が気絶した時、わしはお前の後ろにあつてな。で、わしがお前の様子を見て、意識が飛んでる事を確認したんや。」

進「そうだったんだ。」

正「お前が言つたとおり、みんなお前の邪魔せんかったやろ?」

進「そういえばそうだね。」

正「その後、レミリアに進と陸の手当を頼んでのう、レミリアはフランを止めた礼つて事で美鈴と一緒にお前らをここに運び込んで、紅魔館で手当て出来る奴が来てくれた訳や。」

進「え? 手当て?」

自分の体に手を当てまわすが、それらしい物はない。

正「ま、大したものやなかつたから、結局寝かしただけになつたわ。」

進「で、そのまま一晩過ごしたの? 僕達。」

正「そいや、まづ最初にわしが起きて、ちよこと紅魔館散歩しつたわ。」

進「じゃあ、陸は?」

正「陸か？あいつやつたら、確かフランと……」

進「フランと？」

正「うーん、ちょっとひどい覚えや。まあお前はもう四覚ましたし、そこに連れてつたるわ。」

進「うん。」

そう言つて一人がベッドから立ち上がると、ドアが大きな音を立て、蹴破られたように開けられた。

正「誰……」

振り向いた瞬間、正の顔にチルノの足の裏がめり込んでいた。

チ「竜巻旋？——脚！」

蹴られた反動で正は壁まで吹っ飛んで行つた。

進「……」

あまりに突然すぎる出来事に呆然とする。

チ「ドア越しに話は聞いたわよ——！」

飛んで着地した体勢から、いつもの体勢に戻る。

チ「道案内なら、あたに任せなさい——！」

そつ言つて進の手を掴み、部屋から強引に引っ張つていった。

進「ちよ、チルノ！！待つて待つて！！」

チルノは進の言う事をガン無視し、気がつけば一人は陸とフランのいる部屋の前に着いた。

チ「さあ、ここよ進…！」

後ろにいる進を見て部屋のドアに左手を向ける。

進「…えーっと…」

チルノの顔を見て少し考えた後、

進「ありがとう。」

感謝をした後、ドアをノックもせずに入った。

進「陸、フラン。」

ドアを開けると、陸とフランがテーブルに向かい合いで、座っていた。テーブルにはティーカップが置かれていた。

陸「お、やつと起きたか進…」

と言い切る前にフランが進に飛びついていた。

フ「進…！」

進に抱きつづラン。

進「あわわわ！？」

勢いあまつてそのまま後ろに倒れこんだ。

「すうと心配してたんだよ進!! 怪我とかしてない!?」

進に馬乗りの状態で尋ねてきた。

進むこととして、それで、

苦しそうな顔で言った

「あこがれ」

はと延たぬといた

お前の周りにはいゝもろいがな

# 進一陸！怪我とかしてないの？

陸へああ、俺自体は別になんか先に起きてフランと話をじてたんだ。

「私、進のいる部屋にいよがくなつて思つたんだけど、お姉様が進が起きるまではこの部屋にいなさいって言つられて、ここで待つてたんだよ。」

進「そ、う、な、ん、だ。」

陸「それにしても、あのフランが素直に話す事聞くなんてなあ。大したもんだよ進。」

進「え？あの時陸は確か……」

陸「その事だつたら、正から聞こてるよ。」

進「だつたら、陸は……」

陸「なーーー、この世界じゃしみつけられたりしないだらう。それより……」

進「それより？」

陸「フランの相手してやれよ。」

セツがわれて進はフランの方を見た。

フ「ずっと待つてたんだもの、遊んでよ。」

進「うん。」

笑顔でセツがたと同時に、廊下からがなり声が聞こえてきた。

チ「何よーーー竜巻旋？脚を餘りつた事は名譽な事じゃないーーー。」

正「全然名譽な事ぢゃうやうがーーー。」

ドアが開き、一人が絡み合つたまま転がってきた。

陸「おいおい、何やつてんだ二人して？」

その声を聞いて、正とチルノが組み合つた体勢を外し、立ち上がりつた。

正「やつせじにつがわしの顔面にキックしてきたんじゃ……見ひやこの顔……」

その顔にはチルノの足の裏の跡がくっきり出来ていた。

チ「違うわよ……竜巻旋？脚よ……」

意味不明な反論をする。

チ「それよりあんた……あたいをほつといて遊ぼうだなんて、聞き捨てならないね……」

そつ言つてフランの方を指差した。

フ「あなたも遊びたいの？」

チ「当たり前でしょ……遊びも天才サイキョーのあたいだよ……」

進「じゃあ、みんなで遊ぼうか……」

フ&チ「うん……」

正「おー、ちよつとま・・・」

と聞こかける前に、陸に首根っこを掴まれた。

陸「はいはい、邪魔者は去りますかな。」

そのまま正を引きすりながら部屋を後にした。

正「待てや陸……わしはあこひに言いたい事が……」

引きすりながらも言つが、陸が遮る。

陸「まあ、お前の気持ちはわかるが、お前にはやる事があるだろ？」

引かずるのを止め、お互に立つて睨合ひ。

正「やる事？ああ、あの事が。」

陸「お前が言こ出したんだ。お前で話をつこう。」

正「わかつとるわ。」

陸「で、あの子がどういこるか、わかつてこるのか？」

正「あ、やうやくやのハ・・・・」

陸「おっと、正、後ろ。」

正「ん？」

そつとられて後ろを振り向くと、そこには美鈴がいた。

美「私をお探しで?」

少し皮肉めいた風に言つてゐた。

正「ませ、やうやう。」

苦笑いを浮かべる。

陸「じゃあ、これから話をつけに行くか。」

三人はレニアのいる部屋に向かつた。

少年達移動中・・・・

正「おーこ、レニア、話があるんや。」

レニアのいる部屋のドアを開けると同時に言つた。  
そこには初めて会つた時と同じ感じで座つてこらのレニアと、その隣に咲夜がいた。

レ「あら、もうお皿覚めになつて?」

陸「まあな。」

咲「で、一体何の用ですか?」

正「いやのう。昨日はあんな事になつたからそれどいつもやなかつたんやけど、わしらの目的はむりやんとあるんや。」

レ「何?」

美「それは私が言います。」

咲「美鈴……そう言えればあなた、昨日は様子がおかしかつたわね?」

美鈴を軽く睨む。

美「はい、実は言いますと……」

レ「彼らについて行きたいのね?」

見透かしたような一言を言い放つた。

美「はい、そうで……って、え?なぜお分かりに?」

不思議そつな顔で尋ねた。

レ「私を誰だと思っているのよ?」

陸「ちすがだな。」

正「つてことやから、あなたの許可が貰いたいんや。」

咲「馬鹿な、中……美鈴は仮にもこの紅魔館の門番。やつやすや

すと・・・」

遮るよ。ハリココトが言った。

レ「いいわよ。」

正「おお、話が早いわ。」

咲「なーー。お嬢様、そのような判断を下してよろしいのですか？」

レ「ココアに食いかかるよ。」

レ「門番ぐらになら、ある程度どうでもなるでしょ。」

咲「しかし・・・」

レ「もう歯車は回つだしてこるのよ、これまでの一つよ。」

咲「・・・わかりました。お嬢様がそいつのであれば。」

陸「歯車？」

レ「気にしないでいいわ。」

正「よしぃや、これで交渉成立やの。」

美「そりですね。」

陸「じゃあ、進達を呼んでくるか。」

正「やつやのやつ。」

しばりくして、進達もニアの部屋に集まり、地図を広げて全員が座って話し合っていた。

陸「さてと、次の目的地はどうある?..」

正「距離的に言つんやつたら・・・人里やのう。」

進「人里か。」

美「いこなり、私も何度も行つた事がありますね。」

チ「よーし、悪は急げね!..」

正「やれ言つんやつたら、善は急げや。」

陸「じゃあ、次はどこに行くとするか。」

一同「おひーー!..」

全員が立ち上がり叫んだ。

少年達移動中・・・

しばらくして、紅魔館のロビーにて全員が身支度を始めていた。それをレミリア、フラン、咲夜が見送る。

フ「もう行っちゃうの? 進。」

不安そうな目で進を見る。

進「「」めんねフラン。でもまた「」に来るよ。」

フ「本当にー?」

進「ああ、約束するよ。」

チ「あたいもね! !

割り込むように入ってくるチルノであった。

咲「あなた、今度戦う時は油断も手加減もしないわよ。」

そつ言いながら、陸を見据えてきた。

陸「はは、その頃には俺はもっと強くなってるよ。」

自身に満ちた顔で言つのであった。

正「次は人里か?。」

美「あなた達は、まだ人里には行つた事はないの?」

正「ああ、なんせこの世界来てまだ2日だからね。」

美「それでよく、この紅魔館に来ようなんて考えたわね・・・」  
やや呆れた顔をする。

正「ええやんけ、それで新しい仲間できたんやし。」

そう言つて美鈴の肩を叩く。

美「・・・先がちょっと不安ね。」

軽いため息を吐く美鈴であった。

陸「よし、挨拶はすんだな?じゃあ行くぞ。」

こつして5人は陸を先頭に紅魔館を後にした。  
5人が見えなくなるようになつた頃、見送つていたレミリアと咲夜  
の元に、パチュリーが息を切らして走つてきた。ちなみにフランは  
部屋に帰つていた。

咲「どうしました、パチュリー様?」

その声が聞こえていないのか、無視してレミリアのすぐ近くまで來  
た。

パ「レ、レミア・・・少し話があるわ。」

息切れ氣味に言つてきた。

レ「何?」

パ「ほら、フランが暴れた原因よ。」

咲「あれでしたら、別段理由があるとは・・・」

咲夜の声を遮るように言う。

パ「それがね、ちょっと怪しい噂があるのよ。」

レ「噂?」

パ「さつき文の新聞が届いたんだけど、その新聞にここ最近幻想郷の各地で規模こそ小さいけど色々と事件が起こっているって書いてるのよ。」

そつ言つて二人に新聞を見せる。

咲「それが、妹様とどう関係性が?」

パ「その事件の中に、人が変わったように暴れだしたってのがあるのよ。」

レ・咲「!」

パ「どう?おかしいと思わない?フランは最近までおとなしかった。けど昨日急に暴れだした。これ、まったく関係ないとは言えないわ。」

「

レ「そうね・・・

咲「では、まさか紅魔館にその犯人がいるとー?」

パ「そつとま限らないけど、何かしらの跡はあると思つわ。

レ「・・・フランに聞いてくるわ。咲夜、行くわよ。」

咲「はーーー」

そのまま三人は、フランのいる部屋に向かつた。

その頃、紅魔館の屋上に何かがいた。

? 1「あらり、失敗しちやつたか。」

? 2「思つてもない来客だね。」

? 3「招かれざる姫だ。」

? 1「でも、昨日の様子からすると・・・」

? 2「え? もしかしてこのお密が?」

? 3「だとしたら話は別だ。丁寧にもてなそつか。」

? 1「それもいいけど、今はまだ歓迎の時間じゃないよ。」

?・2 「やつやう、他のお客さんたままだ招待状を配つてないもんね。」

?・3 「誰もこない歓迎会では、あまつに無料。」

?・1 「ふふ、だからこそこそ準備をしなきや。」

そう言つと、その者達はこゝから泣けるよひ立てつてこつたのであつた。

## 第十一章 第11の目的地（後書き）

### 後書き

不定期更新は変わりません。澄田です。

紅魔館編、堂々の完結でござります。何か妙なのが出てきましたね。

この後は割と長かった気のする人里編に入ります。紅魔館編とは違った面白さもあるので、是非期待しておいてください。

では、第十一章をお楽しみに。

## 第十一章 謎の助兵衛（前書き）

あらすじ

- 1、進、フランとチルノと遊ぶ
- 2、美鈴の勧誘に成功
- 3、5人は人里に向かつた

ではどぞ

## 第十一章 謎の助兵衛

### 第十一章 謎の助兵衛

五人は日が昇つてそれなりに時間の経つた匂(にお)りに、人里に向かつて歩いていた。

陸を先頭に正と美鈴が続き、少し後ろで進とチルノとしゃべつていた。

陸「お、よつやく見えてきたな。」

そう言つ陸の前には、それらしい人里が見えてきた。

正「案外早く着けそうやの。」

美「そうですね。」

チ「あたい、お腹空いてきたあ～」

わかりやすく、腹に手を当てる。

進「朝、おかわり三回もしたのに？」

チルノを呆れた顔で見る。

チ「空いたものは、すいたのよ～。」

美「まあまあ、着いたら少し早いですけど」飯にしませんか？」

チ「やつたあ……」飯「飯」

飛んで喜ぶチルノ。

進「僕もさんせーい。」

陸「それはいいな。」

正「わしもええで。」

美「では、満場一致でお皿にしましょ。」

そして五人は、気がつけば美鈴を先頭に人里へと入つていった。

進「わあ……結構大きいね。」

町並みを眺める五人。。

正「ほんまやのう。結構活氣もあるし。」

陸「じゃあ美鈴、案内頼むよ。」

チ「え? あたいがやる~。」

正「お前にやらせたら、こんなとこですら迷いかねんわ。」

チ「こんなとこで迷つはずがないでしょーーー。」

癪癩を立てる。

美「あはは、さつき言つたとおり、まあはい」飯にしましょ。何か希望はありますか？」

進「僕、カツ丼がいい。」

正「わしは、クロワッサンサンドがええのう。」

陸「こんな時は蕎麦なんていいな。」

チ「あたい、冷麺！！」

陸・正・進・美「いや、無いから！..！」

全員が並列に突っ込む。

そんな全員の突っ込みを無視し、我先へとどかへと向かった。

チ「あたい、あの店がいい。」

そう言つて、店が並んでいる一店を指差した。

その店先には、冷麺始めました！といつ張り紙が張つてあった。文字通り時が止まっているような店だった。

陸・正・進・美「あつたのね・..・」

呆れて、呆然となる四人。

チ「じゃあ、冷麺に決定ね！」

誰が決めた訳でもなく、すぐさま店の扉を開けようとする。が中々開かないようだ

正「こんな時期や、しまつてゐんやろ?」

疑つた顔を浮かべる。

美「そうですね。冷麺ですね。」

だが、チルノが聞いている様子は無かつた。

チ「この扉あ・・・開かないいいいー!」

がたがたと力を入れ続けていると、扉が外れ勢い良く扉が空を舞つた。

そしてそれは誰かの頭に命中した。当たつた者はその場に扉と一緒に横になつた。

陸・進・正・美「あー!」

全員がその方を見た。そしてその誰かは、見てゐる内に立ち上がつた。

陸・進・正・美「(あれは・・・)」

全員が思わず沈黙した。

その者は、チルノの方に歩み寄つていつた。

チ「え?どうしたの?そんなんにあたいを見て?」

その者に對して首を傾げる。

？「扉を吹っ飛ばしたのはあ・・・お前か？」

その声色は明らかに不機嫌だった。

陸・進・正・美「（慧音だ・・・頭にたんじぶがある・・・当たつたんだあれ・・・）」

全員の田線が、慧音の頭に出来たたんじぶに奪われる。その者とは慧音だったのだ。

チ「扉？あたい、そんなの知らないわよ。」

慧音から田線を明らかにそらした。

慧「嘘は駄田だぞ？」

笑顔で今にも切れそうだ。

チ「へん！…そんなの知らないって言つてるじゃない！…」

開き直り、声を荒げる。

慧「そうか、まだ嘘をつか。ならお仕置きが必要だな！…」

そいつ言つて、切れマークを笑顔に浮かべて両手の指を鳴らし始めた。

チ「ふん！…」のせこきょーのあたいと勝負するつて言つの！…あんたバカね！…」

慧音お仕置き中・・・

チ「うへ、」のせこきょーのあたいがボコボコにやられるなんて・・・」

頭突きを十回程喰らい、チルノは完全にノックアウトした。

慧「」れに懲りたら、嘘をついたら駄目だぞ。」

機嫌がよくなつたのか、さつきと違ひ声色は普通だ。

チ「ううう、わかつたわよ・・・」

そつ言つて、涙田で頭に手を当てる。頭にはバッテンの包帯のよつな物があつた。

進「チルノ、大丈夫かい?」

歩みよつてチルノに尋ねた。四人はどうやら高みの見物をしていたようだ。

チ「ううう、頭痛いわよー!」

八つ当たりに近い感じで、いかつた声を上げる。

正「ま、」にしつこええ藥や。」

陸「それもそうだな。」

慧「おや? 駄達がこの子の……」

慧「おや? 駄達がこの子の……」

声を聞いて陸たちを見た。

陸「保護者です。」

慧「だったら、君達がこの子をしつかり見なきや駄田だろ?」

一人に歩み寄る。

陸「いやお、実はですね、ここが悪いんですよ。」

セツヒト正を差し出すように前に出した。

正「え? またこのネタ?」

慧音の前に出され、戸惑つ。

慧「む、せつだつたのか。じゃあ……」

急に雰囲気が変わった。またもや怒りモードに入ったようだ。

慧「覚悟は出来るだらうな……」

セツヒトと違い、マジで怒った顔をしてきた。

正「あれ？」れつて、洒落で済まない気が・・・」

額に冷や汗が出てくる。

慧「問答無用――」

慧音の頭突きが正の頭にクリーンヒットした。

正「ぐわあああああああ――」

倒れた後、その辺りを転げ回った。

陸「まつたく・・・」

転げる正に向けて、冷たい反応をした。

慧「君も保護者なり、じつかりとしなきや駄目だらへ。」

陸「はい、以後気をつけます。」

白々しい笑顔で返した。

慧「じゃあ、吹っ飛ばした扉を付け直してもらひからな。」

そう言つて倒れている扉を指差した。

陸「わかりました。美鈴、手伝ってくれ。」

美「了解です。」

そつと扉の方に駆け寄り、それを外れた所に持つて行き、そのままがたがたと付け直した。

陸・美「これでいいですか?」

慧音に確認を取る。

慧「ああ。」

OKのサインを出した。

陸「そつと言えば、あの店は、貴方と何か関係があるんですか?」

慧音に歩み寄つて尋ねた。

慧「一応な・・・」

そつ言つてみると、美鈴が陸の方に駆け寄つてきた。

美「せつからですか?」  
「ひょん取りましょ。」

陸「ああ、それはいいが、この店は今やつていいのか?」

慧「それは・・・」

少し考えてみると、美鈴の脇の間から手が出てきて、美鈴の胸を揉んできた。。

?「お、この辺じゃ珍しいく発育のいい子だね~。」

美「……」

顔を真っ赤にして、後ろにいる者に裏拳を見舞つたが、その者はひよつと後ろに飛んで裏拳をかわした。

？「おつと、腕つ節もいいね～。」

その者は、頭は頭巾のぐるぐる巻きヒドーテーラ、はかま姿をしたじょつと渋めのおっさんだ。

慧「おいK！またやつたのか！」

慧音がその者に怒鳴つた。

K「ははは、これも幻想郷の女性の未来の為つて奴だ。」

高らかに笑つていると、怒りをあわらにした美鈴が走ってきた。

美「乙女の胸を鷺づかみにしておいて笑うなんて・・・許しません！――」

その乙女？はKに本氣のパンチを見舞つたが、Kはその場から消え、パンチは空を切つた。

美「なー？」

その者はまたもや美鈴の後ろに回り、今度はウエストヒップを触つた。そしてすぐさま後ろに飛んで距離を取つた。

Ｋ「お、戎も中々……」

そう言つて地面に着地すると、Ｋの頭に陸の拳銃の銃口が突きつけられていた。

陸「おい……」

どすの利いた声を出した。

Ｋはその気迫に押されて、両手をあげる。

陸「あなたはもしゃ、彼女のスリーサイズを測つていたのか?」

Ｋ「ああ……そうだが……」

陸「だつたら……」

少し溜めてひづり言つた。

陸「是非とも俺に教えてください。」

進「ぼ・・僕も・・・」

今までにない真顔で一人は言つた

美「おういいいい!…!…!…!」

美鈴がプロントさんばりの声を張り上げたのであった。

## 第十一章 謎の助兵衛（後書き）

### 後書き

「こんにちわ（こんばんわ）。前との空きはあんまりない『氣』がする澄田です。

最近真剣なのはっきりだったので、たまにはギャグもありかな~って事でやつました。

でもってオリジナルキャラ、Kを登場させました！

これはあくまでわしのオリジナルですので、他の所にはいませんよ。

このキャラについてはまあ追々で。

次回は結構面白いノリですよ。

では、第十二章をお楽しみに。

P.S 友達からの連絡で添削しました。

## 第十二章 見えてゐる者と見通す者（前書き）

あらすじ

- 1、五人は人里についた
- 2、チルノと正が慧音に怒られた
- 3、すけべおっさん、Kが登場した。

ではどう

## 第十三章 見えざる者と見通す者

### 第十三章 見えざる者と見通す者

少しして、彼らはKの店で冷麺を堪能した後、よくある畳の上で各自が座つて会話を交していた。

陸「いやあ、こんな時期でもつまいまんだな。」

進「うん、そうだね。」

笑顔の頬にはすぐにわかるビンタの跡があった。

K「おひ、 そうだろ?」

皿を片付けているKの頬にも、同じくビンタの跡がある。誰の物かは言つまでもない。

美「まつたく……これですから男の人は……」

ぶつぶつと不満な顔を浮かべる。

慧「何、男は全員こいつこいつ物じゃないぞ。」

美鈴をなだめる。

正「むしろ、女の方が怖いわ。」

不機嫌な顔の鼻には、バッテンの形のテープがついていた。

進「でも、それだけで済んでよかつたじゃん。」

正を察していった。。

チ「そりよーーーあたいなんて十発も喰らったのよーーー。」

だが傷ついた物はもうない。さすがは妖精の回復力である。

正「わし、お前ほど再生力ないし。」

呆れたよつて言つた。

チ「当然よーーーあたいがそこきよーなんだからーーー。」

その場で立ち上がりて言つ放つた。

陸「さて、食事が済んだ所で、この里を歩き回つてみるか。」

立ち上がり、全員を見て言つた。

正・進・チ・美「おつーーー。」

全員が威勢のいい返事をした。

陸「じゃあくせん、勘定で。」

やつぱりすでに代金を渡した。

「まこと。」

代金を渡した後、そのまま5人はそろそろと店を後にした。5人がKと慧音から見えなくなる程になつて、Kが口を開いた。

K「しつかし、まさかこんな時に客が来るなんてねえ。」

慧「そうだな、こんな時期に来るなんて珍しい物だ。」

K「・・・慧音、あの噂、聞いてるか?」

少し溜めてから言った。

慧「噂?」

K「ここん所、妙な事ばかり起きてるつて奴さ。何かまた問題でも起こす奴が出てきたのか?」

慧「さあ?私はただの一教師・・・問題解決は担当外だ。」

K「ただの教師って、よく言つねえ。」

慧「むしろ、そういう事はお前がやつた方が合つてそうだが?」

K「勘弁してくれよ、俺はもうおとなしくするつて決めたんだ。」

慧「本心はどうだ?」

K「・・・そりゃあ・・・まあ・・・」

悩み、戸惑つた。どうやら慧音の質疑がKの本心に届いたようだ。

その様子を察した慧音は、こんな事を言った。

慧「・・・正直じゃないな。」

K「まあ、本心を言つと、何が何かあつたらどうか考えてしまうからや。」

そう言つて外の町並みを見渡した。

慧「おや、おまえにそんな心があつたとは。」

K「そりやうつとはある。ここの人たちには結構世話になつてゐるし、それに・・・」

そう言つて慧音の方を真つ直ぐ見てきた。

K「お前さんに何かあつたら、心配なんだ。」

慧「な・・・」

Kの思わず発言に、顔を赤らめる。

K「ははは、最近どうも発育のいい子が少ないから、お前さんみたいなのが貴重なんだよ。そういう意味なら、さつきの子とかも中々・・・」

・

と笑つている顔に、慧音の頭突きが見事に入り、店内どこか外にまで響く悲鳴がしたのであった。

その頃、5人はのんびりと里を歩き回っていた。

正「わりかし、古い感じやのう。」

進「僕らの世界とは大違いだね。」

美「パチュリー様に聞いた事があるんですけど、幻想郷は外の世界より、魔法が発達していないからだそうです。」

正「魔法？わしらの世界に魔法なんてないで。」

陸「この場合、魔法ってのは科学技術の事だろ。」

正「ああ、なーる。」

陸「で、パチュリーが言いたいのは、幻想郷は科学者とか研究者が少ないから、文明があまり発達しない。だから俺達の世界より時代的な所が古いんだろうな。」

美「その通りです。」

そんな会話を交していると、後ろにいた進が陸達に呼びかけてきた。

進「あの・・・ちょっと・・・」

正「どうしたんや？」

三人が後ろを見ると、進の隣にいるチルノが、全身を真っ赤にし、シコシコと湯気を出してばたんと倒れていた。

美「ええ！？ 一体どうしたんですか！？」

美鈴がチルノに駆け寄る。

正「これって……もしかして知恵熱か？俺達の話が難しそぎたみたいだな。」

考え込んで言つてきた。

進「言つてないよ……」そのままじやチルノどうなつちやうの……？」

不安そうな声を出す。

陸「多分……溶けるんじゃないかな？」

進「ええ……そんな……どうすれば……」

美「……治す方法は、あると思います。」

正「それって、もしかして……」

陸「永遠亭だな。」

美「はい、あそこなら、恐らく治せない薬はないかと。」

正「それはええけど、場所知ってるんか？」

美「私はちゅうと……」

陸「あれは……」

そつと少し遠くを見つめた。誰かを見つけたようだ。

陸「進に美鈴、今から宿を探してチルノを看病してやつてくれ。正  
は俺についてこ。」

みんなに指示を出す。

正「へ? こきなつびつしたんや陸?」

陸に問いただす。

陸「今は時間がない。急ぐぞ! !

と言つたかと思つと、陸は走り出していた。

正「ちゅ、またや陸! !」

陸を追いかける。

陸の走る先に、白い髪をした女性が立っていた。

陸「あなたは……妹紅ですね。」

陸がその女性に話しかけた。

? 「ん? 誰だ?」

後ろを向いていたので、陸の方に振り返った。その者は陸の言ったとおり、あの妹紅であった。

陸「やはつやうでしたか。」

妹「だから、お前誰だ？」

やつまつてこと、正も駆けつけってきた。

正「おい陸、急に走りおつて……一体ビビりしたん……あ、妹紅  
「」

妹紅をたまづいたので、それとなく反応した。

陸「挨拶が遅れて申し訳ありません。俺は戦動 陸と言います。そしてこいつが拳武 正です。」

一例をし、紹介をした。

妹「で、そんな初対面なお前達が、あたしに何の用？」

陸「実は言いますと、永遠亭までの案内を頼みたいのです。」

妹「ああ、あそこまでの案内か。わかった。案内してやるよ。」

陸「本当ですか。」

正「やんぎゅ。」

顔を上げる一人。

妹「じゃあ、すぐに行くよ。」

陸「はい。」

そして三人は人里を後にし、永遠亭に向かつた。

少年達移動中・・・・

妹紅の案内の元、竹林を進んでいく一人。

妹「ああ、あれだよ。」

そうこうしている内に、少し遠いが一人の前にあの永遠亭が見えてきた。

陸「あれか・・・」

遠くから永遠亭を見る。

妹「じゃあ、あたしはこれで帰らせてもらひつよ。ここにはあんまり長居したくないからね。」

そう言ってその場を去つていった。

陸「ありがと。」

正「すまんかったの。」

後ろ姿に感謝の言葉を言った。

妹紅は返事代わりにそのまま右手を上げて答えた。そして、妹紅は竹林の中には見えなくなつた。

正「よっしゃ、そんじゃ永琳に薬もらこに行くか。」

やつひて、永遠亭に向かつて歩き出した。

陸「おい、」の辺りつて確か・・・」

正の足元を見る。そこはあからさまに墨して色をした草があつた。

正「え？ 何が・・・」

言いかけた時に、正は落とし穴に落ちてしまった。

陸「正・・・」

陸が駆けつけると、草木とともに埋もれている正がいた。正は意識を失つたようだ。

陸「おいおい、早速か。お前は昔からじつじつと・・・」

と呆れてこると、どこからかともなく音がした。

陸「……」

周りに気配を配る。

陸「誰だ？俺相手に隠れても無駄だぞ。」

そう言つと、陸の後ろの大きめの竹から、てゐが姿を見せってきた。  
「へへーん、たかが人間の分際で、私に挑む氣？この黒張り名人  
の私に！…」

陸を見て自慢げに言い放つた。

陸「譲ちゃん…誰に物を言つてるかわかつてゐるのかな？」

不気味な笑顔をてゐに向けた。

「ふん！…どんな手を持つても、ここにいる時点で私の勝ちよ  
！…そこに落ちてゐる奴と同じく、黒にこなめてやるもんね！…」

そう言つて正の落ちた落とし穴を指差した。

陸「黒あ？黒つてのは…」

カードを拳銃に変えて、構えた。

陸「これの事かなあ！？」

そう言つてあたりを打ちまくつた。

打つたところから、恐らくは黒らしいものがどんどん壊れていつた。

て「え？え？え？え？」

と驚いている間に、陸の銃声が止んだ。

陸「やでと・・・」それで全部だな。」

構えを解いた。

て「そんな・・・なんでわかったの？」

絶望し、地に膝を落とした。

陸「それは単純な答えや、それは・・・」

てゐにゆづくり歩み寄る。

陸「隈に関しては俺の方が一枚上手だつて事だな。」

わづき以上に不気味な笑顔をてゐに向ける。

陸「やあ、じつあるへ・じつあるへ・じつあるへ・」

てゐにどんどん顔を近づける。

だがその顔の目前に、銃弾らしき物が飛んできた。

陸「おつと。」

そのままバックステップで交した。

その隙を見て、てゐは永遠亭まで走り去つていった。

陸「あ、待て……」

追いかけようとしたが、今度は陸の足元に銃弾が飛んできた。その後に、どこからともなく声がした。

?「人間よ、ただちにここを立ち去りなさい。そもそもば、次は威嚇ではなく攻撃します。」

声の元はまったくわかりそうにない。

陸「……」の感じ、芝居がかつた台詞さえ外せば、間違いないな。  
・・・

銃弾の飛んできた足元から、周りの方に目を移した。

陸「この声の主は……うづんげ、あなただな。」

誰もいないとこに話しかける。

?「……」

陸「返事しない所から見ると、図星だな。」

?「……どうやら私を知っているようですね。ですが、その様子ですと私がどこにいるかわからないので

はありませんか？」

陸「まあ、田じゅ見えないな。だが……」

誰もいないはずの上方に銃口を向ける。

陸「悪いけど、俺にはバレバレなんだよーーー！」

銃弾を放つと、その方の近くの竹が不自然に揺れた。  
そして近くの地面から、何かが降り立つた音がした。

そこから、うつすらとうどんげが姿を現した。  
服の肩辺りが少し破れていたので、銃弾は肩をかすめていたようだ。

う「・・・大した物ですね。隠れている私を狙つて撃つなんて。」

服の破れた所を手で押さえ、陸を見つめる。その目は真っ赤になつていた。

陸「ははは、これが俺の能力だからな。」

う「そうですか、なら・・・」

そう言って、目の赤みをますます強くしてきた。

う「長視 インフレアドムーンーー！」

そう言つと、うどんげは陸の視界から完全に姿を消した。

う「じゃあ、うどんげは陸の視界から完全に姿を消しますよ？」

再び誰もいないところから声がしてきた。

陸「やれやれ、俺はここに戦いに来たんじゃないんだがな。」

困った様子を見せる。

「さつきの様子では、あなたは明らかに、こひらに攻撃を加えたと考えられますか?」

陸「おいおい、あっちから農仕掛けといて、そりゃないな。」

「どうぞ、こから立ち去っていただきます。」

そう言つと、竹やぶの暗闇から陸田掛けで銃弾が大量に飛んできた。それを陸は軽快にかわしていった。

陸「それは出来ないな。俺には病気を抱えた仲間が待つてるんだ。」

かわしながら言つ。

「・

陸「だから、俺は絶対に退けないんだよーー。」

銃弾の飛んできた方に向かつて攻撃をするが、攻撃が当たつた気配はない。

しばらくして、うぶんげの銃撃が止んだ。

陸「さて・・・場所は何となくわかるが・・・次はどう出る?」

周りに気配を配る。

どうやら陸は位置を感じ取つたようだ。

陸「……今度は左か……」

そつこつて左手の銃で左を撃とつとするが、攻撃は真上から来た。

陸「しまつた……マインドロップニングか……」

銃弾の雨によつて陸の周りが爆風に包まれた。

体が少し巻き込まれながらも、その爆風から転がり逃れる。

陸「危ないな、まさか上から……なー?」

逃れた先は、視界を遮るほど緑色の煙に包まれていた。恐らく毒ガスだろ?。

陸「今度は……瓦斯織物の玉か……まずい……意識が……」

ふりつぶ陸。

陸「……はあ……はあ……はあ……」ここまで防戦一方になるとはな……

・

そのままその場に跪いた。

「ビツビツです……」今まですれば、もう降参せざるを得ないでしうう?」

恐らくは陸の前方から話しかけてきた。

陸「そうだな……普通なり……なあ……」

体を起こし、声のした方に銃弾を放った。

う「愚かですね・・・やはり人間は度し難い。」

やはり姿を見せない。

う「次で最後です。」

そいつ言つと、陸を取り囲むように八人ほどいのつじんげが姿を現した。

う「せめて、安らかにしてあげましょう・・・」

そのまま陸に向かつて一斉に走つてきた。

陸「いじつなつたら・・・！」

万事休すの陸は、自分のいる場所を爆発させた。

う「！！」

突然の事に、八人のうどんげは足を止めた。

毒煙を吹き飛ばされ、陸自体はうどんげからは煙にまかれ見えない。

う「無駄な抵抗を・・・」

煙が晴れると、そこには一本のナイフを構える陸がいた。

う「そんな物で、どうする気です？」

陸「さあな・・・だが・・・君にはこうこうのが効きそうでな・・・

「

そのナイフを、前方にいる一人のうどんげに向ける。

う「・・・いいでしょう、ナイフ一本で私を止められるのなら、やつてみなさい！…」

八人のうどんげが、一斉に陸に襲い掛かった。

陸「は・・・本体ならもうわかつてゐる・・・」

前方に構えたナイフを空中に構える。

そこには降下していくうどんげがいた。

う「…よく躊躇しましたね・・・でも、そんなナイフ！」とさで……

そのまま攻撃しようとしたが、陸のナイフが柄から飛び、うどんげの腕をかすめた。

う「く！？」

不意の攻撃に、陸から距離をとるよつて着地した。

う「！」、これは・・・

かすめた所を見る。

陸「スペツナズナイフってんだ。見るのは初めてだろ？な。」

飛ばした後の柄だけの物をうどんげに見せる。

う「ふ・・・ですが、」の程度では・・・あれ?」

うどんげの視界が突如霞み、顔に手を当てた。

陸「やつせのお返しや。立つのもやつじだろ?」

うどんげのナイフに毒を仕込んでいたよつだ。

う「馬鹿な・・・私に効く毒なんて・・・」

なんとか立つてはいるが、意識は朦朧としている。。

陸「香森堂の近くの森の草や。あなた相手にこじまで効くとは思わなかつたがな。」

う「まさか・・・魔法の森の・・・」

陸の方を見るが、その田にはもはや陸はまともに映つていない。

陸「その通り。さて・・・終劇だ。」

拳銃をカードにしまつた

そして違うカードを出した。それはショットガンになつた。

陸「これで終わりだ!-!」

それを放ち、うどんげは後ろにあつた竹まで吹き飛んでいき、そのまま地面に突つ伏したのであつた。

## 第十二章 見えてゐる者と見通す者（後書き）

### 後書き

こんじちわ（こんばんわ）。ちょっと頑張つてみました澄田です。なぜか友達と連想ゲームをしながら添削をしていました。なので誤字脱字がちょっとあるかもしれません。

ギャグの後でまたも戦いです。まあ楽しくやれたので満足です。

みんなんざじひ思つてこむのかはよくわからませんけど、これからもつと面白くなつまますよ。

では、第十四章をお楽しみに。

## 第十四章 人里の夜（前書き）

あらすじ

- 1、チルノが熱くなつた
- 2、陸と正が永遠亭に向かつた
- 3、陸がうどんげと戦い、勝利した

ではどぞ

## 第十四章 人里の夜

### 第十四章 人里の夜

陸とうどんげの戦いが終わつた後、正の落ちた落とし穴から大きな音がした。

正「ふわあ！－なんじゃあ－りやあ－？」

落とし穴から、正が這い出でてきた。

正「一體どつな・・・あ、陸！－」

出でようとしている途中で陸を見つけたようだ。

陸「お、やつと田を覚ましたか。」

正を見てさつきの武器をカードにしまつた。

正「・・・えーと、何があつたんや？」

その体勢のまま、戦いで滅茶苦茶になつた周りを見てから尋ねた。

陸「ああ、一応説明してやるよ。」

少年説明中・・・

正「ほお・・・わしが氣絶しとる間に、そんな事が・・・  
わしあと違ひ、一人は適当な所で立つて話をしていた。

陸「そつだ。たく、お前が寝てる間に大変な事になつてたんだよ。」

正「それやつたら、わしを起せばよかつたやう?」

陸「いや、お前はあのまま埋めとひつて思つてな。」

正「おういー!何考えとんねんお前!ー!」

正が陸に突つかかつてこると、正の背後から、倒れてこぬうびさんば  
が起き上がつてきた。

「う「まだまだ・・・」

ふうふうと陸たちに近づいてきた。

陸「おい、勝負はもうつこてるだらへ。これ以上戦うのは・・・」

「う「なー?」

突如叫び、歩みを止めた。どうやら一人の後ろに誰かがいるようだ。

陸・正「?」

うどんげの方を見ていた二人は、背後に振り返った。  
そこには、あの永琳が悠然とこっちを見ながら立っていた。

永「……うどんげの」の様子から見ると、あなた達一人があの子を？」

うどんげを見た後、一人を睨みつける。言葉にはうつすら殺氣が混じっている。

正「ちや、ちやうで！ わしゃのう！」つが・・・

焦つた様子で陸に手を向けると、陸が永琳に対し、なぜか跪いていた。

陸「数々の『無礼、どうかお許し願いたい。』

永琳を真つ直ぐに見る。

正「え？え？ええええ！？」

その様子を見て思わず驚いた。

正「あのう、『』はお前がわしを差し出すとかせえへんの？ てかキヤラ違くね？」

だが陸は正の発言を完全に無視した。

陸「我々は『』に争いに来たのではありません。」

正「おーい、陸やーん？」

正の問いかけを、陸は「」と「」とく無視した。

永「では、あなた達は何をしこへ」

陸「我々は、ただ薬をと・・・」

永「じゃあ、なぜうどんばがああなたてるの?」

ぼうほろになつたうどんばを見てから尋ねた。

陸「それは・・・彼女から攻撃された為、正當防衛とこづ形をとらせていただきました。」

永「なるほどね。」

察した様子。

陸「いかよつにも罰は受けましょ。ですが・・・薬だけでもいただきたい。俺には病氣を抱えた仲間がいます。その為にも、どうか薬を・・・」

顔を下に向け、永琳に頬み込んだ。

永「・・・顔を上げなさい。」

やつまわれ、陸は顔を上げた。

永「ただ争いに來ていたのなら、私自身が追い払おつかと思つてい

たけど、やつこつ事なら話は別ね。」

陸「では、俺の申し出せ・・・・」

永「ええ。出来る限り協力するわ。」

陸「・・・ありがと「ひ」れこます・・・・」

頭を深々と下げる。その目に少し涙があつた。

正「・・・えーっと・・・恩に着るでーーー。」

周りを見て少し考えた後、陸と同じように永琳に頭を下げた。

永「別にそんなにしないでいいわよ。仮にもいつちが悪いんだから。」

やつ言つと、永琳の後ろからてゐが寄り添つように姿を見せた。

正「あ、てゐ、やつあはなくも・・・・」

てゐを睨み、前に出よつとしたが、陸が止めた。

永「「い」めんなさいね、この子も懸氣はなかつたのよ。」

やつ言つと、てゐは少々おびえがちに正を見て少しく頭を下げた。

それを見て正は、

正「いや、その・・・まあ、素直に謝るんやつたら、それでええけ

ど・・・

戸惑い、照れた。

陸「お、さすがは口づ口・・・」

正「シャラーップー・・・」

陸の言いかけた口を正が手で覆いで塞いだ。

永「で、その病氣の仲間は?」

陸「それでしたら、実は」」」」は・・・」

困つた様子を見せる。

永「だつたら・・・」

そつ言つてうどんげの方を見た。

永「うどんげ、あなたがとりあえず診てきて。」

う「ええ!? 私がですか!?」

永「私があまりここを離れる訳にはいかないでしょ? それに、今  
回悪いのはあなたなのだから。」

う「・・・わかりました・・・」

ため息混じりに言つた。

陸「では、彼女がとりあえず我々に同行し、処方を……といった形でよろしいですか？」

「うどんげに手を向け、永琳を見て尋ねた。

永「ええ、そういう事になるわね。」

正「ほうか。そんじゃよろしく、うどんげ。」

振り向き、うどんげに手を振る。

う「やれやれです……。」

困った様子を見せるうどんげであった。

その頃、進は里の宿にてチルノを一階の和室の部屋で布団に寝かせ、看病をしていた。

進はチルノのいる部屋で頭に乗せるタオルの水を桶に絞っていた。

進「チルノ、大丈夫？」

タオルをチルノの頭に乗せ心配そうな声で尋ねた。

チ「へん……そこきょーのあたいが……」れぐらいで……。」

布団から上半身を起したが、顔を赤くし、意識は朦朧としていた。

進「無理しちゃ駄目だよ、今は寝てなきゃ。」

そのままチルノを寝かせる。

チ「・・・」

寝かされてから、進をじっと見た。

進「ん? どうしたの?」

チ「いや・・・別に・・・」

そつ言いながら、進から視線を逸らした。

進「何か言いたい事とかでもあるの?」

視線を逸らしたチルノに尋ねた。

チ「だから、別にないくてば・・・」

目を逸らしたまま返事をした。

進「えー? 本当に?」

立ち上がり、顔をそらした方に回り込んできた。

チ「もう・・・しつこいわね!」

いらっしゃって立ち上がったが、そのまま進の方にふらつと倒れた。

進「おつと。」

倒れてきたチルノを受け止める。

チ「あたいは・・・ただ・・・」

言いかけたが、そのまま進の胸元で寝てしまった。

進「あれ？チルノ？」

チルノに話しかけるが、当然返事をしない。  
そんな時に、美鈴が部屋の襖を開けてきた。

美「進、チルノの様子は・・・」

何か言いかけたが、二人の様子を見て美鈴は、

美「あら」「めんなさい、邪魔したみたいね。」

棒読みで言いながら、真顔でゆっくり襖を閉めた。  
その後、進はチルノを再び布団に寝かせ、座る。

進「邪魔つて・・・何の事だろ？」

考え込む超鈍感少年だった。

その頃、陸と進はリュックを背負つた「うどんげ」と共に竹林を歩いていた。

陸「すまないな、わざわざ来てもうって。」

先頭を歩く「うどんげ」に話しかける。

う「別にいいんです。師匠に言わされましたし、それに……」

陸「それに？」

う「いつもこの形で、人里に行つてみたかつたんです。」

陸にそれとない笑顔を向ける。

正「一人じゃ嫌なんか？」

う「まあ……そうなりますね。」

陸「人目が気になるのか？」

う「……」

少し下を向いた。

正「言いたくないんやつたら、別に言わんでもええで。」

う「……はい。」

陸「お、ようやく見えてきたか。」

そういうことをすると、さつきの人里が見えてきた。

正「やでと、あいつらのおる宿を探すとすつか。」

三人は人里に入り、うるうると探し回った。

しばらくして、陸が少し離れた所から恐らくは宿の前で門番っぽく立っている美鈴を見つけた。

陸「あそこか・・・おい、美鈴。」

陸の呼びかけに、そっぽを向いていた美鈴がこわびに振り向いた。

美「あ、陸、正！」

陸たちの方に駆け寄る。

正「帰つたで、美鈴。」

軽く手を振る。

美「おかえりなさい。それはそつと薬は？」

正「それやつたら、ここにおゐるで。」

隣にいる「ひんげ」を指差した。

「うひょひと、私を薬呼ばわつしないでください。」

やや不満げな顔で反論した。

美「ああ、誰かと思えば貴方ですか。」

「うひょひとを見る。

「うひょひとですよ。患者はひじですか？」

美「ひじです。」

そう言ひて、宿を指差した。

陸「それじゃ、中に入るとするか。」

そのまま四人は、宿に入つていった。

少年達移動中・・・

夕焼け空が窓から差し込む宿の一階で、寝ているチルノの容体を見  
る「うひょひと。他の者はやや離れたところに座つていた

「う・・・」

黙つたまま容体を見る。

正「うへ、やつぱは妖精相手じや難かしいんぢやう？」

「うどさげに聞こえなによつに小声で陸に話しかける。

陸「う」は幻想郷だ。妖精の処方ぐらこあるだい。」

正と回じ調子で答える。

「う・・・ふう。」

唐突に大きく息を吐いた。

進「ねえ！？ チルノビうなるのー？ 病氣は治るのー？」

じつとしていたが、いつもたつてもこらねずうびんげに駆け寄つた。

う「大丈夫。この薬を飲んで今日一日安靜にしていたら、明日には治つてるわ。」

そつ言つて薬を枕元に置いた。マークはもううそをううううである。

進「よかつたあ・・・」

ほつと胸をなでおろした。

「う「じやあ、私はこれで・・・」

立ち上がりて部屋を出ようとすると、陸が呼び止めてきた

陸「ちよつと待つてくれ。」

「なんですか？もつ用は済んだでしょ？」

陸の方に振り向く。

陸「今田はもう遅い。夜道を歩くのはあまりよくなないこと釋つが？」

「では、私はどうしろ？」

陸「だから、今田はこの宿に止まつてこつたらいいんじゃないかな？」  
君はまだこゝをあまり見ていしないしな。」

「……」

正「やつせで、せつかへやつて、こんな時べりこゑへつしてもえ  
えやん。」

「……しうがなこですね。」

陸「よし、やつと決まつたら……」

進「飯でよつて……。」

正「やつせのひ、今田はやけに腹が減つたわ。」

美「お皿が冷麺でしたしね。」

陸「じやあ、やつとやるか……。」

一同「おひーー。」

そうして5人は宿で夕飯を共に過いした。

一同食事中・・・

食事が終わり、正と進は男性用の部屋に、美鈴とチルノは女性用の部屋で眠りについていた。

うどんげは一人、宿の屋根の上に座っていた。

う「・・・」

ぼーっと夜空を眺めていると、陸が後ろからぬつと出ってきた。

陸「どこにいるかと思つたが、こんな所にいたのか。」

そつとうどんげの隣に座る。

陸「なんでこんな所にいるんだ?うどんげ。」

うどんげを見ながら尋ねた。

う「ここなら、綺麗な夜空が見えるから。」

眺めたまま答えた。

陸「なるほど。でも、部屋の窓からでも見えるんじゃないのか？」

「窓からじゃ、味気ないもの。」

陸「ああ、そう言えば君の住んでる所は竹林に囲まれているから、夜空が見えづらさうのか。」

う「ええ。だから、いつの時でもないといつやつて眺める事も出来ないのよ。」

陸「へえ……やっぱ月の故郷を思い出したつするのか？」

う「そうね、それもあるけど、この夜空は本当に綺麗だからって理由が一番ね……って、なんで私の故郷が月だつて知ってるの？」

陸の方を見てから尋ねた。

陸「さて、何ででしょうかな。」

とほけた調子で返した。

う「ちよつと、ばぐらかないでよ。」

陸「まあまあ、それは今いじやないか。」

う「……それもそうね。」

そしてまた、夜空を見た。

陸も同じように夜空を眺める。

少しして、うどんが陸に尋ねてきた。

う「・・・外の世界の夜空は、どんな感じなの？」

陸「俺達の世界じゃ、夜空が見える所は中々ないんだ。」

う「どうこう事？」

陸「ここは夜になれば暗いだろ？でも俺達の世界は明るさがるんだ。だから、夜空なんて全然見えないんだ。」

う「え？・・・」

陸「でも、田舎とかに行けば、こんな感じの夜空を見る事は出来るかな。例えば・・・えーっと・・・」

夜空を指差し探すが、それらしい物が見当たらず、困惑する。

陸「そうだな・・・えーっと・・・どれだろ？な？」

う「ふ・・・ふふふ。」

その様子を見て笑った。

陸「ちよ、笑うなよ。」

う「だつて・・・自分で言つてそれだもの・・・ふふふふ。」

なおも笑い続ける。

その時、陸がある事に気づいた。

陸「……やつと言えば、やつきから敬語じやないな。」

「あ、やつと言えばそつね。敬語の方がいい?」

陸「いや、俺はその碎けた感じの方がいいと思つた。かわいいし。」

軽い笑顔をうどんげに向けた。

う「か、からかわないでよ……」

少し照れながら言った。

陸「まほまほ、じめんじめん。」

う「もう……」

陸「なあ、うどんげは普段からずっと敬語なのか?」

う「……てふとかには今みたいな感じね。」

陸「つて事は……俺はてふと同じレベルつて事かよ。」

う「やうこつ事……かしらね。」

陸「おい、否定じりよかは……」

う「いいじゃない、別に。」

陸「まあ、それはどうでもいいが。せつだうどんげ、一つ聞きたい事があつたんだ。」

う「何?」

陸「俺達と・・・旅をしないか?」

う「旅?」

陸「そうだ。俺達は今幻想郷を旅しているんだ。だから、一緒に来ないか?」

う「旅・・・」

唐突な一言に、うどんげは困惑した。。

陸「突然言つて戸惑つてるのは思つていい。でも、俺はうどんげから感じ取つたんだ。君はもつと、外の世界を知つてみたいって。」

う「どうして・・・わかったの?」

陸「俺にはわかるんだよ。君みたいな子とかの気持ちは特にわかる。」

う「そりなの・・・でも駄目よ、だって私はまだ・・・」

言葉を失つたその時に、陸が畳み込むよに言つてきた。

陸「大丈夫だ。今の君の気持ちを永琳に伝えれば、きっといける。だから、君の思いを言つてくれ。」

う「私は・・・私は・・・」

少し下を見てから、

う「みんなと・・・旅してみたい・・・」

顔を上げて、やや小声で思いを告げた。

陸「だったら、明日永琳に直談判するか。」

う「でも・・・本当に大丈夫なの?」

陸「大丈夫だつて、俺がなんとかするさ。」

う「陸・・・」

陸「じゃ、今日はもう遅い。明日に備えて、もう寝るか。」

う「ええ。」

そして二人は、屋根から下りて自分の部屋に入り、眠りに着いたのであった。

## 第十四章 人里の夜（後書き）

### 後書き

今回は時間差なんて小細工なしで連続投稿します。澄田です。

今回からうづらじんげが仲間入り！！するかもせんね。てかこれ  
ほぼ確定（╹◡╹）

さて、これから物語は怒涛のなんたらに入りますよーー！確か。

まあどうなるかはあくまでご想像にて事で。これからもよろしく  
お願いします。

あ、一応人里編的な物はこれにて終了です。

これからは個人個人を見ていきます（いわゆる修行編的な）  
では、第十五章をお楽しみに。

## 第十五章 鬼と人（前書き）

あらすじ

- 1、うどんげがチルノを診た
- 2、うどんげが陸達と宿に泊まった
- 3、陸がうどんげを勧誘し、とりあえずOKをもらつた

ではどぞ

## 第十五章 鬼と人

### 第十五章 鬼と人

翌日、陸たちが泊まっている宿の布団に、一つだけ誰かが寝ていた。後の布団があつた。正の布団である。

正自身はかなり早起きし、人里内をランニングしていた。

正「おはようさん……」

半そでにジーンズの格好で、行きかう人々に挨拶をしていった。

しばらく走り、町の入り口辺りで休憩をした。

正「ふう、やっぱ朝のランニングは気持ちええのう。ここは空気が綺麗やし、それに……」

上つて間もない太陽を仰いだ

正「今日はええ天氣や。こんな日は何かええ事でも……」

そう言つていると、正から見て太陽の日を隠すように、空に何かが飛んでいた。

正「ん?なんやあれ……?」

それは空中で方向を変えて正の方に落ちてきた。

正「ちよ、たんまたんまあ！？」

正は落ちてきた物をとつさにかわした。  
それは土煙を起こしながら地面を滑り続け、そのまま木にぶつかって止まった。

正「・・・な、なんなんや一体・・・？」

その方に振り向いた。

土煙で実体は見えないが、煙越しに何かが動いていた。

？「おお、よく避けたねえ、人間・・・」

それは、正の方にゆっくりと近づいてきた。

？「最近外から来た奴ってのは、君かい？」

土煙から出てきたのは、ちよつと角の間に大きめのたんじぶが出来ている伊吹萃香だ。

正「・・・」

突然の出来事に戸惑い、言葉を失った。

そんな様子の正に、萃香が怒声を出して問いただした。

萃「どうなんだい！？」

その声によつて、正は我に返つた。

正「・・・ああ、そうや・・・」

我に返つた正に、萃香が何かを覚つたような事を囁つてきただ。

萃「・・・ふうん、今まで色々な奴を見てきたけど、あなたは少し違つ感じがするねえ。」

正「ああ、わしはただの人間とちやうで。これでも能力持ちつて奴や。」

皿皿をアピールするよつて、右拳を返して萃香の前に出した。

萃「よろこび。じゃあ、皿皿とかこける口かい。」

よつとした笑顔を正に向けた。

正「せせせ、皿皿つて皿つんかのつ・・・まあ殴つ合ことかやつたりこける口やで。」

照れながら頭を搔いた。

萃「ますますよろこびだつたが、今すげつてのはじりだい。」  
正がわつわやつたアピールのように拳を掲げた。

正「ええー、こない朝つぱらから。」

萃「朝つぱらだからこのよじやないか。」

正「・・・しゃあなこのつ。弾幕戦とかなりともかく、ただの皿皿ぐらこやつたり・・・。」

そつと置いて萃香がいた方をちらりと見ると、なぜか萃香がいなかつた。

正「あり? どう行つたんや?」

正は周りを見渡したが、萃香はどこにもいない。

正「まさか……」

何かを感じ取つたのか、正が上を見上げると、そこには右拳で殴る構えをしている萃香がいた。

萃「油断禁物……」

右拳を落しながら放ち、周囲に鈍い音が広がつた。

正は両手を交差させ、萃香の拳を防いでいたが、反動で少し後ろにすべつた。

萃香はそのまま地面に着地した。

殴つた手をちらりと見た後、正の方を見た。

萃「……へえ、なるほど。」

正「危な……一度も空中から来るとほのう……」

殴られた所を少し見た後、萃香を見る。

萃「君の能力つてのは、今のガードかい?」

正「……えーっと、そやのう……一応?」

戸惑いながら答えた。

萃「それなら・・・君自身の力をみせなーーー！」

そう言って、キー・パーの様な構えを見せた。

正「お、ええんか？」

萃「さっきのは明らかに不意打ち・・・あたしは本来やつらの嫌いなんですね。」

「やがて、そんじやね・・・瞬く間にやるだべーーー！」

右拳を構える。

だがその時、正がある事に気づいた。

正「と、その前に、名前ぐらこ乗つておかなあかんの。わしの

名前二編

構えたまま挨拶した。

萃「そうかい、じゃああたしも乗つていいのか。あたしの名前は伊吹萃香。覚えときな。」

同じように挨拶を返した。

挨拶が終えると、正が萃香に挑みかかつた。

正「そんじゃ行くで！！ライドナックル！！」

飛び込みからパンチを放つた。

萃「（お、結構早いね・・・）」

両手を正のパンチから守るように交差させた。  
正の拳は交差させた所の中心に当たり、さつきと同じような鈍い音  
がした。

正「これでどうやーーー！」

だが萃香はぴくつとも動いていなかつた。

萃「人にしちゃ大したもんだね。でも・・・」

殴つた拳を右手で掴んだ。

萃「この程度じゃ、あたしには効かないよーーー！」

正をそのまま上方に放り投げた。

正「のわあああああ・・・」

悲鳴を上げて飛んでいった。

そのまま元いた場所に落下し、周囲に土煙と轟音を響かせた。

正「・・・」

うつぶせたまま動きそうにない。

萃「まあ、人間にしちゃ中々・・・」

と言つていると、正が両手で飛んで起き上がり、萃香に回し蹴りを放つた。

正「まだやでええええ！……！」

だが回し蹴りを放つた足首を萃香に掴まれた。

萃「ガツツはあるね、気に入つたよ。」

掴んだまま感心を示した。

正「は、放せや……」

無駄にじたばたするが、右足はまつたく動きそうにない。

萃「次はもつと腕磨いてきな。あたしはいつでも……」

掴んだ足を後ろに振つた。

萃「挑戦歓迎だからね！！」

正をハンドボールの様に前に投げた。

正「ありやああああああ……」

投げられてしばらく滑空し、ちょうど泊まっていた宿の前まで飛んでいき、そのまま頭から上半身が道にめり込み、轟音を立てた。突き刺さった状態のところに、宿から美鈴と陸が出てきた。

美「誰です？朝っぱらから大きな音……」

突き刺さった正を見て、呆然とした。

陸「……もしかして、正か……？」

その状態の正は、返事もせずぴくりともしなかった。

陸「……とりあえず、引っこ抜いた方がいいよな？」

美「……そうですね。」

二人は両足を持つて正をずぼっと引っこ抜いた。正の顔に意識は完全になかった。

陸「……何があつたんだ、こいつ？」

美「さあ……」

一人が正をとりあえず横にしていると、萃香がきょろきょろと何かを探すように歩いてきた。

萃「あれ？どこに飛んで行つたんだ、あいつ？」

そのまま陸たちの所まで來た。

萃「お、ここにいたみたいだね。」

横になつている正を見て言った。

陸「あなた、正の事を知つてゐるのですか？」

萃香を見て尋ねた。

萃「ああ、こいつとちよこと喧嘩しててね。」

美「ええ！？ 正があなたと…？」

ややオーバーリアクションで言った。

萃「そりだよ、人間にしちゃ大したもんだね。でもまだまだ若いね、経験が足りないよ。」

陸「（鬼相手に、経験もくそもないだろ…）」

顔に出したが、口には出せなかつた。

萃「ま、あたしの見たとこりだけど、こいつは伸びるよ。どれほどになるかはわからんけど、もしかしたら…」

そつ言いながら踵を返し、もと来た道を歩いていった。

萃「そいつが起きたらそんな感じな事言つとこて。じゃ。」

少し手を振つて、その場を後にして。

萃香が見えなくなる頃に、正が目を覚ました。

正「…あつ…こ…」

上半身を起して辺りを見た。

美「正……田を覚ましたのですね。」

美鈴が正に駆け寄った。

正「お、美鈴か……てそれより、萃香はどいやーっ。」

立ち上がり、また周りを見渡した。

陸「萃香なら、どこかに行つたぞ。」

正「何でやーっあいつ、まだ勝負は……」

自分の拳を見て言葉を紡いだ。

陸「……正……お前、負けたんだよ。」

少し重苦しく言った。

正「やうか……やうやのひ……あんだけ一方的にやられたら、やつなるのう……」

美「正……」

陸「……とらえず、朝飯食つとけ。」

正「やつやのひ……」

少し重苦しい雰囲気で三人は宿に戻るのであった。

## 第十五章 鬼と人（後書き）

### 後書き

ふう、前との空きがちょっと大きかつた気がするかな？そんな澄田です。

今回はあまり目立ててない気がする正をメインにしてみました。そうでもないかな？

そんでもって、これからまた面白くなつていきますよ。

さて、それはさておきましょうか。今回の後書きは重大発表があります。

それは、この澄田が違う幻想入りを投稿してみたんです！！

そのタイトルは、導かれし者が幻想入り、でーす。

こつちと違つてかなりやりたかった投稿ですので、ペース配分とかまったく考えてません。まあやりたかっただけ投稿ですので。

後、せつかくですから友達の宣伝しておきます。

友達の一人がわしと同じ感じの幻想入りを書いているんです。

タイトルは東方無限録。わしと赴きが違いますけど結構面白いですよ。

おつとじ、わなつと長くなつてしまつましたね。ではいじまでにしておきます。

では、違う方の幻想入りにも期待していただきながら、第16章をお楽しみに。

## 第十六章 それぞれの時間（前書き）

あらすじ

- 1、正が早起きしていた
- 2、正が萃香と喧嘩をした
- 3、正が負けた

ではどう

## 第十六章 それぞれの時間

第十六章 それぞれの時間

少年達食事中・・・

陸達は宿にて朝食を済まし、二階の大部屋でちやぶ台を囲んで話し合ひをしていた。

チルノは完全に回復し、進の隣にいた。

美鈴はずつと考え方をしている正の隣にいた。

陸とうじんげはその間辺りにいた。

陸「さて、全員に重大な発表がある。しつかり聞いてくれ。俺達の旅に・・・うじんげが加わる事になった！！」

進「ええ！？本当に？」

う「まだ決まった訳じゃないけどね。」

美「うじんげ事ですか？」

陸「本人の意思はあるんだが、まだ永琳に許可を貰っていないんだ。だから、今日これから行くつて訳だ。」

進「なるほど。これからようじへーーうじんげ。」

うじんげに手を振る。

「よろしく。」

「手を振る。」

「…」

なぜかだんまりを決め込んでいた。

陸「おいチルノ、お前の病気はうづんげに治してもうったんだぞ。挨拶ぐらいしろよ。」

チ「…へん…あんたなんて、あたいより弱いんだからね…」  
「今強さ関係ないでしょ？ てかうづんげの方が強いと思つんだけど？」

美「あ、わかりました。治してもうった恩があるから、素直になれてないんですね？」

チ「そ、そんなんじゃ…」

うづんげがチルノに、うづんげが立ち上がりて手を差し伸べた。

「これからよしぐれ、チルノ。」

満面の笑顔をチルノに向けて言った。

チ「…」の儘には、必ず返すからね。

少し悔しかつた顔をしてうどんげの手を握った。

陸「よし、じゃあこれから永遠亭」・・・

正「待つてくれやーー。」

立ち上がりかけた陸の言葉と動きを止めるより正が力強く言った。

陸「・・・なんだ?」

立ち上がりかけた体勢で尋ねた。

正「・・・今から言つ」とは、完全にわし個人の頼みや・・・最悪  
聞き流してくれてがまわへん。」

顔を上げて言った。

正「美鈴!-!わしに、気の使い方を教えてくれーー。」

美鈴にいきなり頼み込んだ。

美「え? 気の使い方を?」

正「ああ、やつや。」

進「またなんで急に?」

正「やつを薫香と喧嘩して理解したんや・・・わし、このままやつ  
たらこの先どうにもならんようになるつて・・だから美鈴から、気  
の使い方を学ぼうと思つたんや・・・」

美「そうですか・・・私はかまいませんけど・・・」

陸「なぜ今言うんだ?」

その問いに、正は待つてましたといわんばかりな調子で答えた。

正「そこやーーそこでわしは考えたんや。何も永琳に頼みに行くのに、ぞろぞろと全員で行く必要もないやろ。それやつたら、わしはその間美鈴と修行をした方がええって考えたんや。」

陸「・・・なるほどな。それだったら・・・俺とうどんげはこれから永琳に頼みに行く。で正と美鈴は適当な場所で修行つて事にすればいいな?」

正「そうしてくれるんやつたらありがたいで。」

進「え?ちょっと待つてよ。僕とチルノは?」

陸「進とチルノは・・・」の村の観光でもしどけ。」

進「うん、わかつ・・・」

と言いかける前に、チルノが進の腕を掴んで部屋から引っ張り出した。

チ「じゃあ、あたいたちは先に行つてるよーー。」

進「ちょ、チルノ!? 前もこんな・・・」

チルノに引つ張られ、一人は凄いスピードで宿から出て行った。  
窓からその様子を見る一同。

陸「やれやれ、昨日ずっと寝たきりだったのに・・・相変わらずだ  
な、あいつ。」

う「元氣があるのは、いい事よ。寝たきりだったから多分鬱憤が溜  
まつてたんじやないの?」

正「そりゃのう、まあいつから元氣とつたら、何も残らんからの  
う。」

美「言えますね。」

陸「じゃあ・・・俺達は予定通り、永琳に頼みに行くか。」

う「ええ。」

そつ言つて陸とつづんげの一人も部屋から出でていった。

正「・・・よつしゃ、わしづはこれから手ごじうな場所探しに行くか  
う。」

美「先に言つとくけど、私の修行は厳しいわよ?」

正「へ、望む所やでーー。」

そつ言つて一人もまた宿を後にした。

「」から六人三組の彼らの様子をそれぞれ別に分けて書いていきます。

三組が最終的に合流するまでの流れみたいな物です。

最初が陸とうどんげ。次は正と美鈴。最後が進とチルノです。

ではどうぞ。

陸・うどんげパート

二人は前通りてきた所と同じ竹林の道を並んで歩いていた。

陸「やれやれ、一度もここに足を踏み入れるとはな・・・」

ぼそぼそとつぶやく。

う「でも、私一人じゃ説明し辛いし、それにあなたが何とかするって言つたじゃない。」

あきれた様子で陸に言つた。

陸「ああ、わかつてゐよ。ただ、いつも山道を何度も歩くつてのは、元いた世界じやなくてな・・・」

それとなく疲れた様子を見せる。

う「・・・もしかして、運動とかくつしてないの?」

陸「いや、そこそこ運動は出来るよ。まあ、正ほじじゃないがな。」

その時、遠くの方で何かが爆発する音が聞こえた。

陸「お、結構大きいな。」

足を止め、音のした方を見る。

「う「ことつとかじやないかしら？」

同じよひ見る

陸「どうだううな。幻想郷じや爆発なんて珍しくなぞうだしな。  
まあ行こう。」

そう言つて再び歩き始めた。

「う「・・・そう言えば、正とか進つて、どんな子なの？」

陸「そうだな・・・正は脳筋、進はガキかな。」

「う「随分アバウトね・・・」

陸「はは、これから旅を通して知つていつたらいい。」

「う「そうね。」

陸「その為に、これから永琳に頼みに行ってのくもりわなきやな。  
つと・・・そんな事言つてたら見えてきたな。」

二人の前に竹林に囲まれた永遠亭が見えてきた。  
とりあえず玄関まで行つた。

う「ただいま帰りましたよー。」

横式の玄関を半分ほど開けて大きな声で言つ。  
その声を聞いて、てゐがやや早足で駆けつけてきた。

て「うどんげ……やつと帰つてきたんだね。」

う「ただいま。それはそつと師匠は?」

てゐに身長を合わせてかがむ。

永「ここにいるわよ。」

玄関の廊下をゆつくりと歩いてきた。

う「師匠!…」

立ち上がり、永琳の方を見た。

永「うどんげ……昨日の内に帰つてこなかったのはなぜ?」

うどんげにやや鋭い視線を向けた。

う「それは……」

うつむいて言葉を失つた。

その時、玄関の開きかけた戸を開けて、陸が姿を見せた。

陸「それは、俺が説明します。」

永琳を真っ直ぐに見る。

陸「うどんげは昨日俺の仲間であるチルノの処方をしていた所、遅くなってしまい、やむなしという事で俺達が泊まっている宿で夜を共にしたのです。」

永「夜を・・・まさか、うどんげに何かした訳じゃないわよね・・・？」

陸に敵意を向けた。

う「いいえ、そんな事は一切ありません！――！」

陸の前に立つて言った。

永「そう、ならいいけど。」

ほつと氣を落ち着かせた。

永「なら、貴方はなぜここに来たの？」

陸「実は・・・今日俺がここに来たのは、ある事を頼むためです。」

永「ある事？」

陸「彼女を・・・うどんげを、俺達の旅に同行をさせてもらひつと言つ

事です。」

永「同行?」

陸「すなわち、彼女はここにしまじりへ帰つて来ないといつ事です。」

永「それは、随分急な話ね・・・」

陸「急なのは仕方ないと思つていて。しかし俺達は旅を続ける日々・・・今しか頼めないのです。」

永「・・・うどんば。」

う「はい。」

永「それは、あなた自身の願い?」

う「はい。」

真つ直ぐに永琳の目を見た。

その目に永琳は、

永「・・・あなたが他者に心を許すぞ!」とか、まさかこんな事になるなんてねえ・・・いつかはこんな日が来ると思つていたけど。」

う「師匠・・・」

永「あなた自身で決めた事なら、私から言つことは何もないわ。」

陸「では・・・」

永「陸、つどんげの事、頼んだわよ。」

陸「……はい……もちろんです……。」

永「じゃあ、旅支度ぐらいしていきなさい。」

陸・う「はい……。」

二人はしばらく永遠亭にて支度をしていくのであった。

正・美鈴パート

二人は人里からやや離れた森に囲まれた閑散とした所で、修行をしていた。

美鈴を腕を組んで近くで正の様子を見ていた。

正「ふう……。」

戦闘時の服装で立つたまま両手を合わせ、目をつぶつて意識を集中させていた。

美「いい? 気は誰もが持つ力の一つ。でも、それを形にするのは簡単じゃないのよ。だからこそ、今やっている事、集中する事は基礎であり、一番大事なのよ。」

饒舌に語る。

正「わかつとる・・・」

集中を切らさず返事をする。

美「（わい、）」からどれほど時間がかかるか・・・正の素質次第だけど・・・」

そう考えて見てみると、正の周りからオレンジ色の光の帯がにじむように出てきた。

美「（あら、思つてたより早いわね。）」

正の様子を見直した。

正「・・・」んな感じかのう。」

光の帯がどんどん大きくなり、正より一回りくらいの大きさになつた。

美「（・・・人間にしてはかなりの大きさね・・・）」

だが帯の形が大きくなつてこいつになぜかゆがんできた。

美「（まことに）」のままだと・・・」

危険を感じ取った美鈴は、正を止めよつとした。

美「正……それ以上は……」

だがその声が届く前に正の気が周りに散り、文字通り大爆発を起した。

美「くつ……！」

美鈴は爆風に巻き込まれ、少し吹っ飛んだ。

美「……手遅れだつたみたいね……」

受身を取つて立ち上がり、正の方を見るが、爆風の煙に巻かれ見えなくなつていた。

美「正……どうなつたの……？」正「……」

煙の中、正の名を呼んだ。

その時、正らしき声が返つてきた。

正「わしゃつたら……！」やで……」

美「正……無事なの？」

美鈴は声のする方に歩いていった。

正「あんまし無事ちやうかな……」

煙が晴れてた正が姿を現した。

正の上半身の服は吹き飛び、肌は黒いすすだらけになつていた。

美「……それぐらいなら大丈夫ね。」

正の様子を見て言った。

正「ええ！？結構やばかったんやけど……」

美鈴の方を見た。

美「あなたは才能と力量なら大した物よ。一日で形として出せたのは凄い」とよ。」

正「やうなんか？それにしけやえらい無様なんやけど……」

自分の体を見る。

美「そんなもので済んだないも'つけものよ。まあ、どうどうやつていくわよ。」

正「ほんまに厳しいんやの？……」

美「だつたら、じこじこやめとおくれ？」

正「そんな訳ないやるーーー！」

美「じゃあ、わつきの要領で続けなさい。今度はちゃんと私がストップかけるかぎ。」

正「頼むでほんま……」

そう言って再び姿勢を正し、さつきの構えを取り直した。

美「（・・・しかし、いぐら素質があつても、わずか一寸であそこまで色濃く出るなんて・・・萃香が言つてた通り、正は化けるかもしれないわね・・・）」

そつ考へてみると、正の体から再び光の帯が出てきた。

正「よひしゃ、ロシはまつ・・・」

と思つた矢先に、光の帯はぱっと周りに散つて消えてしまった。

正「あれ? なんですか?」

周囲をあくまどく見た。

美「そんなすぐこつまくこくはすないでしょひ。ほり、もう一度。」

美鈴の声を聞いて正はまた構えを取り直した。

美「（・・・まだまだ荒削りね・・・）」

ため息混じりに考へ、雲がまだらにかかつた青空を仰いだ。

美「（まあ、これから先は長い付き合になるでしょひから、今はこんな物でいいわね・・・）」

そんな事を考へていた時、正が地面にへたり込んだ。

正「あかーん!...全然や・・・わし、ほんまに才能あるんか?」

血鈍の手をじっと見る。

美「・・・そうね、一旦休憩しましょ。」ついで出せる飯の量には限界があるし。」

正に歩み寄りながら言った。

正「それ・・・先に言えやあ・・・何か体が変にだるいと思ったのはそれかい・・・」

そのまま大の字で後ろに倒れた。  
美鈴はすっと正の左隣に座り込んだ。  
そして美鈴が正に話しかけてきた。

美「・・・まだ正はましな方よ・・・私の時なんてもつとひどかつた。形どいろか出す」とすら出来なかつたもの。」

正「へえ、そうなんか?」

美「ええ。」

正「ふうん・・・まあ美鈴つて、なんか努力家つてイメージあるのう。」

美鈴を見る。

美「イメージじゃなくて、事実努力はしてきたわよ。」

正「そうやうの?」

そして、空を仰いだ。

正はふと、思い出した事を声に出した。

正「……今でも現実味なこの「……」

美「何が？」

正「いや、わしらが幻想郷に来たつて事。だつて考えてみい？わし、この前まで普通に高校通つてた……言つなら单なる人間やで。そが、急にこんな世界来て……こんな事になつて……もしかしたら、今までの事全部が夢で、わしは今元の世界で寝てるだけやないかなつて……つい考えてまつんや……」

上半身を起して語る正の頬を、美鈴はぎゅっと引っ張つた。

正「あだだだ！？いきなり何すんや！？」

その手をどけて、赤くなつた頬に手を当てる。

美「その痛みは、夢？」

正を真つ直ぐに見た。

美「夢だつたら、そんな痛みはないわ。あなたは今、まぎれもなく幻想郷にいるのよ。現実から、田を背けぢや駄田よ。」

正「……やつやのつ……」

そう言つて、座つたままつづむこた。

美「・・・もしかして、正は元の世界に帰りたいの？」

正「・・・わしは靈夢に言われてもう元の世界には戻れんから・・・選択肢なんてないんや・・・この世界の掟って事で割り切つてたけど・・・」

美「そうだったの？」

正「ああ・・・進はこの事言われた時、いきなり走り出したんや。あいつ、多分やけど色んなことが頭によぎったんちゃうかな・・・それで、パニクつたんやと思つたんや。」

美「それで・・・その後どうなったの？」

正「チルノが追いかけて、二人して川で遊んでたわ・・・その時はこいつほんま能天氣やのうとか思つてのう。でも今考えたらあいつって・・・強かつたんかもしねへん。もしくは・・・心の切り替えが早かつたんかのう・・・ただ忘れただけかもしねんけど。」

そう言つてしばらく、二人の間に沈黙が訪れた。  
その沈黙の中、美鈴が先に口を開いた。

美「・・・正自身はどうなの？」

正「わしは・・・そうやの・・・まあ進みたいなガキやないし、そんな考えたりとかは・・・」

軽快に話す顔に、一つの滴がすっと伝つた。

正「あれ・・・? 何でやろ・・・」

その滴は、まぎれもなく正の涙であった。

正「おかしいの……わし、別にそんな事……ない……のに……」

目をぬぐうが、涙が止まるとは無かつた。

正「なんでや……なん……」

その時、美鈴が包み込むように正の体に両手を回した。

美「今はいいのよ……子供のように泣いても……」

正はそのまま美鈴の胸で泣き崩れたのであった。

### 進・チルノパート

進はチルノに引っ張られながら村を見て回っていた。  
しばらくして、二人は村の団子屋の長椅子に座つて、一休みしていった。

チ「あ～、こりやつて動き回るのって、やつぱりいいね！～」

両手を大きく広げた。

進「・・・病み上がりなのに随分元気だね。」

その様子を見て尋ねた。

チ「へん！－」のあたいが病氣」ときでまいるわけないでしょ－－－」

進「でも、うどんばが来なかつたら、チルノ結構やばかつたと思つよ。」

チ「あんな奴来なくても、自力で治つてたわよ－－－」

進「まーだ素直になれないんだね。」

不適な微笑をチルノに向けた。

チ「け！－何よ、みんな揃つてうどんばうどんばつて・・・あたいは別にあいつに頼んだわけじゃないのよ！－！なのこ・・・」

むきになつて反論した。

進「まあまあ、一応借りつて事にしてるんでしょ？いつか返せばそれでいいんじやない？」

なだめるように答えた。

チ「それもそうね・・・」の借り、絶対に返してやるんだからね－－－

空を見て右拳を上げた。

その時、村中に響く爆発音がした。

進「ん？何だろ・・・今の・・・」

音のする方に立ち上がって見た。

チ「これは・・・もしや・・・」

同じように見た。

チ「ダイダラボッチが出てきたのね！！」

進「ええ！？またそのネ・・・」

チルノの方に振り向いて言いかけるが、チルノに腕を掴まれ、言葉を止めた。

チ「これは急ぐが吉ね！..行くよ！..！」

進を引っ張り、音のした方に走つていった。

少年達移動中・・・

音のした方にひたすら走つていたチルノと引っ張られていた進は、森の中で立ち往生していた。

チ「おかしいな・・・ダイダラボッチだったら、隠れられるわけないのに・・・」

深く考え込んだ。

進「それ以前に、ダイダラボッちだったら遠くからでもわかるでしょ？」

チ「あ、確かにやうだ。つてことはあいつ・・・何かしたわね！？」

進「いや、もひと書つなら、ダイダラボッちなんていないんじゃ？」

チ「そんな訳ないでしょ！－－あたしは一度この田で見たことがあるんだから！－－」

自分の田に目を向けてた。

進「（どうせ何かと見間違えたんだろうな・・・）」

やや呆れた顔でチルノを見た。

チ「何よ！－－何か言いたいことでもあるの！－－」

進「別に。それよりさ、もう帰らうよ。」

チ「やだね！－－ダイダラボッちを見つけるまで、あたしは帰らないよ！－－」

そう言つてから奥の方に行つた。

進「困つたなあ・・・僕、帰れるのかな？」

チルノの後を追いかけようと歩き出した。

その時、足元に何かが飛んできた。

進「わっ！！」

後ろに倒れて尻餅をついた。

進「いたた……一体何が……？」  
そのまま飛んできたところを見ると、地面に弾幕の撃たれた跡があった。

進「え？ これって……？」

立ち上がりながら周りを見渡した。

?・1「今ので普通にける？」

?・2「いきなりじゃ、しょうがないんじゃないじゃない？」

?・3「どうにしても、この子はどうちかな？」

進は声のした方に振り向いた。

そこにいたのは、やや高い所に飛んでいる三人の妖精だった。

進「あ、君達って……もしかして妖精三姉妹？」

?・1「そうよ、私がルナ・チャイルド。」

一番先頭にいる妖精が言った。

? 2 「私はサー・ミルク。」

その後ろにいた妖精が続けるよつこ言ひ。

? 3 「スター・サファイアよ。一応聞くけどあなたは?」

一番後ろにいた妖精が進に指を指して尋ねた。

進「僕?僕の名前は鳥間 進つて言つんだ。よろしく。」

ル「あなた・・・人間よね・・・?」

進「そうだよ。」

そつ言つと、三姉妹の雰囲気が一気に変わり、殺伐とした空気になつた。

サ「やつぱつ・・・」

進「え?どうしたの?何か雰囲気変わつてない?」

阿呆なので空気が読めていない。

ス「よくも堂々とこの森に入ってきたわね・・・」

進をにらんだ。

進「あれ?この流れつてもしかして・・・」

嫌な汗がにじみ出てきた。

ル「人間なんて・・・消えちやえーー！」

そう言って、三人が一斉に進に弾幕を放つた。

進「わわわわわーーーー？」

弾幕を何とか避けた。

進「ちよ、何でーー？何でいきなりこんな事を・・・？」

サ「何で？あんた達が私達にした時も・・・いきなりだつたじゃないーー！」

声を荒げた。

進「だから、何の事だよーー？僕が君達に何かしたとでも言ひのーー？  
こんなの一方向過ぎるよーー！」

その声を黙らせるように顔の近くに弾幕が飛んできた。

ス「つるさーーーーあんた達が言い訳する権利なんてないのよーー！」

攻撃を放ち、進を黙らせる。

あまりの弾幕に、進はその場から逃れようと走った。  
森の木に隠れて、三姉妹から一時的に逃れた。

進「一体何があつたんだろう・・・どう考へても普通じゃないよ・・・  
・彼女達をあんな風に変えたのは誰・・・？どうしてしても、このままじや僕・・・」

その場に座り込み、ただうつむく。

進「チルノ……陸……正……誰か助けて……」

その時、進に誰かが語りかけてきた。

？「進……進。」

その声を聞いて進は顔を上げると、目の前に誰かがいた。容姿は鎧姿で、右手に槍を立てて持っていた。

進「誰……？」

？「ああ、挨拶がまだでしたね。」

そう言って進の前に跪き、槍を前に横にして置いた。

？「私の名は、道助と申します。」

進「道……助……？」

突然の事に今だ平常心を保つていらない様子だ。

道「私は……ずっとあなたのそばにおりました。あなたが生まれた時からずっと。」

進「どうこう」と？

道「私はかつてのあなたの……先祖である人の家来でした。しか

し私は戦場にて志半ばで命を落としたのです。その時から、私の魂は常にその人の子孫と共にありました。」

進「えーっと……それってつまり……守護霊って事?」

道「そう思えてもらえるのであれば光栄です。」

進「ちよつといじめん……」

跪いた道助の兜に手を当てた。

鉄独特の感触と冷たさが進の手に伝わってきた。

進「え? 君つて……幽霊じやないの?」

触れた事に少し驚き、手を引っ込める。

道「はい。しかし今の私には……生きていた頃の体がなぜかあるのです。」

顔だけ上げて進を見た。

進「なんでだろ?」

その時、右ポケットに何かが入っている事に気がついた。進は右ポケットに手を入れてそれを取り出した。

それは、進がこの世界に来るときに持っていたカードだ。

進「これって……あの時の……」

そのカードから、うつすらと何かが出ていた。

進「あれ・・・始めてみた時は、こんな感じじゃなかつた気がする  
のこ・・・」

ぼーっとそれを見ていると、上から怒声が聞こえてきた。

ル「やつと見つけたあ・・・もう逃がさないよーー！」

進の方に真っ直ぐ飛んできた。

進「うわあー？」

突然の事に身をかがめた。

ルナが進に物理的に攻撃しようとしたその時、道助が槍を構えてその攻撃を防いだ。

ル「！？」

攻撃を防がれたので、後ろに退いて距離をとつた。

ル「あんた・・・誰？」

道助をにらんだ。

道「我が名は道助！！」

声高らかに名乗つた。

ル「で・・・何で邪魔したの？」

道「知れた事、いかなる理由があるうとも・・・この者を傷つけさせはしません！」

そう言つていると、ルナの後ろからサードとスターも来た。

サ「ルナ！！ここにいたの・・・って誰あれ？」

道助を見て尋ねた。

ル「よくわからないけど、あの人間の味方みたい。」

進を指差した。

ス「だつたら・・・一緒にやつつけちゃおうよ。」

ル「そうだね・・・どんな奴か知らないけど、私達三人相手じゃ・・・」

三人が弾幕を撃つ構えを見せた。

サ「勝てっこないわよ！！」

一斉に弾幕を進たち目掛けて放った。

道助は無数の弾幕を前に槍を凄まじいスピードで振り回し、ひとごとく打ち落とした。

ル・サ・ス・・・・え？」

言葉を失い、呆然とした。

道「……どうしました？」この程度だったら……」

槍を後ろに振つて力強く構えた回し始めた。

道「私が戦で見てきた」や鉄砲と大差はありませんね……」

槍の回転がどんどん早くなつていく。

道「行きますよ……私の奥義が一つ……とくと味わいなさい……」

回転させていた槍を前方に大きく振りかぶつた。

道「轟旋風！」

振りかぶつた所から、三人を呑み込むほどの大さの竜巻のような衝撃波が出てきた。

ル・サ・ス「ちょま……えええええ！？」

衝撃波を避けることも出来ず、そのまま巻き込まれ遠くに飛んでいった。

衝撃波は木々をなぎ倒し、およそ10メートルほどで消え去つた。通つた跡は、地面が大きくなぐれていた。

進「……」

ぽかーんとその様子に見とれていた。

道「ふう……」無事でしたか、進。」

槍を再び縦に構え、後ろに振り返った。

進「・・・すつ」——！」

道助に駆け寄る。

進「ねえ、今のどうやったの？もつ一回やつてよ。——。」

道助の目前に来て見下ろし、好奇心の強い目で見た。

道「ちよっと、私の技は見せ物ではないですよ？敵もいないのに使う訳……。」

そう言つてみると、突如煙のようになってしまった。

進「あれ？どこいったの、道助？」

周りを見渡すが、どこにもいない。

道「——ですよ、進。」

進の後ろから話しかけた。

進「え？」

後ろに振り向くと、文字通り幽霊のように半透明になつた道助がいた。

進「ええ！？どうしたの一体？」

道「わかりません……ただ、以前の姿に戻ってしまった様です。」

困った様子を見せる。

進「本当?」

道助に触りつとあるが、手は空を切った。

進「本当だ……どうしてだろ?」

道「これは推測ですが……私が形を得れるのには、限界があるのではと……」

進「そうなのかな……」

道「どうせよ、私はこれまでどうつあなたのそばにありますから。」

進「そうだね、これからよろしく。」

握手をしようとしたが、当然それは空を切る。

進「あはは、今は無理だったね。」

道「私も、反射的に手を出してしまいました。」

お互いの行動に笑つていると、チルノが木の影から姿を現した。

チ「進……どうしてたのよ……」つちはずつとダイダラボッチ探して……」

進の後ろにいる道則に、目を奪われた。

進「まだダイダラボッヂ探してたの？」んな所にいるわけないって。  
・  
・  
・

そう言つていると、チルノが急接近してきた。

チ「ねえ！後ろにいる奴誰！？誰なの！？言ことなさこよーーー！」

進にやたらつかかった。

進「あ、チルノにも見えるんだ。」

後ろに振り返り、道助を見た。

道「今の私は、誰にでも見える様ですね。」

覚つた様子で言つた。

チ「ねえ！誰よあんた！？早く答へなさいよーーー！」

今度は道助につつかかった。

道「私の名前は、道助と申します。」

チルノにぺこりと頭を下げた。

チ「で、何で半透明なのよーーー？」

道「私、これでも幽霊なので。」

顔を上げて答えた。

チ「本当なの・・・」

道助に触りつつしたが、その手はやはり空を切つた。

チ「・・」

空を切つた手をじつと見つめる。

進一  
道助は、僕の守護霊なんだ。

チルノに歩み寄つて言った。

色々考えた様子を見せたが、面倒になつたのかそこから離れるよう  
に歩き出した。

進「そうだね。そろそろ陸と正も帰つてゐるかもしないし。」

チルノの後をついて行つた。

道助も進の背後にひつそりとついて行つた。

進「（あ、そう思えば・・・さつきの三姉妹。なんていきなり僕を襲つたのかな？訳ありぽかつたけど・・・」

歩きながら考える進であつた。

その頃、山の頂からおおおよそ進達のいる所を見ている者がいた。紅魔館にいたのと、恐らくは同じ者だ。

?1 「……見た感じ……当たりかな？」

?2 「でーも、あれじゃまだまだだね。」

?3 「田観めてから間もないのであれば無理もない。」

?1 「もつ少し様子見するかな……つてせつだ。歓迎会の準備は？」

?2 「こつでもOK……つてのは嘘。後ちょっとだね。」

?3 「この様子なり、急ぐ必要もない。」

?1 「ふふ……今はこの世界の思い出を作らせた方がいい……時期にそれも叶わなくなるんだかい。」

そう言つと、その者はまた消えるよつてその場を去つていったのであつた。

## 第十六章 それぞれの時間（後書き）

### 後書き

長かつたあ・・・正直しんどかったです。もつこんな感じで話を書く事は多分ありませんね。

今回はちよつとお得感がありませんかね？そつでもないですか？

ちよつとマイナーな妖精三姉妹を出してみました。知らない人はW  
IKEで。

そしてまたもや新キャラを出しました。その名は道助。一応女性キャラです。

これから進は、ちよつと面白い事になつていきますよ~。

とりあえず今は人里編ではなく修行編的な？感じです。まあこの際  
どっちでもいいですね。

後、違う方も更新してますので、暇があればどうぞ。

では、第17章をお楽しみに。

## 第十七章 進の決意（前書き）

あらすじ

- 1、正が決意し、涙した。
- 2、陸が交渉し、うどんげが仲間に加わった。
- 3、進のピンチに、道助が現れて事なきをえた。

ではどうぞ

## 第十七章 進の決意

### 第十七章 進の決意

しばらくして、陸とひづるげは永遠亭にて準備を済まし、人里に帰つてきていった。

同じ頃に正と美鈴も、修行を一通り終わらして人里に帰つてきていった。

そのため、陸達と正達は宿の前で鉢合わせをした。

陸「おお、正。それに美鈴も。」

二人に手を振つた。

正「陸……交渉はどうなったんや? つてひづるげがこいつにおもひてことば……」

陸を見てから、うじんげに視線と移した。  
その様子から、正は交渉の結果を察した。

う「今度こそ、これからよろしく。」

正に手を差し伸べた。

正「おう、よろしくのう。」

同じく手を差し伸べて、うじんげに握手をした。

握手をした後で、陸が正の服装が気になつたようだ。

陸「それにしても……その服、何があつたんだ？」

正の服は上半身が丸々無かつたので、疑問に思つたのだろう。その事に関して、美鈴が一応説明をした。

美「実は修行中、気のコントロールを誤つて」こうなつたんです。私が止めようとしたのですが、一歩間に合わざ」のような姿に……」

どこか申し訳なさそうな調子で答えた。

そんな様子に、正自身は、

正「何言つてるんや……」<sup>ハ</sup>れはわしの名譽の証や……」

と胸を張つて答えた。

陸「名譽つて……どう見ても違つだろ?」

呆れ様子で言つた。

う「自身の失態の表れね。」

陸と同じ調子で言つた。

正「やかましいわ! 人の苦労も知らんだからに……」

二人の発言に、軽くふてくされた。

そんな事などお構いなしに、美鈴がこんな事を尋ねてきた。

美「そう言えば……進とチルノはどでしょ?」

陸「村にはいなかつたな。」

正「じつかでぶらぶらしてるだけやないんか?」

う「あ・・・あれって、もしかして・・・」

正の後ろの方に、やや離れてはいるが、こっちに向かって歩いてくる一人がいた。

陸「おお、多分あれだな。おーい、進。」

と呼びかけると、それが聞こえたのか急いでこっちに来た。こっちに向かってくる一人を見ている内に、正が進の後ろにいる何かを感じ取った。そう、道助の事である。

正「あれ? 何か進の肩に妙なもんが見えるよ? うな・・・」

美「え? 何が・・・」

と正に尋ねようとしたが、それが見えたのか口を閉じた。

進「いやあ、みんな帰ってたんだね。」

少し息を切らしながら言った。

う「あの・・・進・・・・

進の背後にいる道助を、震えながら指差した。

陸「だ・・・誰だお前はあああああー!?」

道助を見てから、村中に響き渡る程の大きな声を出した。

少年説明中・・・

正「へえ、進に守護靈なんておつたんか。初めて知つたで。」

道助を見上げた。

進「僕も、さつき知つたばかりだよ。」

陸「俺としたことが・・・つい取り乱してしまつたな。」

そう語る顔は、少し赤くなつていた。

美「私達の、新しい仲間ですね。」

チ「あたいの新しい家来ねー!ー!」

道「私は、進にしか仕えませんよ。」

チ「何!ー?あたいの何が不満だつて言つよー!ー?」

道「何!ー?あたいの何が不満だつて言つよー!ー?」

怒るチルノに、正が、

正「ああさて言われへんや。」

と冷静に突っ込んだ。

チ「きい——————！」

やたらと悔しがった。

陸「まあ、とりあえず歓迎するよ。道助。」

道助に握手を求めようと手を伸ばした。  
道助も手を伸ばしたが、陸はその手を握ることがやはりできなかつた。

陸「おつと、確かに今は無理だったんだっけな。」

そのまま手を引っ込めた。

道「私も、つい反射的に手が出てしましました。」

申し訳なさそうに言つた後で、一同が軽く笑つた。

正「にしても・・・」

道助に意味深な笑顔で迫ってきた。

道「何でしょうか？」

正「いや、お前をこやのつて、進のことや。」

視線を進に移した。

進「え？ 何の事？」

不意の事に、少し戸惑つた。

正「まさか、あの進まで戦う奴になるとはのう。」

進「へ？」

道「どういつ事です？ 私がいる以上、進が戦う必要などありませんよ。」

陸「それはどうかな・・・」

道「何か問題でもあると？」

陸「確かに道助はそのままで戦えてる。だがそれも限界あります奴だ。なら、進が何かしらの形でサポートなり何なりできるようになつた方が、今後とも都合がいいと思うが。」

進「それもそうだね。」

正「ただのう・・・肝心のそういう事に詳しい奴って、幻想郷にあるんか？」

陸「いるじゃないか・・・四六時中幽靈連れてる奴が。」

正「いや、あれは進とま勝手がやけいわね。」

陸「だよな。言つて思つた。」

進「……他に誰かいるのかな……」

ぼーっと全員がそれとなべ考へてゐる、いぢさん家の肩に誰かが手を乗せてきた。

「？」

すつと振つ向くと、今のはあのくがいた。

K「お、またかわいいやがんがいるかなと思つたら……君は永琳のところ……」

「うひどいばです。Kさんですよね？その節では御世話になつました。」

Kに軽く会釈をした。

K「なーー、あの事についてはもうこー。」

少し申し訳なさうな態度を取つた。

そんなやつ取りをしてくると、陸がKの事に気付いたようだ。

陸「ああ、あなたは先田あつたぐれですな。今田まじつたのですか？」

その問い合わせに答へ、Kは適当に返した。

K「別に用なんてねえよ。俺はただかわいこちゃんを探して歩き回つてただけだ。」

美「この人……筋金入りですね……」

う「昔はこんな人じやなかつたんだけどね……」

と言つて、この内に、Kが進の後ろにいる道助に目を向けた。

K「あり？ 坊主……お前さんの肩の奴、えらべへりきり見える様になつたが……」

進「うん、わしき、出てきて僕を助けてくれたんだ。」

その一言に、Kは色々と納得したようである。

K「ふーん……なるほど、さすがは幻想郷つて奴か。」

その様子に、正が、

正「ちよい待てや、その口ぶりやつたら、あんた、前から見えてたみたいな言い方やないか。」

Kに問い合わせた。

それに対しても、

K「ああ、これでも、元々の本業がこれなんだ。」

と言つて、どこのからともなく取り出した御札的な物を見せつけてきた。

正「……妖怪退治屋？」

K「正確に言つと、陰陽師つて奴だ。」

美「陰陽師？あの陰陽師ですか？まさかあなたが陰陽師だったとは…」

思わず驚いた。

K「安心しろ、よほどの事がない限り妖怪には手を出さないし、それに俺はもう一線を退いてるんだ。」

陸「それでもあなたは、」の手の類について扱い方を知つていると？

K「専門だから、もちろん知つてらあ。」

当然のようになつてきた。

進「じゃあ……それを僕に教えてよーー。」

Kに駆け寄つて言つた。

K「は？何でだ？別に書はないんだろ？」

露骨に嫌がつた。

進「そうじやないよ！！ただ・・・僕だけ、みんなの為に役に立ちたいって思つたんだ！！道助の力だけじゃなくて、僕自身も力を身に付けたいんだ！！」

と真っ直ぐにKの目を見て言つた。

K「（やれやれ、）の子もまたつて奴か・・・仕方ない。」

しぶしぶとこつた感じで、進に言つた。

K「・・・わかつたわかつた。本来は野郎の面倒なんて見ないんだが、今は特別だ。」

進「じゃあ、僕に教えてくれるんだね。ありがとウーーおじさん。」

Kに頭をぱつと上げた。

K「それじゃ、後で俺の店に来てくれ。じゃあよ。」

そのまま踵を返し、その場を歩き去つていった。

去つていった後で、正がこんな事を言つた。

正「・・・意外やのう・・・まさかあんなおつさんが陰陽師なんてのう・・・」

陸「UJIは幻想郷だしな、ありえておかしくはない。それよりも、進にとつては願つたり叶つたりだな。」

進の方を見て言つた。

進「うん……」

陸「よし、これから今後の予定を話しえどとするか。」

セツ「言ひて、一回は宿の方に遊びにいってこつた。」

一回は今朝と同じ感じで、ちやぶ台を囲ひて話しえどをしていた。

陸「さて、進はこの後くさん所に行くとして、その間俺達はどうするかだな……」

「「とりあえず、みんなでどこかに行つてみるとか?」」

美「それもいいですけど、一体どこへ?」

正「わし……田中楼に行つてみたいんや。」

陸「どうしてだ?」

正「陸、わしら今、幻想郷にあるんやで? 一度この田中あの西行妖を見てみたいって思わへんか?」

陸「なるほどな、確かに俺も一度は見てみたいと思つていたな。」

美「では、とりあえず目的地は決まりましたね。」

う「それじゃ、これから白玉棲に向かうとしましょう。」

と言つてゐると、さつきまで何も言つていなかつた進が、チルノにいきなり話しかけてきた。

進「あ、チルノ。ちょっと聞きたい事があるんだけど・・・

チ「何よ?」

進「この後、僕はＫおじさんに色々教えてもらひて言つたよね?でも、Ｋおじさんと一人つきりつてのはちょっと嫌だな~って思つてさ。だから、チルノだけでもいてほしいかなって・・・」

陸「ほほう、まあわからん事もないな。正直Ｋさんと一人つきりは気がめいるかもしね。」

正「それやつたら、別にええんとひづか?チルノもそれでええやろ。」

チ「ひよつと……少しあたいたいにもせりげて……。」

う「で、どうするの?」

チ「あたいは……えーっと……まあ別にいいけど……。」

進「じゃあ、一緒にいてくれるんだね!~!ありがとう、チルノ!~!」

屈託のない笑顔をチルノに向けた。

チ「・・・しゃあなしよ。」

進の笑顔に、少し気圧された。

陸「よし、じゃあ、俺達はこれから白玉楼に行くとするか。」

う「ええ。」

正「楽しみやのう。」

美「まあ、素直に見れたらいいんですけどね・・・」

全員がその場を立ち上がり、部屋を後にした。  
表に出てから、陸達は4人と2人に別れた。

陸「進、チルノ、また後でな。」

正「ちやんとやるんやで。」

美「修行は自分のやる気が一番大事ですよ。」

う「じゃ、行つてくるわね。」

進とチルノに手を振りながら、四人は歩き去つていった。

進「わかつてるよ。」

チ「あたいがいから、万が一があつても知らないよーー。」

四人を見送る二人。

進「じゃ、僕らはKさんの所に行こうか。」

チ「うん。」

二人はKのいるあの店に歩いていった。

しばらくして、一人はKのいる店にへり立つて、店の表にKが立つて待っていた。

進「Kおじさん。」

Kを見つけ、駆け寄る。

K「お、やっと来たか坊主。」

声を聞いて進の方に振り向いた。

進「これから、よろしくお願ひします。」

ペコリと頭を下げた。

K「そうかしきまらないともいいだろ。教えるつつてもあくまでお前さん次第だしな。」

そう言われ、進は頭を上げた。

進「じゃあ、これからすぐにでも・・・」

K「おっと、ここで教えるのもなんだ、もう少し広い所に行こうか。」

「

進「はい。」

そして三人は、その場から歩きだしていったのであった。

## 第十七章 進の決意（後書き）

### 後書き

前の話が長かつたから、今回な「れで勘弁してくださーいね。

いやあ、他の奴を一斉に更新しようつて事で、これでも忙しかったんですよ。文化祭近いし。

それはともかくとして、修行編もいよいよ終盤に入る所ですね。

これから進はどれほど成長を見せるか、是非とも「こ期待くださいな。

何気にくつてただの助兵衛じゃなくて、陰陽師だったのね。つて思つてる人も多いと思います。そうです。陰陽師なんですよ。

Kの詳しい事はまだ描かれていませんが、この話が終わつてから紹介しようかなって考えてます。

あ、これを読んでくれている皆様に連絡です。

この話は不定期ですけど、これからは一応土曜日に定期的に更新しよつと思つています。

ので、それを承諾してくれる感じでよろしくお願ひしますね。

それでは、第18章をお楽しみに。

## 第1-8章 進の憑依術（前書き）

あらすじ

- 1、進がみんなに道助を紹介した
- 2、Kが陰陽師であつた事を知り、進が頼み込んだ
- 3、OKをもらい、進とチルノ以外は白玉楼に向かつた

ではどぞ

### 第18章 進の憑依術

中年達移動中・・・

しばらく歩いていると、三人は木に囲まれた広い場所に出た。その場にて、Kがすぐさま話を始めた。

K「よし、これからお前さんに式神とかの使い方つてのを教えよう。まず、式神の使い方つてのは主に二つに分けられる。一つ目がそれ自身が形となつて敵に向かうタイプだ。このタイプの方が一般的だ。で、二つ目はそれ自身が術者に憑依させるタイプだ。こっちはあまりメジャーじゃないが、式神によつてはこちらの方が都合がいい事もある。俺が見た所道助は二つ目の方が都合がいい。維持できる時間をお前さん自身が与えられるからだ。式神は術者さえいればずっといると思われていてはそれは違う。式神はあくまで動かせる時間が決まつていてるんだ。だからこそ、道助のようなタイプは二つ目のタイプの方が適している。確かに道助の戦闘力は高いかもしけんが、幻想郷には強い奴なんて「まん」といる。長期戦になつたりしたら、明らかに不利だ。今のお前さんじやまだ複数の式神を行使するなんて事出来る訳ない・・・」

長々と話をしていると、座つて話を聞いていた進とチルノがぐつすりと寝ていた。

Kは拳を固めてはつと息を吐きかけた後で、下を向いている進の頭を上から思いつきり殴つた。

「ノン」と呟つ頬とももに、進は文字通り呪起じられた。

進「いつたあ……」

殴られた所を手で抑えた後に、顔を上げて、Kの方を見た。

K「おはよう、進君……」

かなり怒った雰囲気の笑顔を進に向けた。

進「は、はい！？え、えーっと……何だっけ？」

中年制裁中……

K「つまり、進は道助を憑依させ、戦つ術を身に着けるべきなんだ。  
わかったか？」

さつきとは違い、もう怒ってはいなかつた。

進「はい……」

正座をしている進の頭には、たんこぶが3つほどできていた。隣にいるチルノは相変わらず寝ている。

K「それじゃ、さっそくやつてみるか。」

進「ええ？ いきなり？」

K「何だ？ 問題でもあるのか？」

進「その……今道助が出てこれるか、僕にはわからないんだけど……」

K「ああ、そんな事なら大丈夫だ。お前さんがさつき道助を行使して言つても大分時間が経つてる。もつ使用てもおかしくない頃だ。」

進「へえ～、そういう物なんだね。じゃあやつてみるよ……つてちょっと待つてよ、まったくやり方がわからないんだけど？」

K「はあ？ 坊主、お前がさつきじつじつと出したのか、覚えてないのか？」

進「うん……なんか勝手に出てたつて言つた……」

K「（……無意識で出してたつて奴か？ だとしたら）こいつあ……」

と感心していると、進が困った様子で尋ねてきた。

進「ねえ、コツとかないの？」

K「コツ～ああ、コツか……イメージだ。」

進「イメージ？」

Ｋ「そりゃ、今自分の前に今道助がいるな……って感じだ。」

進「曖昧すぎる氣がするんだけど……」

Ｋ「なーに、式神を使つてのはそりこいつなんだ。まあ気合と根性とやる氣があれば大丈夫だ。」

進「……はーい……」

適当すぎる説明に、進はしづしづと始めた。

進「（えーっと……ひつかな……？）」

頭の中で道助をイメージし続けた。

その時、道助が進の前にすーっと現れた。

進「わあ、本当に出てきた。」

道「……また形を得られたようですね、私は。」

自身の体を見てから、進に語りかけた。

Ｋ「よし、つまづいたな。それじゃ、憑依術をやってみる、進。」

進「あの……」

Ｋ「イメージだ。」

進「だよね……まあやつてみよつか、道助。」

道「はい。」

二人でそれとなく始めた。

K「さて、後はここからどれくらいかかるか・・・」

少し距離を取つて、後ろの木に寄りかかり、進たちの様子を見届けた。

?「もう少し、ちゃんと教えてやつてもいいだろ?」

後ろから突如、誰かがKに話しかけてきた。

K「悪いが、俺は放任主義なんだよ・・・って誰だ?」

後ろに振り向くと、そこにあの妹紅が腕を組んで立つていた。

K「ああ、誰かと思ったら、相変わらず発育の悪い子か。」

妹「・・・誰が発育が悪いって?」

Kの発言に、妹紅はガンを飛ばした。

ちょっとびびったKは、

K「おいおい、冗談だつて。」

一応謝る態度を見せた。

妹「たく・・・」

呆れながらも歩み寄つてKの隣に立つ、同じように進たちの様子を見届けた。

K「てか、何でこんなとこにお前さんかいんだ?」

妹「近くを歩いてたら、たまたま見かけただけだ。」

K「へえ、やうか。こつからいたんだ?」

妹「お前が、あの子にやつてみろって言つた時だ。」

K「ああ、じゃあつこわつきか。」

妹「……なあ、もしかしてだけ? お前はあいつ……お前と同じ道を歩ます気なのか?」

K「そんな気はねえよ。俺はあいつに頼まれただけつて奴だ。」

妹「そうか。」

K「……俺みたいな奴は、俺一人で十分だ……」

哀愁の田で、じとじと遠くを見つめた。

妹「K……」

憐れみをKに向けた。

その時、進と道助の二人から光が広がつていった。

K「お、これはもじしゃ……」

と言つている間に、辺りが光に包まれていった。

その光が晴れると、そこには右肩に道助の肩当てと槍を右手に携えた進が立っていた。

進「・・・これでいいのかな？」

手に持つた槍を見た後に、自分の体を見た。

体からは、氣とも何ともいえないオーラ的な物があふれ出していた。

K「どうどうやったか。」

進に歩み寄った。

進「ねえ、これでいいの？Kおじさん。」

少し不安げにKを見た。

K「ああ、多分それでいい。それが一番坊主と道助にとつて理想的な形だね。」

進「そ、うなんだ。あ、そ、う、言、え、ば、この、状、態、だ、つ、た、ら、道、助、は、ど、う、な、つ、て、る、の、？」

K「ああ、その、こと、か、・、・、試、し、に、名、前、を、呼、ん、で、み、な、」

進「うん。道助、どうなつて、るの？」

その辺りに声をかけた。

道「（私なら……貴方の右腕にいますよ。）」

進の頭の中に道助の声が響いた。

進「え？ 右腕つて……」

自分の右腕を見るが、これといってわからない。

K「多分、お前さんの右腕に道助が宿ったんだろ。」

覚つたように言った。

進「ふうん……何かイメージと違つや。」

K「で、今何か出来そつか？」

進「ちよつと待つて……」

とりあえず、持っている槍を上から下にぶんと軽く振り下ろした。

進「あれ？ 何でだろ？ あんまり重くないや。」

二、三回ほどじょに振り回した。

K「それはお前さんに道助が憑依しているから、お前さんの肉体的負担があまりかかるないからだ。」

進「なるほどね。」

肩の辺りのまじまじと見つめた。

K「それじゃ、しづらくなその状態でいるんだ。ある程度そうしていれば、体が自然と慣れてくる。」

進「わかった。でもその間どうようかな。」

道「（では、今から私が、進に槍の使い方を教えましょ。）

進「うん、じゃあ頼むよ、道助。」

と言つた後で、そのまま進は道助の教える元、槍の練習を始めた。その様子を、Kと妹紅は変わらず見届けていた。

K「・・・しかし、こんなに早く出来るたあ大したもんだ。」

妹「素質は十一分にある・・・か。」

K「まあ、その方が教えるのも楽でいい。」

妹「教えるつて・・・お前わざからただ見て言つてるだけ・・・」  
とその時、妹紅の言葉を遮るよつて、その場に雄たけびのよつな声が響いた。

チ「あーーもづーー退屈すぎーーじつとしてるなんてあたいの性こ  
合わないよーー。」

起き上がり、その場でわめきだした。

進「ちよつとチルノ、おとなしくしてよ。」

チルノに近づき、説得しようとしたが、聞く耳など持つそつがない。

チ「うるせー!! 元はと言えばあんたがわびしいとか言つからつってきたのに、こんなに退屈なんじや嫌になるよーー。」

妹「何だお前、そんなに退屈なのか?」

二人に歩み寄つてきた。

チ「当然でしょ!! 寝てて楽しい訳ないじゃない!!」

妹「そうか。あたしも丁度暇してた所だ。今から一戦、あたしとやらないか?」

背後からつづらと炎を出し、チルノに軽く挑発する。その様子にチルノは、

チ「へん!! あんたなんかにあたいの相手が務まると思つてんの! ?」

自慢げに妹紅を指差した。

妹「やれやれ・・・この妖精は、口の利き方を知らないようだな。」

うつすら出していた炎を強めた。

今にも戦いを始めそうな二人にKが

K「おいおい、弾幕! つづるな!!」から離れてやつてくれ。俺達が巻き込まれちゃいい迷惑だ。」

と呼びかけた。

妹「わかつてゐる。じゃあ、空中戦でいいな？」

チ「上等……ど！」でやううと、サイキョーなあたいの勝利にゆるぎなし！…」

そつ言つて、二人とも木々よりも高い所に飛んでいった。

妹「先に言つとくけど、あたしはあんまり加減できないよ。」

チ「加減～？それはこいつの台詞よ…。」

両者、相手に向かつてそれぞれ構えた。

妹「（さて、やつ出るか・・・）」

チルノをじつと見据えていると、チルノが手を上にして攻撃を構えていた。

チ「先手必勝！…」

手を前に出し、氷の弾幕を妹紅に放つた。

妹紅はそれを、手で形成した炎の壁で防いだ。

妹「やれやれ、いきなり攻撃か。こんな何の考えのない攻撃じゃあたしには・・・」

壁を解いた時、さつきまでそこにいたチルノがなぜかいなくなつて

いた。

妹「ん？ 一体どう……」

周りを見回していると、上空から何かが急降下する音がしてきた。

妹「まさか……」

ぱつと上を見ると、チルノがきりもみ回転しながら妹紅にとびかかり、いや、けりかかってきた。

チ「チルノ・アイスキイイツクッ！！」

寸前で確認できた妹紅は、そのとび蹴りを避けてかわした。

チ「なにい！？」

勢いがありすぎたのか、下の森にそのまま突っ込んでいった。

妹「……何なんだこいつは……だがさつきの攻撃は少し焦った……判断が遅れていたら当たっていたかもしれない……」

チルノが落ちた所をじっと見る。

チ「まだまだあ……」

落ちた所から、チルノは妹紅より一回り大きい氷の塊を飛ばしてきました。

妹「おつと、」

その塊をひらりとかわした。

チ「へん……わっさから避けてばっかりね、あんた……」

妹紅のいる高さまで、再び飛んできた。

妹「それもそうだ……そろそろあたしも攻撃するしちょう。」

右手に炎を集め、そして、

妹「そらー。」

その手を袈裟に下ろし、その軌道を描く炎の壁をチルノに放った。大きさ的にはチルノでは避けれそうにない大きさだ。

チ「この程度なら……」

全身を氷に包み、その壁に向かっていった。

チ「あたいにはねるこぐらこよーーー！」

勢いよくその壁を突き破った。

チ「覚悟しなさいーーー！」

その勢いで、妹紅に突撃していった。

妹「読んでたよ。」

左手に炎を纏わせ、その手で向かってきたチルノを氷ごと殴り飛ばした。

チ「いつたあ！！」

氷が砕け、殴られた勢いで地面に落ちそうになつたが、今度はどうにか空中で体勢を整えた。

チ・よ・く・も、やつてくれたわねえ！」

&lt;div[](https://i.imgur.com/3H7zJLW.jpg)

&lt;div[](https://i.imgur.com/3HhDf.png)

の上に立つて、恐る恐る、一戸建ての大きな氷がチルノの頭の上に落とした。

チ  
テ  
く  
ら  
・  
・  
・  
・  
・

それを投げようとした瞬間、手が滑って自分の頭部に落着し、鉢い音を鳴らした。

チリノは声を出さ事なく地面に落としてしまつた。

妹

その様子に呆れて、もつ吐すら出なかつた。

その頃、進は槍の使い方の練習を終え、道助との憑依を解いて木にもたれかかり、座つて休んでいた。

進「ふう・・・

K「どうだ？初めてする憑依は？」

進の隣に立ちながら尋ねた。

進「じうじて・・・思つたより普通だつたて言つのかな・・・」

K「坊主はどんな奴を想像してたんだ？」

進「えーっと・・・漫畫とかでよく見る感じかな？」

K「ほあ～、なるほど。」

進「あ、そうだ。Kおじさんの式神つて、どんな奴なの？」

K「俺のか？俺のは・・・簡単に言つたら、犬と猿と雉だ。」

進「へえ～・・・何だか桃太郎みたいだね。」

K「やうやく俺自身で覚してゐる。」

進「ははは、そつだよな。」

K「・・・」

急に神妙な顔つきになつて、進を見つめた。

進「えへんじたの。」

K「いや・・・お前さんを見ると、何となく懐かしい感じがしたんだ。」

進「懐かしい感じ?」

K「お前さんへ話してなかつたか。今から十年ぐらい昔の話だ。俺は・・・それより昔の記憶がないんだ。」

進「え? 本当なの?」

K「ああ、その時に覚えていた事つて言つたら、メシが作れた事がらいだ。」

進「そりなんだ。で、僕を見てて懐かしい感じがしたの?」

K「ああ、だがそれが何かは、わかる訳ないが・・・」

進「今まで思つて出したそりなんだって、あつたの?」

K「・・・何度もあつたが、どれも断片的すぎた。とてもじやない

が思い出すには不十分だ。まあ、思い出をなくしても、俺自身は今的生活に満足してる。思い出せないのなら、俺自身が思い出したくないだけだろ。」

進「・・・」

Ｋ「おっと、しめっぽくなつちまつたな。すまん。」

進「・・・別に。」

Ｋ「そうだ、お前さんに渡しとく物があつたんだ。」

自分の袖から、<sup>スル</sup>何かを取り出した。  
取り出したものを、進に渡した。

進「これって・・・」

それをまじまじと見てから、Ｋを見た。

Ｋ「武神の宿つた御札だ。これからのお前さんの力になつてくれるはずだ。」

進「これを・・・僕に?」

Ｋ「ああ、いくら道助が強くても、一人だけじゃ後々苦労するだろ。使い方は自分で考えてくれ。」

進「Ｋおじさん・・・ありがと。」

Ｋ「まあ、俺のお下がりだから、ちゃんと使えるか微妙だが・・・」

進「ええ～？大丈夫なの？」

K「なーに、式神に老いとかはない・・・」

と言つていると、妹紅がチルノを抱いできたのに気がついた。

K「お、弾幕！」これは終わつたか？」

妹「ああ。一応あたしの勝ちかな・・・」

そつ言いながら、チルノを地面に降ろした。

進「一応つて？」

妹「ああ、こいつが自分の氷で下敷きになつたんだよ。だからだ。」

進「・・・ははは、チルノらしいや。」

今だ目を回して気絶しているチルノに目を配つた。

K「お、案外冷静じゃないか。」

進「だつて、こんな事つて幻想郷じゃ日常茶飯事なんでしょう？じゃあいちいち心配してたらきりがないよ。」

妹「自滅する奴は珍しいけどな。」

進「あ、それはそうだね。」

一同、少しばかり笑つた。

進「じゃあ、僕とチルノはそろそろ陸たちに合流しなきや。」

K「ああ、そうだったか。そつ言えばあいつらはどこに行つているんだ？」

進「陸たち？白玉樓らしいよ。」

K「白玉樓・・・ああ、あの冥界にある所か・・・」

妹「そんな所に行って、大丈夫なのか？」

進「大丈夫だよ。陸たちは僕と違つて、ちゃんと戦えるんだから。」

その頃、雪が積もつた白玉樓の庭にて、倒れている者が三人と立っている者が一人いたのであった。

## 第1-8章 進の憑依術（後書き）

後書き

修行編、これにて終了です。

これからは大方の人の予想通り、白玉楼編へと突入します。

雪の積もった白玉楼に、一体何が起きたのか！？それは当然後々つて事で。

進もいよいよ戦えるキャラになれたので、その内誰かと戦わす予定ですよ～。

あ、今のわしは文化祭でこれでも割と忙しい身分なんですが、それでもわしはこっちも頑張りますよ。

では、第19章をお楽しみに。

お知らせ

これからのおじりの小説は、バクテリアではなく、澄田のアカウントで投稿させていただきます。

なので、おじりの方は事実上の凍結とさせていただきます。  
あ、心配しなくても大丈夫ですよ？あくまでアカウントが変わる以上、そつちに移転しなければならないだけなので、これからも澄田の小説はしっかりと投稿していきます。

なので、質問や評価やレビューをお気に入り登録などは、おじりの方でお願いします。

お手数をおかけして、真に申し訳ございませんでした。 m (—) m  
これからのおじり澄田に、是非ともご期待ください (#^\_\_^#)  
や、少し時間がかかりますので、それまでお待ちくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8807m/>

---

三人一緒に幻想入り ~ the three heros and new trouble .

2010年10月29日13時10分発行